【東方×遊戯王】

和泉朝人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷に起きた「異変」。
それはとあるカードゲーム、「遊戯王」によるものであった。
そんな中、幻想郷に流れ着く男。
その男もまた、一人の「決闘者」であった……。

目次

始まりは次元の裂け目より ―― 1
大寒波纏う妖精 ―― 11
吹き荒れる妖精の風 ―― 24
時の魔術師の瀟洒なお仕事 ―― 44
紅く煌めく賢者の宝石 ―― 61
壊された封印の鎖 ―― 69
死を呼ぶ悪魔のくちづけ ―― 85
星屑瞬く運命の分かれ道 ―― 104
進化する翼はためかせ ―― 120
降り下ろされる魂喰らいの魔刀 ― 142
闇を照らす星屑のきらめき ―― 148
ワンショット・ブースター ―― 168
ブリザード・プリンセスズ ―― 180
森に隠れるキャッツ・フェアリー 197
舞い踊るレインボー・ヴェール ― 214

始まりは次元の裂け目より

「き、きゃあああ！」

暗闇の中、妖精に襲いかかる化物。その手に持つ槍は、月の光を跳ね返し、鈍く光る。その槍は脇に逸れることなく直撃し、妖精の体は吹き飛ばされる。その妖精の手元から辺りにカードが飛び散る。直後乾いたピリリリリ、ピー、という電子音が聞こえる。

「ふん、大口叩いてた割には大したことないのね、がっかりしたわ。」

化物の傍らに佇んでいた少女はつまらなそうに吹き飛ばされた妖精を眺める。彼女の背のコウモリのような翼がはためき、彼女は宙に浮く。そのまま少女は飛び去ってしまった。

後に残された妖精は、あたりに散らばったカードを見回しながら今にも消え入ってしまいそうな小さな声で呟く。

「ごめんね……みんな……。」

～～

現在、幻想郷ではカードゲームが流行となっていた。

その発端は、ある神社での会話であった。

「なぁ霊夢、こんなもの拾ったんだけどさ。」
　いかにも魔法使い、といった黒い帽子を被った金髪の少女、霧雨魔理沙はこの博麗神社の巫女、博麗霊夢に手に持ったものを見せた。大きさは霊夢が持っているような護符などと変わらないのだが、その見た目が全く違う。
「何よ、これ。見たところ何かの遊戯に使うものに見えるけど。」
　霊夢は魔理沙の持っているものを適当に眺めて至極どうでもよさそうに答えると、魔理沙はニヤリと笑う。
「これは遊戯王、っていうカードゲームらしいぜ。このカードを４０枚ずつくらい使って戦うんだってよ。」
　魔理沙は活目せよ、と言わんばかりに手に持った「ネクロフェイス」を霊夢の顔の前にぐいと押し出す。そのグロテスクな見た目に霊夢は顔をしかめた。
「で、それ以外にはないの？今の話じゃそれで遊ぶには８０枚は必要なんじゃないの？」
「ぐっ……さ、探せばきっと他にも見つかるぜ！」
「無いなら無いって言いなさいよ……。」
　霊夢は呆れてごろりと床に転がる。そしてひとつ大きな欠伸をする。
　その霊夢の顔の上に、大量のカードが降り注いだ。
「ちょ、霊夢!?大丈夫か？」

「……紫。アンタいい度胸ね。人様の家にスキマで現れた上に顔に大量の紙落とすなんて。」
「あら、貴方が必要そうだったから持ってきてあげたんだから感謝しなさい。」
八雲紫はスキマから這い出て、ちゃぶ台の脇に座る。
霊夢は紫を批難するのを諦めて、自分に降り注いだ遊戯王のカードを手に取る。
「ふぅん……。ルールは知ってるの？」
「お！やる気になったか！」
「ルールなら私が分かってるわ。」
紫は手に持ったルールブックを振る。
「そう、ならちょっとやってみましょうよ。」
霊夢は面白いものを見つけたかのような表情で、そう言った。
～少女学習中～
一通りルールを見たところで、霊夢と魔理沙は向かい合って座った。
「さて、とりあえずライフポイントの４０００を０にすればいいんだろ？絶対負けないぜ、霊夢！」
「なんだか頭を使うもので貴方に負ける気はしないわね。」
「へっ、言ってろ。今に泣きを見るぜ。」

「「デュエル！」」
「それじゃ先行は魔理沙よ。先行は攻撃できないわ。」
紫がコインを投げて先行と後攻を決める。
「それじゃ、ドローだぜ！」
魔理沙　ＬＰ４０００　霊夢　ＬＰ４０００
「私は手札から、ジェネティック・ワーウルフを召喚だぜ！」
魔理沙がフィールドにモンスターを置いた途端、カードから光のエフェクトが出て、その人狼が実体を持ち、魔理沙の前に立った。
「えっ!?どういうことだ!?」
召喚した魔理沙本人が驚いている。当然霊夢と紫も同様である。
「カードのモンスターが実体化するなんてどうなってんのよ?」
「さあ……幻想郷に持ってくるとこうなっちゃうのかしら?」
もしこれが遊戯王が元々あった所なら、すぐにやめておくところだが
「面白いからこのまま続けようぜ！私はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」
魔理沙　手札3　モンスター　ジェネティック・ワーウルフ（Ａ２０００）魔法罠2
魔理沙は面白がって続けようとしている。
「仕方ないわね……。私のターン、ドロー。」

霊夢はやれやれといった風にカードを引く。
「私はモンスターをセット。そしてカードを3枚セット。ターンエンド。」
「攻撃しないと勝てないぜ、霊夢！」
「五月蝿いわね……こっちだって考えてるのよ。」
霊夢　ＬＰ４０００　手札2　モンスター　裏守備１　魔法罠３
「私のターン！ドロー！」
魔理沙はやたらノリノリでカードを引いている。
「私はブラッド・ヴォルスを召喚！」
フィールドに斧を持ったモンスターが現れる。その顔は醜悪で、斧は血をたくさん吸ったような怪しい輝きを放っている。
「さらに！私は二重召喚を発動！そして、二体のモンスターをリリースして青眼の白龍を召喚だぜ！」
魔理沙のフィールドにいる二体のモンスターが光を放ち、溶けるように消える。
そしてフィールドに、巨大な流線型の白龍が出現する。
「行くぜ、バトル！私はその伏せられたモンスターに攻撃！」
白龍はその口を大きく開ける。そこから青いエネルギーが放射される。
「ニードルワームのリバース効果！貴方のデッキから5枚墓地に送るわ！」

滅びの爆裂疾風弾　青眼の白龍　融合　団結の力　死霊騎士デスカリバー・ナイト

「ああ！滅びの爆裂疾風弾が！でもお前のそのしょぼいモンスターは破壊されるぜ！」

放射されたエネルギーによって霊夢のモンスターは破壊される。

「これで私はターンエンドだ！」

魔理沙　ＬＰ４０００　手札１　モンスター　青眼の白龍（Ａ３０００）　魔法罠２

「ドロー。私は浅すぎた墓穴を発動。墓地からお互いモンスターを一体選んでセットするわ。私はニードルワームを伏せる。」

「私は二体目の青眼の白龍を伏せるぜ。そんな弱いモンスター出してどうすんだ？」

魔理沙の言葉に霊夢は全く耳を貸さず、自分のターンを続ける。

「私はモンスターを一体伏せて、ターンエンド。」

霊夢　ＬＰ４０００　手札１　モンスター　裏守備２　魔法罠３

「ドロー！ここでリバースカードオープンだぜ！リビングデッドの呼び声を発動！私は墓地からジェネティック・ワーウルフを特殊召喚！私は手札から魔法、モンスターゲートを発動！ジェネティック・ワーウルフをリリースして通常召喚ができるモンスターが出るまでカードをめくり、そのモンスターを特殊召喚するぜ！」

大嵐　リビングデッドの呼び声　魔道士の力　カオス・ソルジャー　―開闢の使者―

青眼の白龍

「ということで青眼の白龍を特殊召喚！さらにセットされた青眼の白龍を反転召喚！」
巨大な白龍が広くない霊夢の部屋に三体現れる。
「……私の部屋が心配になってきたわ。」
「まーまー、そのへんは気にしないべきだぜ。このままバトルだ！青眼の白龍、やっちまえー！」
三体の白龍が霊夢に襲いかかる。
「まず一体目、ニードルワーム。デッキから5枚墓地に送る。2体目。ニードルワーム。デッキから5枚墓地に送る。最後は……受けるわ。」
白龍の口から放たれたエネルギー砲が霊夢を襲う。
「う、ゲホッ……。なんでただのカードゲームなのにこんなに痛いのよ……。今にも倒れそうだわ……。」
「そんなんスペルカードでの戦いでも同じだろ。気にしない気にしない。まあ私はターンエンドだぜ。」
魔理沙　ＬＰ４０００　手札１　モンスター　青眼の白龍（３０００）×３　魔法罠１　リビングデッドの呼び声
「……ドロー。」
霊夢はフラフラしながらデッキからカードを引く。

「もう一発攻撃を喰らいたくなければ負けを認めてもいいんだぜ?」
　霊夢のライフポイントは残り１０００。あと一撃でも攻撃を受けたら負けである。
「……私は、伏せておいた罠、強欲な贈り物を3枚発動!貴方はカードを2枚ドローする。それが3枚だから合計6枚ドローしなさい。」
「は?なんでドローさせるんだ?意味がわかんないぜ。」
　魔理沙はよくわからない表情でカードを引く。
「私は手札から、手札抹殺を発動!お互い手札を全て捨てて、その枚数だけカードをドローする!」
「なっ!?」
　霊夢　ウォーム・ワーム
　魔理沙　死者蘇生　レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン　巨竜の羽ばたき　龍の鏡　ブラックホール　超再生能力　融合解除
「ああ!色んな切り札が!全部墓地に!」
　魔理沙はその場に崩れ落ちる。
「……。」
　霊夢は無言で魔理沙を眺める。
「ちくしょう!でも私のフィールドには青眼の白龍が3体いるからな!」

「……ターンエンド。」
霊夢は魔理沙の言うことをスルーして、ターンを終わらせた。
霊夢　ＬＰ１０００　手札１　モンスター０　魔法罠０
「フィールドに何も無いなんてどうやっても勝てないぜ！私のターン！」
ドロー、と言おうとした時、魔理沙はあることに気がついた。
「……なあスキマ妖怪、もしデッキがなくなってる状態で私のドローフェイズが来たらどうするんだぜ？」
とても嫌な予感を感じつつ、魔理沙は紫に尋ねる。
紫はにっこりと笑って
「それは当然、ドローできなくなった時点で負けよ。説明したでしょ？」
そうあっさり答えた。
「う、うわぁぁぁぁぁ!!!」
魔理沙　手札７　モンスター　青眼の白龍（Ａ３０００）×３　魔法罠１　リビングデッドの呼び声
デッキ　０
～～
その後、霊夢に敗北した魔理沙は、悔しさから霊夢に勝つためにデッキを強化してい

くが、霊夢もだんだんとデッキを強化していって、勝つことはできていない。
だが、魔理沙と霊夢が遊戯王というモンスターやダメージが実体化するスリリングなカードゲームにハマっているという噂から、幻想郷中で流行り始める。
また、デュエルをするためのマシン、デュエルディスクが幻想郷に登場し、一大人気を誇った。
しかし、そのうちにアンティルール、すなわち敗者は、勝者にカードを一枚渡さなければならないというルールを使用してデュエルを仕掛けるものが現れ出す。
それが広まっているこの状況そのものが「異変」なのである。

そんな中。
「ここは……？」
一人の男が、幻想郷に流れ着いた。
【ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……】

大寒波纏う妖精

……地面に倒れた妖精は、ぼんやりと今のデュエルを思い返す。
彼女は、何もできず、ただ一方的に攻撃されただけだった。
……圧倒的敗北。
彼女のデッキは全く歯が立たず、「決闘」にすらならなかった。
体は傷つけられ、意識も朦朧とする。
ああ、もうそのまま寝てしまおうか。そう思い始める。
でも、散らばったカードは誰でも拾うことが出来るだろうから、盗まれてしまうかもしれないと考える。
ふと、彼女のうっすらと開いていた目に、こちらへ歩いてくる男の姿が映る。
赤い帽子を目深に被った赤いジャケットの男は、傷ついた彼女の姿を見つけたのか走り寄ってくる。
彼女の意識は、その辺りで途切れてしまった。
その時考えていたのは、友達に貰ったカードだけは盗られないといいな、と言うことだった。

「……ちゃん、大ちゃん！」
聞きなれた友達の声で、私は目を覚ましました。
「……チルノ……ちゃん？」
話しかけて安心させようとしたけれども思っていたより声が出ませんでした。意識を失うくらいだから割とダメージがあったんでしょう。
「大ちゃん！よかったー！」
チルノちゃんは私が意識を取り戻したのに気がついて、思いっきり抱きついてきました。
勢いが強かったので、結構痛いです……。
「チ、チルノちゃん、痛いよ……。」
「意識が戻ったか、良かったな。」
チルノちゃんの後ろから現れた男は、意識を失う寸前に見た男の人でした。
「あ、この人がここまで連れてきてくれたんだよ！」
「そうだったんですか、ありがとうございます。私は大妖精です。貴方のお名前は？」
ふと気になって私が尋ねると
「ああ、俺は鹿野　遊太（かの　ゆうた）だ。」

そして少し暗い顔になって

「……実は、気がついたらここにいたんだが、ここはどこなんだ?」

自分では見れないが、私はきっと何を言っているのか、といった顔をしていたんだと思います。

「え、ここは霧の湖の近くの私の家ですけど?」

そう答えると遊太さんは難しい顔をして、考え込んでしまいました。

「……やっぱり聞いたことないな。」

「もしかして遊太は外来人なんじゃないの?」

「そうだ、遊太さんはどこの方なんですか?」

「ええっと……俺はネオ童実野シティのシティの辺りかな。」

その言葉を聞いて私は確信しました。ネオ童実野シティなんて地名はこの幻想郷にはありません。よって私はこの人に説明することにしました。

「ここは幻想郷というところです。おそらく何かの原因でその場所からこちらに送られてきたんでしょう。」

それを聞くと遊太さんはしばらく呆然としたあと

「……まあ、よくあることか。」

そう、言いました。

「いや……よくはないと思いますけど……。」
　自分の知らないところに突然飛ばされたというのに何故それを当然のように受け止めているのか私には全く理解出来ないです……。
「そういえばこれは君のデッキか？」
　遊太さんが差し出した右手に持っていたのは地面に散らばっていた私の遊戯王カードでした。
「あ、これは！ありがとうございます！……それと、遊戯王はご存知なんですか？」
　私が尋ねると、突然遊太さんはベッドに両手をついて楽しそうな顔になりました。
「当然だ！遊戯王は俺の人生だ！」
　そこまで全力で言い切られると困るのですけれども。
「そーなんだ！じゃあたいとデュエルしよ！」
　チルノちゃんがやる気になって自分のデッキを取り出しました。
「よし、いいだろう。」
　遊太さんも乗り気で、背負っていたバッグの中をゴソゴソあさり始めました。
　少し気になって体を起こして中を覗いてみた私は衝撃を受けました。
　その中には大量のストレージボックス、デッキケースが入っていました。
　……ですが、遊戯王以外のまともなものが入っていないと言う問題もあったんですけ

れども。

むしろよくこの装備で外からやってきて生きていたと思えます。

「……よし、今日はこいつにしよう。」

その中から取り出したのは金色の翼のあしらわれたデッキケースでした。

そしてその中身を慣れた手つきで左手に設置されたデュエルディスクに設置しました。

「あたいも準備できたよ！」

気がつくとチルノちゃんもデッキを自分のデュエルディスクに設置していました。

「そうか、それじゃ行くぞ。」

「「デュエル！」」

遊太　ＬＰ４０００　チルノ　ＬＰ４０００

「先行はあたいよ！ドロー！」

チルノちゃんはカードを引き、そのカードを見ました。そして満面の笑みになりました。

「これはいいカードを引いたわ！あたいはモンスターをセット！カードを2枚セットして、ターンエンドよ！」

チルノ　ＬＰ４０００　モンスター　裏守備１　魔法罠２　手札３

「一体どれがいいカードなんだ……。まあ、ドロー。」
遊太さんは落ち着いてカードをドローしています。やはり慣れているようです。
「俺は手札からサイクロンを発動！その右側の伏せカードを破壊する！」
遊太さんが手に持っている魔法カードから、突風が巻き起こり、チルノちゃんの伏せカードを吹き飛ばしました。
「あぁ！私のグラヴィティ・バインドが！」
チルノちゃんがショックを受けている正面で、遊太さんはじっとチルノちゃんを見ています。何か気になることでもあるのでしょうか。
「俺は光の護封剣を発動！お前のフィールドのモンスターを全て表側表示にする！このカードは相手のターンで数えて3ターンのあいだフィールドに残る。このカードがフィールドに残る限り攻撃できない！」
手札からフィールドに置かれたカードから3本の剣が現れました。
そして、チルノちゃんの伏せられたモンスターが表側になります。
「あたいのモンスターは氷結界の御庭番だよ！」
表側になったことでフィールドに2本の刀を持った青い服の戦士が現れました。
「ふふん！護封剣はメイン2に発動するといいんだよ！あたい知ってる！」
「おーえらいえらい、俺は霞の谷のファルコンを召喚！」

遊太さんはチルノちゃんを適当に褒めて、モンスターを召喚します。フィールドに剣と盾を持った翼のある戦士が現れました。

「バトル！霞の谷のファルコンの効果によって、光の護封剣を手札に戻し、氷結界の御庭番に攻撃！」

霞の谷のファルコン　Ａ２０００　氷結界の御庭番　Ｄ１６００

「ぐぅ……あたいのモンスターが……。」

「グラヴィティバインドから何かしらのロックデッキ、そして見た目が氷っぽいから氷結界とは読めた。だから一応護封剣で確認して、再び手札に戻す。まあ【セルフ・バウンス】なら割と見る戦法だな。」

相手を見ただけで既にデッキを把握するなんていくらなんでも慣れすぎていると思います。

「それじゃ、光の護封剣発動、そしてカードを2枚セットして、ターンエンド。」

遊太　ＬＰ４０００　モンスター　霞の谷のファルコン（Ａ２０００）魔法罠２

光の護封剣　手札１

「よし！あたいのターン！ドロー！相手フィールドのカードがあたいより４枚以上多いじから、氷結界の交霊師を特殊召喚するわ！」

チルノちゃんのフィールドに長い髪をした女性が現れました。

「このモンスターがフィールドにいる限り、1ターンに1度しか相手は魔法罠を発動できないよ！」
「あーそれは予想通りだ、そいつを対象にしてセットカード発動！デモンズ・チェーン！そのモンスターは攻撃できず、効果は無効だ！」
今のモンスターに鎖が巻き付き、動きを止めます。
「うえぇ!?うーん、それじゃ氷結界の軍師を召喚してターンエンドよ！これで護封剣は1ターン目ね！」

チルノ　ＬＰ４０００　モンスター　氷結界の交霊師（Ａ２２００）　氷結界の軍師（Ａ１６００）魔法罠１　手札２
「俺のターン、ドロー。……。」
遊太さんはカードをドローして固まりました。
「ふふん、どうやら何も出来なくて困ってるみたいね！」
チルノちゃんは余裕そうですが、私は見てしまいました。
彼が口角を上げて、にやりと笑ったのを。
「……俺は手札から、インフルーエンス・ドラゴンを召喚！」
フィールドに金属質な青い色の竜が現れます。

「霞の谷のファルコンにインフルーエンス・ドラゴンをチューニング！」
「お！シンクロだ！」
チルノちゃんはワクワクしてますけど、正直そんな場合じゃないと思います。
「霞に住まいし雷神よ、今こそ我に力を授けよ！」
竜の体が消え、代わりに現れた3つの緑の輪が、鳥獣の戦士を囲み、その中心にまばゆい光が生まれます。
「シンクロ召喚！現れろ、霞の谷の雷神鬼！」
中から現れたのは翼のついた巨大な鬼でした。その鬼は現れると同時に大きな声で吠えます。
「そして、手札からビックバン・シュートをチルノの氷結界の交霊師に装備！」
「え？なんであたいのモンスターに？攻撃力が上がったし貫通効果もついたよ？」
「ビックバン・シュートにはもう一つ効果がある。このカードがフィールドから離れたら、装備してたモンスターは除外される！俺は雷神鬼の効果発動！フィールドのカード1枚を手札に戻し、攻撃力を５００アップする！もちろん戻すのはビックバン・シュート！」
鬼の巻き起こした風によって、装備カードが手札に戻り、チルノちゃんのフィールドの交霊師は除外されました。

「ああ！交霊師が！」

「さて……手札に戻ったビックバン・シュートを氷結界の軍師に装備！ここで伏せられたリビングデッドの呼び声を発動！インフルーエンス・ドラゴンを蘇生！インフルーエンス・ドラゴンの効果発動！雷神鬼をドラゴン族にする！そして、雷神鬼にインフルーエンス・ドラゴンをチューニング！三の牙を持つ竜よ、その炎で敵を焼き尽くせ！シンクロ召喚！出でよ、トライデント・ドラギオン！」

　現れたのは頭が三つある巨大な真っ赤な竜で、チルノちゃんがとても小さく見えます。

　チルノちゃんも呆然としていてもうこれは駄目そうです。きっとあの様子じゃ伏せてあるカードはブラフなんでしょう。

「こいつの効果！自分フィールドのカードを2枚まで破壊できる。そしてその数だけ追加攻撃出来る！俺はビックバン・シュートとリビングデッドの呼び声を破壊！そしてビッグバン・シュートの効果により氷結界の軍師も除外だ！そしてバトル！食らえ、トライデント・ドラギオンで三連打！」

　赤い竜のそれぞれの口から、物凄い熱量の炎が吐かれ、チルノちゃんを襲いました。

　トライデント・ドラギオン（Ａ３０００）×３　チルノ　ＬＰ４０００―９０００＝―５０００

「い、いやぁぁぁぁぁぁ！」

チルノちゃんは炎に包まれて、ＬＰをあっという間に失いました。

……え？炎に包まれて？

「わぁぁぁ！遊太さん！チルノちゃん溶けちゃう！」

「え、あれ？実際のダメージになってる!?」

遊太さんはびっくりしてましたが、すぐにデュエルディスクを止めました。

炎は消えて、そこにいたチルノちゃんは若干溶けかかっていました。

「……たいも……。」

「え？チルノちゃんなんて？」

チルノちゃんが何か言ったので、私が聞き返すとチルノちゃんは勢い良く起き上がりました。

「あたいもせるふぼうんすする！」

「チルノちゃん……強かったのはわかったけどすぐ影響されるとデッキ内容が……。」

「いや、氷結界ならそうでもない。こいつを使えばすぐ出来る。」

そう言って遊太さんは一枚のカードを取り出しました。あれだけのカードの中からいったいどうやって望んだカードを取り出したというんでしょうか。

「氷結界の虎王ドゥローレン？……おお！氷結界だ！」

チルノちゃんはモンスターを見るなり顔を綻ばせました。まさか自分の使っている氷結界だなんて思っていなかったのでしょう。
「ただ、セルフバウンスをするならそれなりにいじらないと伝道師を利用したリビングデッドの使い回しとかロックカード手札に戻して自分は攻撃出来るとかくらいの利点しかないな。」
それって充分な利点だと思うんですけれども……。
「それじゃ、それとあたいの持ってるこのカードを……。」
交換を持ちかけようとしたチルノちゃんを制して遊太さんはドゥローレンを渡しました。
「大抵のカードは持ってるからいいよ。そもそもこいつは余ってる。」
ドゥローレンはそれなりにレアなカードだと思いますが、遊太さんにとっては対したことのないカードのようです。
ドゥローレンがチルノちゃんの手に渡り、チルノちゃんが大変喜んでいるところで遊太さんは私の方に向き直りました。
「……で、忘れてたけど大妖精、お前なんであんなところに倒れてたんだ?」
「なんでここまで連れてきておいて倒れてたことを忘れてるんですか!」
「い、いやぁ……聞こうと思ってたんだけど新しいインフェルニティループを考えてた

らすっかり忘れちゃって……。」

「私のことはインフェルニティのループよりどうでもいいんですか！」

ここまで遊太さんをすごい人だと思っていましたが、今まで積み上げていたところに川が流れるくらいの勢いで吹き飛びました。この人完全にダメな人です。

怒ってても仕方ないので、私は深い溜息をして落ち着く。

「……えぇっと……。」

私はゆっくりと少し前のことを思い出し始めた。

（続く）

吹き荒れる妖精の風

「あの時、私はお買い物に行こうと思って外に出たんです。」
　そう、私は別に特別なことをしていたわけではなかったんです。私は普段通り出かけただけでした。
「そしたら、ちょうど私がいた辺りで、紅魔館の吸血鬼さんと会ったんです。そして、突然デュエルを仕掛けられました。」
　そして、私はあっさりと敗北してしまいました。
「そのデュエルにあっさり負けて、気を失いかけているところに遊太さんがいらしたんです。」
「……そうか。吸血鬼とかデュエルに負けて気を失うとか色々気になるところはあったが分かった。」
　遊太さんは私の話を聞いて神妙に頷いています。
「でも、カードは取られなかったですし怪我もそれほどでもなかったのでよかったです。ひどい人だとデッキを丸ごと奪ったり、連続でデュエルし続けて大怪我をさせたりするらしいですから。」

あまり心配させないように、軽く笑って言おうとしましたが、口がひきつってしまってうまく笑えませんでした。自分ではそれほど気にしてないつもりでしたが、あの血のように真っ赤な槍に貫かれるのではという恐怖に手が小刻みに震えてしまいます。

その私の様子を見てか、遊太さんの表情が険しくなる。彼の手が強く握り締められています。

「……許せないな。遊戯王を人を傷つけるために使うなんて。」

彼自身、遊戯王がとても好きだからこそ出る言葉だと思います。

そして彼は私の両肩をがっしりと……えっ？

「え、ちょ、遊太さん!?」

正面から向き合ってしかも両肩を掴まれている状態ですと、その、大変顔が近かったりします……。

「……よう。」

遊太さんが何か言いましたが、よく聞こえません。

「リベンジをしよう！」

私に向けられた目は燃えるような闘志に満ちています。なんか熱いです。

「へ？」

「さあ、そうと決まったら練習だ！まずは相手ライフ１６０００、自分ライフ１００の状

態からデュエルスタートして勝つんだ！」
　遊太さんがデュエルディスクをいじると、ｖｓＣＰＵの詰めデュエルが始まりました。
「え、えええっ!?ちょ、ちょっと待ってくださいい！」
「待たない！さあ、どうする?」
　遊太さんは全く容赦せずに始めてしまいました。

　湖畔の夜風は冷える。
　風を切って空を飛ぶ私の体を徐々に冷やしていく。
　何故こんな月の綺麗な、そして肌寒い夜にこんな所を飛んでいるのかと言うと、前日に届いたやたら丁寧な字で書かれた「決闘の申し込み」と書いてある手紙のせいである。
　それは、この前私がデュエルでこてんぱんにした妖精だった。
　妖精は対して強いデュエリストでもなかったので、無視してしまえば良いと従者に言われたのだが、私は売られた喧嘩は買う主義なので、重い足を引きずって、もしくは重い羽を無理やり動かしてわざわざここに来たのだ。
　手頃な地面を見つけて、スピードを落として着陸する。
　ふわりと音を立てず優雅に着陸出来たので、少しだけ満足する。

「……来ましたね、レミリア・スカーレットさん。」
　目の前にいるのはあの妖精だった。
「仕方ないから来てあげたわ。私も暇じゃないから、さっさと始めましょう。」
「……そうですね。」
　ふと周りを見回すと、近くに氷の妖精と、見慣れない赤い帽子の男がいる。
「あれは、貴方のお仲間かしら？見慣れないのもいるけれど。」
「あの赤い帽子の方は、外来人の鹿野　遊太さんです。とても強いデュエリストです。」
　強いと聞いて、赤い帽子を眺めるが、その男は腕を組んで口を引き結んで黙っている。
彼の姿を見てもあまり強そうには見えなかった。
　まあ、それを確認したかったらこの子供を倒した後で、デュエルを申し込めばいい。
「さあ、はじめましょう。」
　相手の妖精の手に力が入る。
「「デュエル！」」
「先行は私ね、ドロー。」
　私はカードを引き、そして手札を確認する。そこからおおよその戦法を考える。と言っても先行で出来ることは少ない。
「私はモンスターをセット、カードを1枚セットして、ターンエンド。」

レミリア　ＬＰ４０００　モンスター　裏守備１　魔法罠１　手札４

「私のターン！ドロー！私は手札から永続魔法、神の居城ヴァルハラを発動！今私のフィールドにモンスターがいないから、私は手札から、次元合成師を特殊召喚します！」

フィールドに金属質の青いマントのモンスターが現れる。

「次元合成師の効果を発動します！デッキの一番上を除外して攻撃力を５００アップします！」

金属質の魔導師の手元に黒い球体、というより穴が生まれ、デッキのカードが吸い込まれていく。

次元合成師　Ａ１３００→１８００

「除外されたカードは勝利の導き手フレイヤです！そしてさらに私はジェルエンデュオを召喚します！」

２体のパペットのような天使が現れる。

「手札からフィールド魔法、天空の聖域を発動します！天使族モンスターのコントローラーは戦闘ダメージを受けません！」

周囲が浮遊する荘厳な雰囲気を漂わせた聖域が現れる。なるほど確かに天空に存在する聖域のようだ。

「バトルです！次元合成師で裏守備モンスターを攻撃します！」

攻撃を仕掛けてくる金属質の魔導師。
「私のセットモンスターはスノーマンイーター！」
現れた私のモンスターは雪だるまである。
次元合成師　Ａ１８００　ＶＳ　スノーマンイーター　Ｄ１９００
「スノーマンイーターの方が守備力が高いから戦闘破壊されないわ。そしてスノーマンイーターのリバース効果！貴方の次元合成師を破壊するわ！」
雪だるまから、吹雪が巻き起こり、金属質の魔導師が破壊される。
「くぅっ……！ですが天空の聖域の効果で私は戦闘ダメージを受けません！また、破壊された次元合成師の効果で除外された勝利の導き手フレイヤを手札に加えます！そして私はカードを2枚伏せて、ターンエンドです！」
大妖精　ＬＰ４０００　ジェルエンデュオ（Ａ１７００）魔法罠２　神の居城ヴァルハラ　天空の聖域　手札１
「私のターン、ドロー。」
あまりにいいカードを引いて、つい笑顔になってしまう。だがすぐに冷静に考える。
「私は深海のディーヴァを召喚！その効果によってデッキからリチュア・ディバイナーを特殊召喚！」
美しい女の人魚が現れ、その歌声に呼ばれ、海竜の占い師が姿を現す。

「リチュア・ディバイナーの効果！私はカード名を宣言してデッキの一番上を確認し、宣言したカードなら手札に加え、違ったら元に戻す。」

落ち着いて私は深呼吸をする。

「……私が選択するのは、黄泉ガエル！」

私は勢いよくデッキトップをめくる。

そのカードは……

「黄泉ガエル!?」

「……運命は絶対よ。運命には逆らえないのよ。私は黄泉ガエルを手札に加える！」

私の能力は「運命を操る程度の能力」。私が運命を操れば、このくらい容易いものである。

ただ、この能力があれば負けることはない、なんてことはなく、デッキトップを狙うにしても3回に1回くらい失敗する。正直かっこよく決まって良かったと安堵しているところである。

「私は、レベル3のリチュア・ディバイナーとスノーマンイーターをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築するわ！エクシーズ召喚！貫け！ブラック・レイ・ランサー！」

2体のモンスターが光の球となって、空を飛ぶ。そして生み出される銀河のような光

景。
　その中から、夜の闇に溶け込んでしまいそうな色をした体、そしてその中で怪しげに光を跳ね返す血のように真っ赤な槍を持つ騎士が現れる。
　その姿を見た相手の妖精は息を呑む。前に戦った時に止めを刺したモンスターがこのブラック・レイ・ランサーなのだから当然であろう。
「ブラック・レイ・ランサーの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除き、貴方のジェルエンデュオの効果を無効にするわ。」
　黒騎士の槍に、オーバーレイ・ユニットが当たって消える。そして黒騎士から赤い波動が双子の天使に向けて放たれる。
「さあ、バトルよ！ブラック・レイ・ランサー、ジェルエンデュオに攻撃！」
　黒騎士が手に持つ真っ赤な槍を双子の天使に投げつける。
　その槍は双子の天使を貫き、双子の天使ははじけ飛ぶ。
「くっ……ただ戦闘ダメージは受けません！」
「そんなのはどうでもいいわ、深海のディーヴァで、ダイレクトアタック！」
　大妖精　ＬＰ４０００→３８００
「私はカードを一枚セットしてターンエンドよ。」
　レミリア　モンスター　ブラック・レイ・ランサー（Ａ２１００　ユニット１）　深海

のディーヴァ（Ａ２００）　魔法罠２　手札３
「私のターン、ドロー！私はヴァルハラの効果で、天空騎士パーシアスを特殊召喚します！」
　翼のような装飾を施した青い鎧を身にまとった半人半馬の騎士が現れる。
「さらに、勝利の導き手フレイヤを召喚します！効果で天使族の攻撃力は４００アップします！」
　さらにフィールドにボンボンを持った青い色の服を着た女性が現れる。
「へぇ……この前はブラック・レイ・ランサーの攻撃を止められなかったのに、攻撃力を超えるなんてやるじゃない。」
　やはり強い決闘者という赤帽子に教わったのか。その赤帽子を見ると先ほどと変わらない姿勢で立っている。
「バトルです！私は天空騎士パーシアスでブラック・レイ・ランサーに攻撃します！」
　天空騎士パーシアス（Ａ２３００）ＶＳ　ブラック・レイ・ランサー（Ａ２１００）
　レミリア　ＬＰ４０００→３８００
「パーシアスの効果でカードを１枚ドローします。そして勝利の導き手フレイヤで深海のディーヴァを攻撃！」
　勝利の導き手フレイヤ（Ａ５００）ＶＳ　深海のディーヴァ（Ａ２００）

レミリア　ＬＰ３８００→３５００
「私はこれでターンエンドです。」
大妖精　ＬＰ３８００　モンスター　天空騎士パーシアス（Ａ２３００）勝利の導き手フレイヤ（Ａ５００）魔法罠２　神の居城ヴァルハラ　天空の聖域　手札１
～～
「よっし！大ちゃんがあのでっかいモンスターを倒したよ！」
きゃっきゃとはしゃいでいる氷精を横目に、赤い帽子は考え込んでいる。
「……スノーマンイーター、深海のディーヴァ、黄泉ガエル。相手は【水属性】デッキ。そしてわざわざブラック・レイ・ランサーを使う辺り、『槍』を中心としたデッキだろう。そこから考えると……。」
赤い帽子の額に汗が伝う。彼には展開が読めているのだろうか。
「負けるなよ……大妖精。」
～～
「私のターン、ドロー。伏せていた強欲なウツボを発動！手札から水属性モンスターを２体デッキに戻し、３枚ドローするわ。そして、手札から黄泉ガエルを捨てて、鬼ガエルを特殊召喚！」
黄色の体に、赤い色の模様をした、鬼のような蛙がフィールドを跳ねる。

「鬼ガエルの効果でデッキから黄泉ガエルを墓地に送るわ。私は鬼ガエルをリリースして、サルベージ・ウォリアーを召喚！」

やたら筋肉質な青い肉体に、背中に鎖のようなものを背負った男が現れる。そしてその手に持つ鎖が地面に沈み込む。

「サルベージ・ウォリアーの効果！墓地からチューナーモンスター、深海のディーヴァを特殊召喚！」

沈み込んだ鎖が持ち上げられると、そこに先ほどの人魚がかかっていた。

「さあ、レベル5のサルベージ・ウォリアーに、レベル2の深海のディーヴァをチューニング！」

人魚の体が消え、二つの緑色をした輪っかが青色の男を中に通す。

「古の竜よ、今こそその封印を解き、我の元へ！シンクロ召喚！我が槍、氷結界の龍グングニール！」

発生した光の中から現れたのは、まるで氷像のようなモンスターで、うっすらと赤い輝きを放っている龍だった。

「グングニールの効果！手札を2枚まで捨て、その数だけ相手のカードを破壊！私は手札を2枚捨て、天空の聖域と天空騎士パーシアスを破壊！」

氷の龍の息吹を受け、聖域と半人半馬の騎士は凍りつき砕け散った。

「さらに、伏せていた破天荒な風を発動！グングニールの攻撃力・守備力は次の私のスタンバイフェイズまで１０００アップする！」
「ええっ!?」
　氷結界の龍グングニール　Ａ２５００→３５００　Ｄ１７００→２７００
「さあ、バトルよ！グングニールでフレイヤを攻撃！」
　氷結界の龍グングニール（Ａ３５００）ＶＳ　勝利の導き手フレイヤ（Ａ５００）
　大妖精　ＬＰ３８００→８００
　氷の龍が、その首を妖精にしっかりと向ける。そしてその口から、勢いの強い息吹を放つ。
「きゃあああっ！」
　氷の龍の息吹を受けた妖精は吹き飛ぶ。体は所々凍りついていて、震えているのが少し離れたところからでもわかる。
「私はこれでターンエンドよ。」
　レミリア　ＬＰ３５００　モンスター　氷結界の龍グングニール（Ａ３５００）魔法罠０　手札０
　正直なところ、ここから引っくり返せるとは全く思えない。私が氷結界の龍グングニールを呼び出すということは、すなわち私の勝利、ということだ。さらに、攻撃力３

０００を超えたグングニールを倒すのはおそらく難しい。
それに、あの様子ではおそらく勝負にならない。
～～
自分の上の歯と下の歯ががちがちと音を立てています。これは凍り付いてしまった体が冷えるためなのか、それとも目の前のモンスターに恐怖しているからなのかわかりません。
私は寒さでかじかむ手をのろのろと動かして、デッキトップに置きました。
けれども、全く勝てる気がしません。前回のようにはならなかったものの、結局は負けるだけなのではと思います。
「……ドロー！」
そのカードを見た瞬間、私は思い出しました。
まだ残る、勝利への道を。
「……私は、セットしていたトレード・インを発動！手札から光神機―轟竜を捨てる！そしてカードを二枚、ドローする！」
私は手札を捨て、昔のことを思い出します。
～～
「大ちゃん！パック買ったら大ちゃんみたいなカードが当たったからあげる！」

「え、チルノちゃん。私ってこんな感じなの？」
「えー？この子も大ちゃんみたいでかわいいじゃん！」
「うーん……なんだか微妙な気分だけどありがとう、大事にするね。」

～～

あれから、デッキは随分と変わりました。けれど、チルノちゃんに貰ったあのカードだけは、絶対に抜く事はありませんでした。

まだ手札には無いけれど、今ならわかります。カードを信じれば、かならず答えてくれると。

「……二枚、ドロー！」

私は引いたカードを見ます。

そして。

「……カードの効果で手札に加わった時、このカードを特殊召喚します！お願い、ワタポン！」

そう、チルノちゃんに貰ったカードはワタポン。このシュークリームのようなモンスターと似ていると言われた時は、とても困りましたが、今では一番大切なパートナーです。

「そして伏せてあったリビングデッドの呼び声を発動します！私は墓地からジェルエン

デュオを特殊召喚！そして手札からメンタルカウンセラー・リリーを召喚します！そして、レベル１のワタポンとレベル４のジェルエンデュオにレベル３、メンタルカウンセラー・リリーをチューニング！」

　カルテを持った女性の看護師から三つの輪が生まれ、ワタポンと双子の天使を中に入れます。

「聖なる地より出てし騎士よ、私の剣となり、盾となれ！シンクロ召喚！お願い、神聖騎士パーシアス！」

　光の中から現れたのは、金属のような体をした、翼を持った騎士。

「それでもグングニールは攻撃力３５００、貴方のモンスターの攻撃は２６００よ？」

「メンタルカウンセラー・リリーがシンクロ素材になった時、ライフを５００払うことで、攻撃力を１０００ポイントアップします！」

「なっ……!?」

　大妖精　ＬＰ８００→３００

　神聖騎士パーシアス　Ａ２６００→３６００

「さらに、神聖騎士パーシアスの効果！グングニールを守備表示にします！」

　神聖なる騎士の体から光が放たれて、氷の龍がその光から身を守るように丸くなる。

「わざわざ守備表示？……あっ！」

レミリアさんは何かに気がつき、弾かれたように考え込んで下を向いていた顔をあげる。

「神聖騎士パーシアスには攻撃したモンスターの守備力を超えていたら、その分だけダメージを与えられる効果があります！バトルフェイズ！神聖騎士パーシアスで、氷結界の龍グングニールを攻撃！」

「で、でもまだ私のライフが……」

「ダメージステップに、手札からオネストの効果発動！手札からこのカードを捨て、相手の攻撃力の数値だけ、自分の光属性モンスターの攻撃力を上げます！」

「な、何ですって！」

神聖騎士パーシアス　Ａ３６００→７１００

神聖騎士パーシアス（Ａ７１００）ＶＳ　氷結界の龍グングニール（Ｄ２７００）

「あ……そんな……。」

神聖なる騎士の剣が、氷の龍を真っ二つに切り裂きました。そしてその大地を揺るがすような衝撃が、レミリアさんへ向かいます。

「きゃあああああっ！」

レミリア　ＬＰ３５００→０

レミリアさんは、その衝撃を受けて、弾き飛ばされました。そして、短調なピー、と

いうライフポイントが0になった音が響きます。
「あ、あれ?勝っ……た?」
　私が何が起きたのか分からないまま、気の抜けたように立っていると、横から私に飛び込んでくるものがありました。
「大ちゃん!やった!やったよ!」
「チ、チルノちゃん……」
　チルノちゃんはまるで自分が勝ったかのように喜んで、私に抱きついています。
「よくやったな。いいデュエルだったぞ。」
　遊太さんも近くに来て、賞賛の拍手をしています。
「ありがとうございます……。勝てたのは遊太さんのおかげです。」
「いや、勝てたのはお前がデッキを信じて、ワタポンを引くことが出来たからだろうな。」
　あくまで自分は何もしていないかのように言っていますが、ワタポンを抜きたくないと言った私に、ドローソースを増やすように勧めたのは遊太さんです。
　そして、私はチルノちゃんの方を向きます。
「ねえ……チルノちゃん。」
「何、大ちゃん?」
　チルノちゃんは明るい笑顔をこっちに向けてきます。

そのチルノちゃんに向かって私は言いました。
「……あの……ちょっとというか、物凄く。」
「うんうん！」
「……寒い。」
それだけ言って、私は冷え切ったところへの追撃によって、意識を手放しました。
チルノちゃんが慌てた表情になっていたのを、最後に見たような気がします。

～～

私は地面に転がっていた。強烈な衝撃によって、体は動かせない状態であった。
私は敗北したのだ。あの妖精の少女に。自分の切り札を使いながらも。
全力を尽くしたはずだったが、何故負けたのか。それは、単純にあの少女の方が強かったから。それだけである。
そんなことを考えていた私の元に、足音が響く。
「……負けた私を笑いに来たのかしら？赤帽子。」
そこに立っていたのは、先ほどの赤い帽子であった。
「俺は赤帽子って名前じゃなくて鹿野　遊太だ。それに笑いに来たわけじゃない。」
「じゃあ何をしに来たって言うの？」

私が尋ねると、鹿野は私の近くにしゃがみこむ。
「お前のデッキは【水属性】よりの【槍】デッキだろ?」
私は少し驚く。私のスペルカード『神槍「スピア・ザ・グングニル」』を知っているものならともかく、知らない人に見抜かれるとは思っていなかったのだ。
「へえ……なかなかやるじゃない。それがどうかしたの?」
「……自分の好きなカードでデュエルしてさ、それが圧倒的に負けると悔しいよな。」
彼は、私の方を見てそれを言った。それ以上のことは言わなかったが、私はわかった。自分の好きなカードを使って負けた私を気遣って、彼は私の元にわざわざ来たのだ。
「……そうね。確かに……。」
私はこみ上げてきたものを無理やり押し込めて、顔を逸らす。
「……お前、体を強く打って動けないんじゃないか?」
唐突に彼が私の体のことを聞く。
「まあ、確かに動けないけれどしばらく放っておい……って何するの!?」
私の体が持ち上がり、彼の背中にちょうどおんぶの体勢で背負われる。
「いや、こんなところに置いていくのは気が引けるしな。」
「だからって!」
「……しかしこの体勢なら顔がよく見えないな。何してても気がつかなさそうだ。」

「!!」

まるでなんでもないことのようにそのまま歩き始める。

私はその背中に顔を埋める。

「……馬鹿な男。」

私は彼の優しい背中で揺られながら、悔しさからこみ上げるものを彼の背中で隠していたのだった。

時の魔術師の瀟洒なお仕事

「……で、これはどういうことなのよ。」
私は苛立っていた。とりあえず苛立っていた。
私はこの外来人に連れられるまま、先ほどデュエルをした妖精の家に来ていた。
男と一緒に、私が入ってくると、中にいた妖精二人は突然の私の登場を相当怖がって部屋の隅っこでガタガタと震えながら私の方を見ている。
「ああ、そういや説明してなかった。こいつレミリア・スカーレット。」
連れてきた張本人が適当すぎて、もはや場の収集がついてない。
と、いうか、そりや、ここまでやったことを考えたら私だって手放しで歓迎されるとは思ってはいない。むしろ忌避されるくらいが当然だとは思う。
「そーゆー問題じゃないでしょ！遊太！」
氷精の方がもう一人をかばうように料理につかうおたまを構えながら怒鳴る。が、腰が引けていてかばってるようにも見えないレベルだ。
「……ちょっと家にあげるのは……ええっと……。」
後ろで庇われてた妖精がなんだか複雑な表情をして、私を自分の家にあげることを拒

否している。

いや、流石にわかるけれども。わかるけれども。

あまりにも嫌われすぎてなんだかへこんできた。

気分がブルーになっていた私を、突然鹿野は前に押し出した。妖精たちは下がった。

その様子を見て、鹿野は笑って妖精たちに声を掛ける。

「いやいや、そこまで怖がらなくても。こいつなら大丈夫だよ。」

どうやら、私を受け入れるように掛け合うつもりらしい。

「でも……大ちゃんを傷つける悪い奴でしょ?」

「それを言ったらさっきのデュエルでは大妖精がレミリアを傷つけたわけだ。それに……。」

鹿野は私を見る。私にはその表情が悪いことを思いついた餓鬼のものに見えた。

「こいつデュエルに負けて号泣してたくらい純粋に遊戯王が好きなんだから大丈夫だ。俺が保証する!」

「う、うわあああああ!やめろ!」

妖精たちの私を見る目がなんか生暖かい。

「……なんか思ってたより、普通?」

「なんだ、レミリアっていいやつじゃん!」

「な？こいつなんだかんだでいいやつだよ。」

全員ニコニコしながら私を見る。見られている私は急に惨めな気持ちになる。赤ちゃん言葉で子猫に話しかけるのを見つかったような気分だ。

「ええい！やめろ！クソッ、そこの外来人覚悟しろおおお！デュエルでコテンパンにしてやる！」

私は半ばやけくそになって、叫ぶ。

よく考えれば妖精たちとも馴染んでいるような気がするのだが、私はもうそんなことを考えてる余裕はなく、恥をかかされた分の復讐に全力を注いでいたのだった。

～～

朝、俺が目覚めると、少女3人が寝る直前までみんなで遊んでいたかのように折り重なって寝ていた。

どうやらレミリアと大妖精は仲直りして、チルノとも仲良くなったようだ。

あの後、レミリアが大妖精の家に泊まる流れになり、命に関わるような枕投げ合戦などがあったのだがその辺りは割愛する。というより語るのも恐ろしい。

また、レミリアも同い年くらいかなーとか思ってたら、吸血鬼なのでだいぶ見た目と年齢が違うと聞いてびっくりした。「へー身長は伸びないんだな。」と言って一度リアルファイトになりかけたがそこは身長差を利用して押さえ込んだ。ただ、二度と言わない

ようにしようと心に刻んだ。
昨日あったのはそのようなことだ。
俺は日の光を浴びようと思ってカーテンに手をかけるが、そう言えば吸血鬼を日にさらすのはよくないと思い、家の外に出る。
太陽は割と高いところまで上がっていて、そこまで早い時間でないことを体感的に感じる。
「あら、お目覚めでしたか。赤い帽子の方。」
「ああ、今起きたとこ……ろ？」
普通に受け答えしかけたが、そこで俺の言葉は止まる。
声が突然した方を見ると、俺の横に銀色の髪をしたメイドがいた。
「お前、何者だ？」
間違いなく少し前まではいなかった人間だ。家を出たときに、周りには人はいなかったはずだ。
それに、まるで今来たかのような発言をしている。
怪訝そうな目を向ける俺に対して、そのメイドは軽くお辞儀をして名乗った。
「私は紅魔館のメイド、十六夜咲夜です。以後お見知りおきを。」
「……生憎俺は外来人なんでね、紅魔館なんて言われてもどんなところか知らないん

だ。」
　残念ながら俺の頭には知り合いの植物使いのことしか浮かばなかった。
「ああ、外来人の方ですか。それではもしやレミリアお嬢様のことも伺ってない？」
「は？レミリア、お嬢様？ってまさか……。」
　メイドにお嬢様、と呼ばれる人物なんて一人しかいないだろう。
　俺の考えを察してか、メイドはここに来た目的を簡潔に話す。
「私の仕えている紅魔館の主人、レミリア・スカーレットお嬢様はこちらにいらっしゃいますか？」
「いらっしゃるわよここに。別に来なくてもいいと言っておいたでしょう。」
　後ろを振り返ると、家の中から（ちっこい）ご主人様が出てきた。
「ああ、起きたか、レミリア。どうやら迎えに来たらしいぞ。」
　俺はとりあえず迎えに来たのならレミリアを連れてさっさと帰るのかなと思っていたが、甘かった。
　まず、レミリアが家の中から出てきた。
　レミリアは、寝巻きに着替えていた。
　極めつけに、寝起きのため、その服が若干乱れていた。
　そして俺は男。

そこにいたメイドから突如黒いオーラが噴出したのを、俺は瞬時に察知した。
「……お嬢様に、何をなさったんですか？」
「い、いや！何も……」
「ああ、デュエルで負けた後、そこの男に抱かれてここまで来ただけよ。」
黒いオーラが増大する。レミリアはにやけている。顔を見る限り、「昨日の仕返しよ」と言いたいようだ。結果を悪化させる点では大変悪質な仕返しだと思われる。
「……叩き潰します。」
メイドは素早く左手にデュエルディスクを装着する。
「ええい！やればいいんだろやれば！」
この世界ではモンスターの攻撃は実体を持つ。つまりデュエルを無視すると、一方的にダイレクトアタックを受けるだけである。当然痛い。
仕方ないので適当なデッキを引き抜く。
「「デュエル！」」

咲夜　ＬＰ４０００　遊太　ＬＰ４０００
「先行は私です！私のターン！ドロー！カードを４枚セットして、ターンエンド！」
咲夜　ＬＰ４０００　魔法罠３　手札３

「俺のターン！ドロー！」
「スタンバイフェイズに罠発動！ギフトカード！貴方のライフを３０００回復する！」
あ、まずい。
「それにチェーンしてシモッチによる副作用発動！貴方のライフ回復の効果は逆になる！つまり、ギフトカードの３０００回復は３０００ダメージになる！」
やっぱり【シモッチバーン】だーっ！ライフ４０００で相手するのは難易度高いわ！
あと2枚は入っているギフトカードが、要するに３０００ダメージを与えるカードになる。これは正直問題である。
「ぐおおお！」
遊太　ＬＰ４０００→１０００
そして流石にバーンとは言っても３０００ダメージは痛い。そんなこと言ったらチルノは痛いどころじゃなかっただろうが……。
「……俺はナイト・ショットを発動！お前のセットカードを破壊する！これにチェーンしてそのカードを発動は出来ない！」
「チッ、魔法の筒が……。」
踏んでたら即死じゃねーか！危なすぎる！
とりあえずシモッチを残しておくとすぐに次のギフトカードが飛んでくるだろう。

【シモッチバーン】の弱点は、キーカードが来ないと手が出せないことだ。
「俺は、手札からおろかな埋葬を発動！デッキからスクラップ・ビーストを墓地に送る！そしてスクラップ・キマイラを召喚！」
俺のフィールドに機械の端材をつなぎ合わせて作られたような、いくつもの生き物の特徴を持った生き物が現れる。
「スクラップ・キマイラの効果！墓地からスクラップ・ビーストを特殊召喚！」
合成獣が吠えると、地面から犬のようなつなぎ合わせのモンスターが現れる。
「レベル４のスクラップ・キマイラに、レベル４のスクラップ・ビーストをチューニング！廃棄物より生まれし竜よ、今ここに己の存在を示せ！シンクロ召喚！破壊しろ！スクラップ・ドラゴン！」
光から現れたのは継ぎ接ぎの竜。その体からは蒸気を吐き出し、その目は赤く爛々と輝いている。
「俺はスクラップ・ドラゴンに盗人の煙玉を装備する。そして、スクラップ・ドラゴンの効果発動！俺の場の盗人の煙玉と、お前の場のシモッチによる副作用を破壊！」
継ぎ接ぎの竜が、板を繋いで作られたような翼をはためかせると、フィールドのカードが砕け散る。
「そして、破壊された盗人の煙玉の効果！お前の手札を見て、一枚捨てるぜ！」

「……私の手札はこれです。」
ソウルテイカー　成金ゴブリン　成金ゴブリン
……これシモッチじゃなくてレティキュルだったら即死だったんじゃ？
俺の額に汗が伝う。
「ええと、ソウルテイカーで。」
一応次のターンを考えるとこれかな。
「よし、バトルフェイズ！スクラップ・ドラゴンでダイレクトアタック！」
竜の口から、衝撃波が放たれる。その衝撃波は真っ直ぐメイドを撃つ。
スクラップ・ドラゴン　Ａ２８００
咲夜　ＬＰ４０００→１２００
「くっ……。やりますね。」
「俺はカードを2枚セットして、ターンエンド！」
遊太　ＬＰ１０００　モンスター　スクラップ・ドラゴン（Ａ２８００）　魔法罠２
手札１
「私のターン、ドロー！私は手札から、成金ゴブリンを発動！貴方のライフを１０００回復して、カードをドロー！そしてもう一枚発動！」
遊太　ＬＰ１０００→２０００→３０００

おそらく相手がターン始めにドローしたのはライフ回復系だったのだろう。このままでは負けるとカードをドローしたと思われる。

そう考えた俺だったが、相手の表情を見て止まる。

メイドは、不敵な笑みを浮かべていた。

「私は、手札から神の居城ヴァルハラを発動！」

「は？」

突如現れた神が住む聖なる城に、俺は固まる。

ヴァルハラでレティキュル？いや、それは無い。そんなカードを使わなくてもキラー・トマトやサモンプリーストに対応している。

待てよ……？

そう言えば、奴は俺の隣に「突然」「気配もなく」現れた。

そのように現れる奴が好みそうな、ヴァルハラと相性の良いカードが無かったか？

そして、俺は奴の使った方法に気がつく。

「……まずいっ！」

「私はヴァルハラの効果を発動！私は手札から、アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤを特殊召喚！」

フィールドに、黒い鈍い光を放つ、流線型のボディをした天使が現れる。

やはり……。

「ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤの効果！コイントスの表裏で効果が変化します！コイントスは……表！エンドフェイズにフィールドのモンスターを2体墓地に送り、相手のターンをスキップできます！」

彼女が突然現れたのはおそらく「時間停止」を行い、自分だけが動ける状態で近寄ったのだろう。その自分だけが動けるというのから、このモンスターに行き着いたのだろう。

しかし表が出てしまったのは痛い。このまま何事も

「そして私は手札から、終末の騎士を召喚！効果でデッキからレベル・スティーラーを墓地に送ります！」

相手フィールドに漆黒に染まった騎士が踊りだし、携えた剣を振る。

まずい……これはまずい。

「そして墓地のレベル・スティーラーの効果を発動します！ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤのレベルを一つ下げて、特殊召喚します！」

アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　レベル8→7

背中に大きな星をつけた天道虫が現れる。

「バトルフェイズ！ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤでスクラップ・ドラゴンを攻撃！」

天使が、重量感のある鋭い爪のついた腕を振り下ろす。その爪を受けて、ガラクタの竜がはじけ飛ぶ。

スクラップ・ドラゴン　Ａ２８００　ＶＳ　アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　Ａ３１００

遊太　ＬＰ　３０００↓２７００

「くっ……だがスクラップ・ドラゴンの効果！墓地からスクラップ・ビーストを攻撃表示で特殊召喚！」

「くっ……ではエンドフェイズ！ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤの効果でレベル・スティーラーと終末の騎士を墓地に送り、貴方のターンをスキップします！ターンエンド！」

咲夜　ＬＰ１２００　モンスター　アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ（Ａ３１００）魔法罠　神の居城―ヴァルハラ　手札０

「俺のターンはスキップされるな……。」

遊太　ＬＰ２７００　モンスター　スクラップ・ビースト（Ａ１６００）魔法罠２手札１

「では、再び私のターン！ドロー！」

ここで、手札からモンスターを出してきたらほぼ負けが決まるが【シモッチバーン】はモンスターが少ないはず……どうだ？

「レベル・スティーラーの効果でＴＨＥ　ＷＯＲＬＤのレベルを下げ、守備表示で特殊召喚！」

アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　レベル７→６

「バトルフェイズ！ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤでスクラップ・ビーストを攻撃！」

「俺は速攻魔法、スクラップ・スコールを発動！スクラップ・ビーストを選択する！そしてデッキからスクラップ・ソルジャーを墓地に送り、デッキからカードをドローする！その後スクラップ・ビーストを破壊！そして破壊されたスクラップ・ビーストの効果で、墓地からスクラップ・キマイラを手札に加える！」

「私は攻撃を続行します！ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤでダイレクトアタック！」

「手札から、バトルフェーダーの効果発動！このモンスターを特殊召喚し、バトルフェイズを終了する！」

フィールドにコウモリのようなモンスターが現れ、巨大な天使の攻撃を止める。

「くっ……カードをセットして、ターンエンドです。」

咲夜　ＬＰ１２００　モンスター　アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ

レベルスティーラー　魔法罠１　手札１

～～

まさかダイレクトアタックを止めるとは思っていなかった。しかし、３１００の攻撃

力を超えるのは難しく、また、魔法の筒をセットしたので、そう簡単にはやられないはずだ。ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤさえ残れば、確実に勝てるはずだ。

～～

何か今、どこかでフラグ建設が行われたような気もするが、気にしないことにする。

しかし、ここでひっくり返さないと、おそらく負けてしまう。

「……俺のターン、ドロー！」

俺は勢いよくデッキからカードを引く。

「俺は、スクラップ・キマイラを召喚！そしてそのスクラップ・キマイラの効果！墓地からスクラップ・ソルジャーを特殊召喚！」

場に躍り出た合成獣が吠え、長い釘のようなものと、沢山のトゲのついた手を持った、人型の戦士が現れる。

「レベル４のスクラップ・キマイラに、レベル５のスクラップ・ソルジャーをチューニング！ガラクタより生まれし命、その二つの顎で敵を噛み砕け！シンクロ召喚！現れろ！スクラップ・ツイン・ドラゴン！」

二つの首を持つ、ガラクタのつなぎ合わせの竜が地面に足を付ける。

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果！俺のセットカードを破壊！そしてフィールドのレベル・スティーラーとセットされたカードを手札に戻す！」

「くっ！」
「これで終わらないぜ！破壊した荒野の大竜巻の効果！セットされたこのカードが破壊された時、相手フィールドの表側表示のカードを破壊する！俺はＴＨＥ　ＷＯＲＬＤを破壊する！」
「しまったっ！」
「バトルフェイズ！スクラップ・ツイン・ドラゴンで、ダイレクトアタックだ！」
　スクラップ・ツイン・ドラゴン（Ａ３０００）
「あ、うわあああっ！」
　咲夜　ＬＰ１２００→０
「……ふぅ。まあ勝ちだな。」
　とりあえずギフトカード地獄に遭わなくて良かった。
　本当にひどい時だと、ギフトギフト分かれ道シモッチアザッシター！ってなったりするので侮れない。
「……くっ、やりますね……。」
　さっきよりは冷静になったらしいメイドが起き上がる。
「俺はただおんぶして知り合いの家に連れてきただけだからな、とりあえず何か勘違いしてるようだが。」

「いえ、正直そんなところだとは思ってましたけれども……。」

この女、まるで最初からわかっていたような雰囲気を出しているが、じゃあ最初から話を聞けよと言いたい。

とりあえずデュエルディスクを手早くしまって、カードをバックにしまう。

「で、時間停止のメイドさん、結局要件は?」

もうめんどくさいのでさっさと要件を済ませたい。

「ああ、私の要件はお嬢様を迎えに来ただけで……え。今なんと?」

どうも突然能力を見抜いてしまったら驚かれたらしい。あまり難しいことでもなかったと思うのだが。

「ああ、ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤをわざわざ入れたあたりを考えると多分そういうことなんだろうなーと思って。で、レミリア。家に帰るのか?」

「そうね、そろそろ帰らないとかしらね。……そうだ、ほら、今度ここに来なさい。ここが私の屋敷よ。」

レミリアが手を出すと、咲夜が紙とペンを手渡す。そこに何かを書くと、俺にそれを手渡す。それを見てみると、周辺の地図が書いてあり、そこに「紅魔館」と名のついた建物の場所が書いてある。

「ああ、わかった。行くよ。それじゃまた会おうぜ。」

「ええ、それじゃ行くわよ。咲夜。」
レミリアがくるっと優雅にターンを決めて、俺に背を向ける。
「……お嬢様。大変失礼かもしれませんが……。」
「何よ、咲夜。」
レミリアがあからさまに不服そうな表情をする。しかし、俺は咲夜の言いたいことが手に取るようにわかる。てか、誰でも言いたくなる。
「……お嬢様。その寝巻きで帰るつもりですか？」
レミリアが指摘をされて、自分の服を見る。
彼女の目に映ったのは、薄いピンク色をした、ふわふわの服。
つまるところ、パジャマである。
レミリアの顔が真っ赤になる。そして
「う、うるさいっ！うるさいっ！うるさーいっ!!」
幻想郷の朝に、少女の叫び声が木霊した。

紅く煌めく賢者の宝石

今の季節は春、出会いの季節である。そんな春には、窓を開けて、そこから差す暖かい日に当たり、草木や花の香りを楽しみながら読書をするに限る。

夏ならば日の当たらない涼しい日陰で本のページを一枚一枚めくり、秋ならば窓の外に見える落ち葉を眺めつつ、重厚な本を長々と読みふける。冬ならば、寒さを逃れて暖炉に薪をくべて、揺り椅子に座りながら本を読むのが至高である。

つまりは、毎日図書館にこもって読書をするのが、私、パチュリー・ノーレッジの日課なのだ。

しかし最近、他にも興味のあることが出来た。それは……

「パチェ！遊戯王しましょ！」

レミィが持ってきた、「遊戯王」というカードゲームである。

少しだけ子供っぽいところもあるレミィのことだから、暇つぶしの一環としてやってみたのだが、これがなかなか戦略的で、私はすぐにはまってしまった。気が付いたら遊戯王は幻想郷中でもっともポピュラーなカードゲームとなっていた。カードの種類も多く、いくつものデッキが作ることが出来て、その数だけ戦略も増えるため、あまり日

に当たりたくない私もわざわざ外に出て、カードを買いに行ったり、そこであった決闘者とデュエルをしたりしているくらいだ。
　ただ、大変面白いのはいいのだが、少し問題がある。
「……今日は運動したくないわ。」
　攻撃が実際のものとなるところだ。そこまで体が丈夫ではない私は、連日のデュエルは体に堪える。
　なので、疲れている時は断るのだが、この吸血鬼のお嬢様は私と違い疲れ知らずである。
「何言ってるのよ、毎日運動しないと体力が落ちるわよ。」
「元々無いからもう落ちないわよ。無理して運動する方が体に良くないと思うわ。」
「デュエルも日々続けないとなまって弱くなっちゃうわ。いいからやりましょう！」
　いつもに増してやる気に満ち溢れている。私としては面倒くさい限りである。
「貴方充分強いじゃない。まだ強くなるつもりなの？」
「貴方との勝率は5割くらいだし、それに……。」
　レミィの表情が曇る。
「もしかして、ここしばらく家を空けてた時に？」
　彼女がこくりと頷く。

「湖の近くに住んでる大妖精って言う子に切り札を出しても負けたのよ。あれは悔しかったわ。」
「……どうもそれだけじゃなさそうだけど？」
私が訪ねると、彼女はびくりと肩を震わせた。
「……貴方、相手のライフが１０万超えたらどうする？」
「いったい何をされたのよ……。」
なんだかよくわからないけれどもとんでもない相手と戦ってきたらしい。
要するにレミィは何者かに圧倒されて、自分の弱さを悟ったらしい。
私は仕方ないとばかりにため息をついた。
「しょうがないわね……一度だけよ？」
「ええ、後は咲夜と美鈴とでもやるわ。」

「「デュエル！」」

レミリア　ＬＰ４０００　パチュリー　ＬＰ４０００
「先行は私ね。ドロー。」
「ふふ……私のデッキはいつものと一味も二味も違うわよ？」

「……そう。手札からマジカル・コンダクターを召喚。」
　緑色のローブを着こんだ女性が、魔法の都市に降り立つ。
「そして、私は手札から魔法都市エンディミオンを発動するわ。魔法を発動したから、マジカル・コンダクターに魔力カウンターが二つ乗るわ。」
　私の図書館が、魔法で回る都市に変わる。
　マジカル・コンダクター　魔力カウンター　0→2
「さらに手札から、トゥーンのもくじを発動！トゥーンのもくじを手札に加える。そして魔法を発動したからエンディミオンに一つ、マジカル・コンダクターに二つカウンターが乗るわ。」
　魔法都市エンディミオン　魔力カウンター　0→1
　マジカル・コンダクター　魔力カウンター　2→4
「マジカル・コンダクターの効果！カウンターを4つ取り除いて、手札から王立魔法図書館を特殊召喚！」
　ローブを纏った女性が手をかざすと、そこに荘厳な雰囲気を醸し出す図書館が現れる。
　マジカル・コンダクター　4→0
「さらに、手札からトゥーンのもくじを発動！トゥーンのもくじを手札に加えるわ。そ

してそれぞれにカウンターが乗るわ。そしてさらにトゥーンのもくじを発動！手札にブルーアイズ・トゥーン・ドラゴンを加えるわ。」

魔法都市エンディミオン　1→2→3

マジカル・コンダクター　0→2→4

王立魔法図書館　0→1→2

「そしてトレード・インを発動！手札からブルーアイズ・トゥーン・ドラゴンを捨てて、二枚ドロー！そしてカウンターが乗るわ。そして王立魔法図書館の効果で、カウンターを外して、カードをドロー。」

「……私のターンまだ？」

「ちょっとは我慢しなさい。」

魔法都市エンディミオン　3→4

マジカル・コンダクター　4→6

王立魔法図書館　2→3→0

「よし、手札から、緊急テレポートを発動するわ。デッキからクレボンスを特殊召喚！」

フィールドに河童とかが作っているような電子機器の道化師のようなモンスターが現れる。

「へ？サイキック族？」

魔法都市エンディミオン　4→5
マジカル・コンダクター　6→8
王立魔法図書館　0→1

「レベル4、王立魔法図書館に、レベル2、クレボンスをチューニング！その魂を我が手に、その鎌を振るい我が力となって、嵐を起こせ！シンクロ召喚！来なさい！マジックテンペスター！」

魔法都市に降り立ったのは紺色のローブを身にまとい、透き通った色の刃を持った鎌を構えた魔術師だった。

「へぇ……先行でシンクロなんて凄いじゃない。」

「マジックテンペスターの効果！シンクロ召喚時、魔力カウンターをこのカードに乗せる！そして手札を任意の数捨てて、その数だけ魔力カウンターを乗せられる！私は手札を3枚捨てて、マジックテンペスターにカウンターを乗せる！」

マジックテンペスター　0→1→4

「その魔力カウンターをそんなにたくさん乗せてどうするっていうのよ？」

「……そう、それじゃ見せてあげる。マジックテンペスターの効果！フィールドの魔力カウンターをすべて取り除いて、その数×５００のダメージを相手に与える！」

「へぇ……バーンね、バーン……ん？」

レミィの余裕の表情が急に崩れる。
「現在フィールドにある魔力カウンターは17個！掛け算は出来るわよね？」
「17×500……はっせん……ごひゃく？」
「良く出来ました。8500ダメージを食らいなさい！」
「え、あ、きゃあああっ!!」
レミリア　LP4000→0（―4500）
「……。」
あまりにも強烈な魔力の塊を受けて壁まで吹き飛ばされたレミィがゆっくりと起き上がる。
起き上がってもしゃべらないのでいくら手札が良かったとは言っても少しやりすぎたかと思ってレミィに近寄る。すると
「う……えぐっ……。」
「泣いたっ!?」
レミィは号泣していた。
「私のターンが、ぐすっ、来なかった……。」
「た、たまたま手札が良かっただけよ。だからほら、元気出して！」
「う、うわぁぁぁぁん!!」

「あっ、レミィ！」

レミィはいきなり立ち上がって走って去って行った。

いくらなんでもいじめ過ぎただろうか。これが後攻だったらまだ何か思うことがあるだろうが、先行でターンが回ってこないのに倒すのはよろしくなかっただろう。

「……このデッキは封印しようかしら……。」

私はいそいそとカードをしまって、ケースに入れる。先行でとどめを刺して、プライドの高い人を泣かせてしまったりしないように、新しいデッキを組むことを心に誓って、私は自分の椅子に向かって、読書に戻ることにしたのだった。

壊された封印の鎖

「うおおおお!?」

唐突だが、俺は走っていた。無論、全力で。

「ま、待ってくださいぃぃ!!」

後ろから大妖精が全力で飛んでくる。その表情を見れば、必死さが伝わるだろう。

だが、声をかけているほどの余裕はない。

なぜなら、後ろから大量の弾幕が俺を狙って飛んできているからだ。

俺は、どうしてこの幻想郷に来たのか調べるために、この世界でも権力のある人に会いに行こうということになった。

そしたら、どうもレミリアがなかなか権力のある人、というより吸血鬼らしいので、とりあえず紅魔館に行くことになった。

そんなに権力があるとは知らなかったので、大分失礼なこと（主にデュエル的な意味合いで）をしたような気もするけれど、とりあえず気にしないことにする。

で、紅魔館に向かうと現在居候中の家の家主、大妖精に伝えると、なんといっしょに

ついていくと言うので、俺と大妖精の二人で紅魔館に向かうこととなった。
ここまではよかった。
だが、家を出てしばらく行ったところで、この前のチルノと、その友達らしき人（人というのは多分間違っている）に囲まれた。そして、その中の虫のような触角を頭につけた、緑色の髪をした少女が
「そこの外来人！止まれ！」
と俺に向かって言って来た。
「え、何か？」
外来人は通っちゃいけないとかあるのかな、と思ったら
「大妖精をどうするつもりだ！」
そういうわけではないようで。
「いや、紅魔館に行くんだけど、こいつも来るっていうから……」
「間違いないわ、誘拐犯はたいていこう言うものよ」
その中の茶色の帽子を被った羽を生やした少女が言う。
「は、誘拐？」
「とぼけたわ、ほぼ間違いなしね」
赤い飾りを頭に付けた金髪の少女が、こっちに疑いの眼差しを向ける。

「みんな、遊太さんはそんな人じゃないよ。私からついて行くっていったんだし……」
「まるで悪くないかのように嘘を言わせるなんて……許せないわ」
どうやら大妖精と友達らしいのだが、もはや話を聞いていない。
「……って待て。チルノ、お前は俺を知ってるだろ？」
俺に言われて、チルノは俺を見る。
「ええ、知ってるわ」
「なら……」
「大ちゃんを奪った悪者よ！喰らいなさい！『氷符「アイシクルフォース」』!!」
チルノが手を広げると、氷の弾丸が空を飛ぶ。
「へ？」
空を飛んでいる氷の弾が、俺に向かって飛んでくる。
「ちょ、うわぁぁぁっ！」
俺はすんでの所で回避する。俺のいたところに氷が突き刺さる。
あんなのが当たったらおそらく死ぬ。残念ながら俺は割と一般的な人間なので、銃弾のようなスピードで飛んでくる氷なんかを受けたら当然死んでしまう。運よく胸ポケットに切り札のカードが入っていたりしなければ即死である。
「おいっ！何するんだ！そんなの当たったら死……」

「『声符「梟の夜鳴声」』!!」
「『蛍符「地上の流星」』!!」
「『月符「ムーンライトレイ」』!!」
　全員大分やる気のようです。
「……こういう時は、逃げるに限る！」
「待てぇ！誘拐犯！」
　と、いったわけで今走ってるわけだ。
　俺はバイクと合体するロボット軍団と鬼ごっこ（と言う名の一方的な逃走劇）をしたこともあるほどに体力には自信があるのだが、後ろから俺を必死に追いかけている大妖精はそろそろ限界だろう。
　て、いうかもうこの距離から考えて絶対誘拐じゃないことはわかりきったことだろうと思うのだが。
　後ろをそっと振り返ると、視界に映るのは何もない「闇」。そしてその中から聞こえてくる歌声、いや、鳴き声の方が正しいのだろうか。その声は美しいのだが、聞き入って足を止めればすぐに氷の粒などの餌食だ。
　ついでに落ち着いて考えると大妖精にも当たりそうである。むしろ大妖精の方が危ないくらいだ。

「あー！もういい加減にしてくれえええっ！」

俺はたまらず叫び声をあげた。

……で、時間は飛んで、紅魔館の前までたどり着いた俺らだが。

「ぜぇ……っ、ぜぇ……っ。ホントに……すみません……」

「……むしろ被害が激しいのはお前だと思うんだが。」

俺の呼吸はすでに整っていたのだが、大妖精は肩で息をしている状態である。さらに足はガクガクだった。まるで俺が大妖精を振り回したみたいである。

「だ……大丈夫……です。いいから……行きましょう」

大妖精はよろよろしながら俺の前に出る。俺はとりあえず後ろからついていくことにする。

少し行くと、血のように真っ赤な色をした、大変大きな館が現れる。

まさに吸血鬼が住むに相応しい禍々しい雰囲気をたたえている。

その館の大きさに合った門に近づくと

「この紅魔館に何か用でしょうか？」

後ろから声がした。

「……っ!?」

慌てて振り返ると、そこには中国風の緑色の服を身にまとった女が立っていた。
「あ、えっと俺は鹿野　遊太って言って……」
「ああ。レミリアお嬢様をボッコボコにしたという……。どうぞ入ってください。」
突然後ろを取られたので、言い知れない恐怖を覚えたのだが、相手は人の良い笑顔を浮かべて、あっさり俺らを通してくれた。
「あ、はい……どうも」
多分この人は門番なので、門の方にいたはずだ。そこからいつの間に後ろに回り込んできたのかと考え、振り返ってみると。
門番は門に寄りかかって、寝ていた。
「……えぇぇ……」
門番なのに寝てるってどういうことだ。門の番をしていない。
「あぁ、あの人は紅美鈴さんです。いつも寝てたり私とかチルノちゃんと遊んでたりして門番として機能してないんですよね。」
大妖精が呆れ返って語る。いいお姉さんをやってるようだが、門番としてはよろしくないだろう。
だが、あの門番、俺の勘だと多分やばい。寝ている姿を見ても、全く隙がない。とりあえず何かしらの武道を極めているのは間違いない。

それに、レミリアともどうやら仲が良さそうだ。門番が館の主と話すというのはなかなかないことだろう。そんなに沢山門番に会ったこともないのでよくわからないが。

あまり考えないことにして、俺らは館の中へと進む。

しばらく中へ進むと、少女が階段を下りてくる。

「あら、いらっしゃい。二人とも来たのね」

「レミリア、久しぶりだな」

「お久しぶりです」

「とにかく立ち話もなんだしこっちにいらっしゃい」

レミリアが俺らに背を向けて前を歩く。俺らはそれについていって歩く。

俺は内装を眺める。どこもかしこも真っ赤に染まっていて、少しだけ目に悪い気がしてくる。目をそらしても、赤。仕方ないから他のところを眺めても、やっぱり赤。

その赤の中では、他の色はとても目立つ。

「……なあ、レミリア」

「ん、何よ？」

「あの鎖ってなんだよ。」

俺の視線の先には、鎖をがっちり付けられた扉があった。

「え、ああ、それは……妹の部屋よ。」

レミリアの表情が曇る。あまり触れて欲しくないことなのだろうか。
「……それはさておき、いったい何の用？」
レミリアがドアを開けて、その中の椅子に座る。俺らはその対面にあるソファーに二人並んで座る。
何故か大妖精がそわそわし始める。やたらもぞもぞと動くので、俺の肩に大妖精の肩が当たる。
～～
……流れで遊太さんの隣に座ってしまいましたが、とても近いです。
男性の知り合いはいないので、どのくらいの距離感が正しいのかわかりません。
遊太さんは嫌がってないでしょうか。くっつきすぎると不快感を与えるような気がします。
……いやむしろ私の家に居候させてるところから良くないんじゃないでしょうか。
物凄く心配になってきました。
ふと、前を見ると。
真っ黒なオーラを放っているレミリアさんがいました。
何故だかは全くわかりませんが早くここを去りたいです。
～～

大妖精め……。

遊太の隣に当然のように座って……。

いくつか椅子があるんだから他の椅子に座ってもいいでしょうに。

なんであんなにくっついてるのよ。羨ま……しくなんてないわ。全く羨ましくないわ。

いっそ立たせておけば良かったかしら。

そんなことを考えていると、大妖精が顔を上げ、私を見てすぐに顔を下げる。

多分今自分はとても怖い顔をしていたのだろう。

まずいまずい。私はもてなす側だ。相手を怖がらせてどうするの。

そんなんじゃ遊太に……？

……どうして私は遊太を気にしているのだろうか？

～～

「とりあえず、今日はレミリアに聞きたいことがあって来たんだ。」

「へぇ……何を聞きたいの？」

「俺がこの幻想郷に来た理由……かな？」

あまりにも分からないことが多すぎるので質問すらまともに決まらない。

「理由としてありうるのは、自分から来たパターン、スキマ妖怪に攫われたパターン、外

の世界で忘れられたパターンとかがあるわ。まあ記憶とかに問題が起きてなければ貴方の場合スキマ妖怪に攫われたパターンでしょうね」

「スキマ妖怪？」

聞きなれない名前だ。そもそもそんな妖怪自体聞いたことがない。

「あースキマ妖怪っていうのはね、八雲紫っていう『境界を操る程度の能力』を持った妖怪よ。空間に変なスキマを開けて色んなところを自由に行き来する変な奴よ。」

いつの間にか置いてあった紅茶を飲みながら話すレミリア。

多分咲夜がそっと置いていったのだろう。

「えっと……つまりその八雲紫って奴なら俺のいた所に行けるってことか？」

「ええ、そういうことになるわ。」

「じゃあとりあえずそいつを探してみるか。どこにいるんだ？」

俺も目の前に置いてあった紅茶に口を付ける。何故かしょっぱい。おそらく咲夜の嫌がらせだ。こんなところでやるなと言いたいのを抑えて、カップをテーブルに置く。

「紫は基本的には博麗神社にいるわ。今は春だから流石に起きているでしょう」

ん？「起きている」？

俺の疑問を察してか、レミリアが答える。

「ああ、あのスキマ妖怪は冬になると冬眠するのよ」

「寝るのかよ!?」
冬眠するって熊か何かかよ。
つくづくこの幻想郷にいる人は変人ばかりだ。
「まあ、とりあえずは博麗神社に行ってみるのがいいと思うわ。……咲夜」
レミリアがカップを置き、咲夜を呼ぶ。
するとレミリアの横にこの前のメイドが突然現れる。
その手には紙があり、それをレミリアが受け取る。
「ほら、この地図通りに行けば博麗神社に行けるわ」
見てみると、丁寧な周辺地図と、博麗神社の場所をしめす星のマークがそこに描かれていた。
よく見ると地図の横に可愛らしくデフォルメされたレミリアが道を指し示している絵が描かれている。
「この絵って誰が描いたんだ?」
「……あー、多分咲夜ね」
「ふーん、割と絵うまいんだな……っ痛ぇ!」
どこからか物が飛んできた。
明らかに投げられたものだ。飛んでいった方を見ると、金の燭台が地面に着く前に忽

然と消える。
　つまりあれは咲夜だ。どうして咲夜に物を投げられたんだ……？
「褒められるのは苦手なんじゃないかしらね？良く分からないけれど」
「だからって燭台を投げないで欲しいな！」
　俺はどこかにいるだろう咲夜に向かって怒鳴った。
　すると。
「……ねぇ、そこにいるのは、誰？」
　地の底から響くような声がした。
「……ッ!!フラン!?」
　その声を聞いた瞬間、レミリアの表情が凍りつく。
「えーっと、フランって言ったか？俺の名前は鹿野　遊太だ！」
　状況は分からないが、とりあえず名乗る。
　なんせ、俺の直感が「こいつはヤバイ」と伝えている。
「へぇ、そうなんだ。どこにいるの？」
「名乗ってる場合じゃないわ！今すぐ逃げて！すぐにここも粉々になるわ！」
　レミリアが鋭く叫ぶ。すると咲夜が唐突に現れる。
「掴まってください！今すぐここから出します！」

咲夜が手をのばし、大妖精はその手を掴む。
「……とりあえず、お前はあの鎖のついた部屋にいるんだろ？俺からそっちに行くよ」
「貴方、何考えてるの!?」
咲夜が俺の言葉を聞いて怒鳴る。
「ちょっとこの立派な屋敷を壊すのはよせ、って言ってくるだけだ」
どうやら吸血鬼のお嬢様も怖れる化物らしいが、あまり恐怖は感じていない。
「へぇ、そうなの？じゃあ大人しく待ってるわ」
声の主は、俺の言ったことを聞き入れたようだ。かすかに鼻歌が聞こえてくる。
「……で？どうしてそんなにヤバイの？」
「……最近あの子はいろんな人にデュエルを申し込むようになったの。そして、必ずオーバーキルをして、相手を傷つけるの。相手が私たちだけだったらまだ許せたけれど、それをお客様にまでやるようになって、全員を殺しかけたから、部屋に閉じ込めたの」
レミリアはもう止めるのも無理だろうと判断してか、説明しはじめる。
「つまり、デュエルをして勝ってくればいいんだろ？」
まとめて結論を話すと、レミリアが
「やめなさい！私たちのような吸血鬼などならまだしも、ただの人間じゃ……」

「俺はデュエリストだ。始める前から負けることを考えるなんてしたくないね」
俺は背中を向けて、部屋を出る。
「……勝手にしなさい」
レミリアもあきれ果てて俺を止めることを諦めている。
「……気をつけてください」
大妖精は俺のことを心配しているようだ。
「そんな心配するなよ。そう簡単にやられる俺じゃないさ」
俺は適当に手を振る。そしてさっきの鎖のついた部屋の前に着く。
「……しっかしこの鎖、どうやって外すかな……」
頑丈につけられた鎖を前に外し方を考えていると、突然声がする。
「おーそーいー！」
瞬間。
鎖の内側に爆発物でも詰めてあったかのように、鎖が弾けた。
「へっ!?」
俺は慌てて横に飛び退く。鎖の破片がその辺りに飛び散り、床や壁に傷を付ける。
「危ないじゃねーか！何するんだ！」
俺が怒鳴ると、扉が内側から開いた。

もとい、吹き飛んだ。
その中から、金髪で、宝石をぶら下げたような風変わりな羽を持った少女が出てきた。
「なんだ、そこにいたの？」
「……危うくその扉で俺の型が出来るところだったぜ。で、俺に何か用か？」
返って来る答えは決まっている。
「初めまして、私はフランドール・スカーレット。早速だけど、デュエルしましょ！」
「売られたデュエルは買う主義だからな。当然受けるぜ」
実際に目の前にしてわかったことは、色々ある。
だが、言葉が通じるような相手じゃない。
だったら、デュエルを通じて伝えるだけだ。
俺は、バッグから一本の剣が描かれた青のデッキケースを取り出す。その中身をデュエルディスクにセットすると、ディスクが作動してデッキを混ぜる。
「少しは楽しませてね……？」
目の前の吸血鬼の少女の口元が釣り上がる。同時に周りの空気が鋭利な物と変わる。
「お子様吸血鬼さんよ、そいつは俺のセリフだぜ……？」
俺の額の横を汗が伝う。
「これでも４００年は生きてるのよ？」

「残念ながら年寄りだからって優しくするのは主義に反するんでね、本気でやるぜ」
「本気出さないとケガするのは貴方よ？」
お互いが黙る。そして真っ直ぐ相手の目を見据え、笑う。
ここから始まるのは、ギリギリのデュエル……！
「「デュエル!!」」

死を呼ぶ悪魔のくちづけ

フラン　ＬＰ８０００　ＶＳ　遊太　ＬＰ８０００

「ん、ライフポイントは８０００なのか？」

こっちに来てからＬＰ４０００のルールでしかやってないので、てっきりそれがメジャーなのかと思っていた。

「みんなはライフポイントが８０００だと、終わる頃には死んじゃうって言ってたわ」

あっさりと死んじゃうという言葉を言うあたり、人の死には対して興味が無いようだ。

「それは俺に死ねと言ってるのか？」

「ううん、死ぬわけないじゃないって言ってるのよ」

このお嬢さんはだいぶ人使いが荒いようだ。とりあえず、負けるわけにはいかなそうだ。

「俺のターン、ドロー！俺はモンスターをセット、カードをセットして、ターンエンドだ！」

遊太　ＬＰ８０００　裏守備１　魔法罠１　手札４

「なーんだ、守ってるんだ。私のターン、ドロー。私は手札から、ランサー・デーモンを召喚！」

　両手が槍になっている騎士が、吸血鬼の少女のフィールドに現れる。

「バトルフェイズ！ランサー・デーモンでそのセットモンスターを攻撃よ！」

　槍の騎士がその槍になった手を振り抜く。

　だが、むざむざやるわけにもいかん。

「俺のセットモンスターはライトロード・ハンター　ライコウ！その効果でお前のランサー・デーモンを破壊だ！そしてデッキから3枚墓地に送る！」

　ランサー・デーモン（Ａ１６００）ライトロード・ハンター　ライコウ（Ｄ１００）

　ボルト・ヘッジホッグ　音響戦士ドラムス　レベル・スティーラー

　お、なかなか良いな。

「でもランサー・デーモンの効果で貫通ダメージを与えるわ！」

「あー……そうだったわ……」

　衝撃が俺まで届く。当然強烈に痛い。

　遊太　ＬＰ８０００→６５００

「んー、まあいいや。カードを2枚セットしてターンエンド」

「おっと、そこで俺はセットカード、王宮の鉄壁を発動！これがある限り、カードを除外

出来ないぜ！」

「ふーん、なんでもいいけどね」

フラン　ＬＰ８０００　魔法罠２　手札３

とりあえず相手フィールドにモンスターがいないので、ダメージを取っておくか。

「俺のターン、ドロー！俺は、手札からジャンク・シンクロンを召喚！そして、こいつは墓地からレベル２以下のモンスターをフィールドに守備表示で呼び戻す！俺はライトロード・ハンター　ライコウを特殊召喚！」

俺の場にマフラーを巻いた機械技師のようなモンスターが現れる。そして、その横に鎧を着た白い犬が飛び出す。

「さらに！チューナーモンスターがいるとき、墓地からボルト・ヘッジホッグは特殊召喚出来る！来い、ボルト・ヘッジホッグ！」

飛び出してきたのは、ネジを背中に背負ったハリネズミ。

「レベル２のライトロード・ハンター　ライコウとボルト・ヘッジホッグに、レベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが背中のプルスターターを引くと、背中のエンジンが重低音を響かせる。そして、その体が３つの輪に変わり、鎧の犬とネジ持ちのハリネズミを囲み、直線に並ぶ。

「集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！シンクロ召喚！吠えろ、ジャンク・バーサーカー！」

光が輪の中心を通り抜け、中から巨大な斧を持った、真紅の鎧の豪傑が姿を現す。

肩に担いだ斧を地面に叩きつけると、その重さより起きた衝撃で地面が震える。

「ついでだが、自分の効果で特殊召喚したボルト・ヘッジホッグは、フィールドを離れたら除外されるが、王宮の鉄壁があるから行くべきところに行くぞ」

「むー、めんどくさいなー。どうでもいいけどね」

良くはないと思うんだがな……。その効果がなかったらキャノン・ソルジャーとチューナー並べたら勝ちになってしまう。

「バトルフェイズ！ジャンク・バーサーカーで攻撃！」

ジャンク・バーサーカー（Ａ２７００）

フラン　ＬＰ８０００↓５３００

２７００ダメージとは結構なものだと思うんだが、全く動じていない。体は小さくても、やはり吸血鬼なのか。

「とりあえず、これでターンエンドだ」

遊太　ＬＰ６５００　モンスター　ジャンク・バーサーカー（Ａ２７００）　魔法罠　王宮の鉄壁　手札４

「私のターン、ドロー。……」

カードをドローした瞬間、少女が黙る。どうかしたかな、と思って俺は相手の表情を見た瞬間、俺は背筋が凍る。

何故なら……

「くくく……うふふ……いい手札ね」

相手は笑っていたのだ。それも、心底楽しそうに。

「相手フィールドにいる時、このモンスターは特殊召喚出来るわ。来なさい、バイス・ドラゴン！まあ能力は半分になるけれどね」

黒に近い紫色の身をした竜が地面を踏みしめる。

「そして、ダーク・リゾネーターを召喚！」

手に音叉を持った悪魔が、くるりと回転しながら、フィールドにふわりと現れる。

あれ、これなんか見たことあるような気がする。

「レベル5、バイス・ドラゴンに、レベル3、ダーク・リゾネーターをチューニング！」

悪魔から輪が生まれ、竜を包み込む。

「炎の中より生まれし竜よ、地獄の業火で敵を蹂躙しろ！」

フィールドに強烈な暴風が生み出される。思わず手で顔を覆う。

そして、次に聞こえてきた言葉に、俺は自分の耳を疑う。

「シンクロ召喚！やっちゃって、……！」
「……え？」
俺は思わず顔を覆っていた手をどけて、前を見る。
そこには、思っていたとおりのモンスターがいた。
強靭な肉体をした竜は、鋭い爪のついた手を軽く握り、開く。その背ではワインのような赤をした悪魔のような翼がはためいている。その竜を俺は知っている。
「……レッド・デーモンズ・ドラゴン……だって？」
レッド・デーモンズ・ドラゴン……。
俺の友人である、ジャック・アトラスの持っていた世界にたった一つだけしかないカード。
まあ特殊な事情があるのだが、そのへんは割愛。
問題のあるのは、何故この少女が「レッド・デーモンズ・ドラゴン」を持っているのかだ。
「うふふ……、バトルフェイズよ。レッド・デーモンズ・ドラゴンでジャンク・バーサーカーを攻撃よ！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
ワインレッドの竜が口をがぱぁ、と開く。そこに強力な熱量が集まる。そしてそのエネルギーが膨らみ、大きくなったところでそれが巨大な炎の波動となり、放たれる。

その波動が、俺のジャンク・バーサーカーをぶち抜く、
レッド・デーモンズ・ドラゴン（Ａ３０００）ＶＳ　ジャンク・バーサーカー（Ａ２７００）
遊太　ＬＰ６５００→６２００
「ぐっ……。なんつー威力だ、相変わらずやべぇモンスターだ」
「えへへ……私はターンエンドだよ」
フラン　ＬＰ５３００　モンスター　レッド・デーモンズ・ドラゴン（Ａ３０００）
魔法罠２　手札２
「俺のターン、ドロー！手札から調律を発動！デッキからニトロ・シンクロンを手札に加える！そして、デッキからカードを墓地に送る！」
ボルト・ヘッジホッグ
「俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚！さらに、手札からニトロ・シンクロンを召喚！」
機械仕掛けの竜と、消火器のような姿をしたモンスターが飛び出してくる。
「レベル５のサイバー・ドラゴンに、レベル２のニトロ・シンクロンをチューニング！」
消火器のようなモンスターから生まれた輪が、機械の竜を囲む。
「集いし思いが、ここに新たな力となる！光さす道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

緑色の筋肉質の肉体を持った、頭から角の生えた化物のようなモンスターが現れる。
「ニトロ・シンクロンの効果でカードを一枚ドロー！そして、ニトロ・ウォリアーにジャンク・アタックを装備！」
「装備カードね。でも別に攻撃力は上がらないんだ？」
「装備カードは攻撃力を上げるだけじゃないぜ！バトル！ニトロ・ウォリアーでレッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃だ！」
俺が攻撃宣言をすると、少女が驚く。
「えっ？攻撃力でレッド・デーモンズ・ドラゴンに敵わないのに？」
「それはどうかな？魔法を発動しているから、ここでニトロ・ウォリアーの効果を発動するぜ！ダメージ計算時に攻撃力を１０００ポイント上げるぜ！」
「ええっ!?」
ニトロ・ウォリアー　Ａ２８００→３８００
「そのまま攻撃だ！ニトロ・ウォリアー！」
緑の戦士が両手を前に突き出して、紅の竜に飛びかかる。
その拳を喰らって、紅の竜はうめき声を上げながら倒れる。
ニトロ・ウォリアー（Ａ３８００）ＶＳ　レッド・デーモンズ・ドラゴン（Ａ３０００）

フラン　ＬＰ５３００→４５００
「そして、ジャンク・アタックの効果！レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力の半分のダメージを与えるぜ！」
フラン　ＬＰ４５００→３０００
「さて、俺はこれでターンエンドだ」
遊太　ＬＰ６２００　モンスター　ニトロ・ウォリアー（Ａ２８００）　魔法罠　王宮の鉄壁　手札３
「私のターン、ドロー！よくもやってくれたわね……！」
「いやいや、俺だって死にたくはないからな、しょうがない」
「ふーん、そう。なら私の本気を見せてあげるわ！手札から、死者蘇生を発動！地の底より蘇りなさい、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
咆哮とともに、紅の竜が再びフィールドに舞い戻る。
「そして手札から、深海のディーヴァを召喚！深海のディーヴァはその歌声で仲間を呼ぶわ。来なさい、２体目の深海のディーヴァ！」
げっ……。
相手フィールドに紅の竜、レミリアも使っていた人魚のモンスターが２体並んでいるのを見て、俺は心底嫌な予感がする。

そして、その嫌な予感は見事に当たる。
目の前の少女の目が、血のように紅く輝きだした。
「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル2の深海のディーヴァ2体をダブルチューニング！」
人魚2体の体が消えて、炎の輪が4つ現れる。
その炎の輪の中に、紅の竜が入っていく。
「その力を私に貸して！私にいっぱい血を見せて！シンクロ召喚！やっちゃって！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」
炎の中から現れたのは、真紅の竜。流線型のボディの見た目は、まるで地獄の底より這い出て来た悪魔のよう。
「マジかよ……」
それは紛れもなく、ジャックのエースカード。
俺がそのライバル、不動遊星のデッキを使っているのは、偶然か、運命か。
「この子の攻撃力は、墓地のチューナーの数×５００上がるわ！私の墓地にはチューナーは3体！つまり攻撃力は……５０００！」
「攻撃力５０００とかブッ壊れてやがるよ相変わらず……」
俺があまりにも高い攻撃力にあきれ果てていると、自分の後ろから声がする。

「なっ……スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン!?馬鹿！死ぬわよ!?」
「ええっ!?攻撃力、５０００?」
どうやらレミリアと大妖精がこっちに来たようだ。
二人共、目の前の真紅の竜を見て驚いている。
「あら、お姉さま。今からこの人をバラバラにするから、綺麗な血が沢山見られるわ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！相手のモンスターを攻撃よ！バーニング・ソウル！」
真紅の竜が、羽や腕を折りたたみ、まるで戦闘機のような姿になる。そしてそのまま、スピードをつけて緑の戦士に衝突する。戦士はいとも簡単に吹き飛び、衝撃がこっちまで来る。
「ぐ、ぐあああああっ！」
当然、俺の体は吹き飛ばされる。
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（Ａ５０００）ＶＳ　ニトロ・ウォリアー（Ａ２８００）
遊太　ＬＰ６２００→４０００
「私はターンエンド！」
フラン　ＬＰ３０００　モンスター　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（Ａ５０００）
魔法罠２　手札１

「俺のターン、ドロー！……俺はカードを4枚セットして、ターンエンド」
遊太　ＬＰ４０００　魔法罠４　王宮の鉄壁
「へー、守るだけなんだー。でもこのままじゃ死んじゃうよ？ドロー！」
実際、このままでは見事にダイレクトアタックを受けてしまう。
このターンを耐え切れば……。
「私は手札から、おろかな埋葬を発動！墓地にクリエイト・リゾネーターを送るわ！これでスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は５５００！そのままバトル！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン、ダイレクトアタック！ぶっ潰しちゃって！バーニング・ソウル！」
真紅の竜が、俺の方に向かってくる。
「セットカード発動、収縮！元々の攻撃力を半分にする！」
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　Ａ５５００→３７５０
「むー、しつこいなー。それでも、ダイレクトアタックは続くわ！」
遊太　ＬＰ４０００→２５０
「う……うわあああっ！」
真紅の竜の激突を喰らって、俺は壁に激突する。
肺の中から一気に空気が吐き出される。背中から強烈な衝撃を受ける。

「ぐっ……やられたぜ……」

俺はフラフラしながら、なんとか立ち上がる。しかし、体を支えるのも難しく、思わず膝をついてしまう。

「へー、しぶといね。これで私はターンエンドよ」

フラン　ＬＰ３０００　モンスター　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（Ａ５５００）

魔法罠２　手札１

～～

この人間は、今まで見たことがないくらい面白かった。

けれど、攻撃力５５００ものモンスターをなんとかするのは難しいだろう。

そして、私のセットカードは「闇の幻影」と「スカーレッド・カーペット」。

自分の効果で、このカードを破壊することは出来なくて、さらに、このカードに対して何かしらのカードを発動してきたら、カウンター罠で無効。それに、もし除去されても、スカーレッド・カーペットで守りきり、次のターンで決められる。

とっても楽しかったけど、残念な限りだ。

～～

「俺の、ターン！ドロー！」

俺はカードをドローする。そのカードが、思っているとおりのものであると信じて。

「……俺はセットカード、リビングデッドの呼び声を発動！音響戦士ドラムスを墓地から特殊召喚！そして、チューナーがいるからボルト・ヘッジホッグ２体を特殊召喚！」

楽器のドラムのようなモンスターがフィールドに立ち、さらにボルトを背負ったハリネズミが２体現れる。

「さらに、手札から、調律を発動！デッキからジャンク・シンクロンを手札に！そして、デッキからカードを墓地に送る！墓地に送られたのは……ソニック・ウォリアー！墓地に送られたソニック・ウォリアーの効果で、レベル２以下の俺のモンスター、つまり全員攻撃力が５００上がる！」

音響戦士ドラムス　Ａ７００→１２００

ボルト・ヘッジホッグ　Ａ８００→１３００

ボルト・ヘッジホッグ　Ａ８００→１３００

「俺はジャンク・シンクロンを召喚！こいつの効果で、墓地からソニック・ウォリアーを特殊召喚！そして、ソニック・ウォリアーにジャンク・シンクロンをチューニング！集いし星が、新たな力を呼び起こす！光射す道となれ！シンクロ召喚！いでよ！ジャンク・ウォリアー！」

フィールドに現れたのは、どこか正義の味方のような出で立ちで、白いマフラーをたなびかせている戦士。

「こいつの効果！フィールドにいるレベル２のモンスターの攻撃力だけ、攻撃力がアップする！そして、それにチェーンしてソニック・ウォリアーの効果！俺はそこにチェーンして、リミッター解除を発動！フィールドの機械族モンスターの攻撃力は倍になる！逆から処理していくぜ！まずはリミッター解除！」

音響戦士ドラムス　Ａ１２００↓２４００
ボルト・ヘッジホッグ　Ａ１３００↓２６００
ボルト・ヘッジホッグ　Ａ１３００↓２６００

「次に、ソニック・ウォリアーの効果！」

音響戦士ドラムス　Ａ２４００↓２９００
ボルト・ヘッジホッグ　Ａ２６００↓３１００
ボルト・ヘッジホッグ　Ａ２６００↓３１００

「え、あ……」

少女が呆気に取られた表情をしている。だが、俺は止まらない。

「そして最後に、ジャンク・ウォリアーの効果！パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンク・ウォリアー　Ａ２３００↓１１４００

青の戦士に、他のモンスターの力が集まっていく。

「こ、攻撃力１１４００ですって!?ふざけてるにも程があるわ！」

一撃でデュエルが終わってしまうほどの攻撃力を前に、レミリアが叫ぶ。大妖精は、驚きと恐怖でもはや声が出ない。

「さあ、バトルだ！ジャンク・ウォリアー！あの真っ赤な竜を叩き潰してやれ！スクラップ・フィストォォ！」

青い戦士が、地面を蹴って空を飛ぶ。そのまま、空中で旋回しながら、右の拳を前に出す。そのまま、後ろについたブースターが起動し、加速しながら突撃していく。

「ス、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは自分を除外して攻撃を一度無効に……あっ！」

「そう、王宮の鉄壁だ！これにより、除外はできず、攻撃を無効にする効果は発動できない！」

「あ、あぁ……いや……」

青の戦士は、スピードを緩めること無く、そのまま真紅の竜にぶつかっていく。真紅の竜も、それに対して自身の手を伸ばす。しかし、勢いに乗った拳を受け止めきれず、真紅の竜は一撃で吹き飛ぶ。その余波は、部屋どころか、建物を揺るがす。

「あ……きゃあああああっ！」

ジャンク・ウォリアー（Ａ２４００）ＶＳ　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（Ａ５５００）

フラン　ＬＰ３０００→０

少女は吹き飛ばされ、壁にぶつかる。そして、静かになった部屋に、デュエルディスクの、ライフポイントがゼロになったことを知らせるブザーが鳴り響く。

俺は後ろを振り返り

「……どうだ？」

ちょっと意地を張って、そのままその場に倒れた。

「ゆ、遊太さん!?」

大妖精が慌てて走り寄ってくる。

「あー、流石に足腰にキツいわー。そろそろ歳かな？」

「アンタはどうしてこんなに暢気なのよ……」

レミリアも呆れて近寄ってくる。

「いやいや、だって俺は負けないと信じてたからな。つまりはただ楽しくデュエルをしただけだ」

「……私も楽しかったよ……？」

ふと、首を逆側に回すと、先ほどの少女が俺の近くにしゃがみこんでいた。

「あー、フランドール・スカーレットだったっけ？」

「フランでいいよ、遊太」

「じゃあ、フラン。サンキュー、楽しいデュエルだったぜ！」

俺がフランに笑いかけると、フランはちょっと目を逸らす。
「……私、操られてたのかな？わかんないけど、すごくやりすぎちゃった記憶はあるの」
「……えっ？」
突然彼女の口から出てきた言葉に驚き、聞き返してしまう。
「うん、あんまり覚えてないんだけど、全部のデュエリストを倒さなきゃいけない気がして、本気でみんなとデュエルしてたの」
どうやら、殺す気満々だったわけでは無いようだ。そんな危ない奴では無いとわかって、ちょっとほっとしていたところ。
「そのせいで、遊太には危ない目に遭わせちゃったし、私もとっても楽しいデュエルだったから、お詫びとお礼！」
そう言った少女の顔が、俺の頬に急接近して、少し触れて、離れていく。
「……ん？」
「フフフ、フラン!?何してるの！」
「あら、お姉さま？別に私が何しようとも関係ないでしょ？それとも個人的にこの人はダメなの？」
「そ、それはどういう意味よ!?」
「ゆ、遊太さんの頬に、フランさんの……」

「大妖精!?口から泡吐いてるわよ!」

レミリアが真っ赤になって怒り、フランがそれをからかう。大妖精は錯乱して泡を吹く。

「ええっと……」

俺は寝転がった状態で、フランを見上げる。彼女の表情はさっきまでと違い、晴れやかな笑顔だった。

この笑顔の少女、フランドール・スカーレットにキスされたと気がつき、俺が衝撃を受けるのは、もうしばらく後のことだった……。

星屑瞬く運命の分かれ道

「く……ちくしょう……」

俺の手札は、０。そして、フィールドも、０。

その惨状を見て、色とりどりの宝石のようなものをぶら下げた羽を持った、金髪の少女は笑う。

「くすくす……あなたの出した融合モンスターはもういないし、私のフィールドにはレッド・デーモンズ、それにマッド・デーモン。合わせてライフ４０００は吹き飛ぶわ！」

相手のフィールドに鎮座しているのは、悪魔のような赤い竜、そして、生き物の骨を鎧のように装備している悪魔。

「バトル！マッド・デーモンでダイレクトアタック！」

悪魔の腹のところにはまっていた人間の頭蓋骨が、腹についていた沢山の歯にすり潰される。そしてその破片が、まっすぐ俺の元へと飛ぶ。

「う、うわあああっ！」

遊太　ＬＰ４０００→２２００

「そして、レッド・デーモンズで……」
「おい待て、戦闘ダメージ受けたから墓地のヴォルカニック・カウンターを除外して、１８００ダメージな。……あれ？お前ライフ１５００しかないの？」
「……えっ？あ、ちょっと、きゃあああ！」
炎の塊が、状況が読めていない金髪の少女に容赦なく直撃する。
そして、ライフ消失のブザーが鳴る。
フラン　ＬＰ１５００→０
「くーやーしーいーっ！一回も勝てない！」
「ええい、もういいだろ！俺はそろそろ限界だ！もう何回やったと思ってるんだ！２０はやったぞ！」
まだ太陽が一番てっぺんに届いてなかったくらいのころ、つまり、この屋敷でフランとデュエルしてから、俺はフランにやたらと気に入られて、ずっとデュエルしているのだ。
俺のいた所では、ぜんぜん大丈夫なのだが、この幻想郷では、デュエルのダメージが現実となる。そんな環境でデュエルをしつづけたら、それは当然、疲れる。
「フラン、そろそろ休ませてあげなさい。いくら貴方に勝ったとはいっても、彼は人間なのよ。私たちみたいに無尽蔵にエネルギーがあるわけじゃないの」

レミリアが見かねて止めに来たのだが
「……そういうお姉さまだって１０回くらいやってるじゃない」
「ぐっ……」
この姉妹、優しさに欠ける。
「あの……遊太さん、ホントに大丈夫ですか？」
心配した大妖精が近くに来る。
「ああ、吸血鬼姉妹と３０戦連続でやって大丈夫だったらそいつ間違いなく化け物だ」
「……それ、遊太さんもじゃ……」
何か大妖精が俺の方を見て、呆れ果てた表情をしたような気がするが、あまり気にしないことにする。
で。
なんでいつまでも紅魔館にいるかと言うと、ここで話してかなきゃいけないことが出来て、それに関して話していたら夜遅くになってしまい、部屋ならいくらでもあるというのでレミリアにお世話になることになったからだ。
「レミリア、フランがああいった暴走を見せたときに何かなかったか？」
そんなに話していたこと。それは、フランが言っていた「操られていた」ということ

に関してだ。

フランは、力が強すぎるくらいの吸血鬼だそうだ。そんな吸血鬼に、洗脳をかけるとはいったいどんな化け物なのか。

放っておいたら、レミリアなどにも被害が出るかもしれない。

「え？そうね……」

レミリアは突然の質問に驚く。そして少し上を見て思案する。どうやら吸血鬼も考え事をする時は、人間と同じ行動をとるらしい。

「……そういえば、あのスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを手に入れてからかしら、なんだかやたらとデュエルを仕掛けてきたわね」

「はい、確かにあの辺り頃、妖精メイドなども妹様にデュエルを仕掛けられたと言っていましたね」

レミリアの横に突然現れた咲夜が、レミリアの言ったことに同意する。突然現れることに関しては、もう慣れてきた。

「フラン、そのレッド・デーモンズ・ドラゴンもそうだが、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンはどこで手に入れたんだ？実を言うと、俺のいた所では、そのカードは世界に1枚しかない特別なカードで、選ばれた奴だけが持っていたんだ」

流石に気になってしょうがなかった。友人であるジャックが持っていた、シグナーの

竜のカード。何故そんなカードを持っているのか疑問が絶えなかった。
　その答えにフランはあっさりと答える。
「レッド・デーモンズは買ってきてもらったパックに入ってたよ！」
　どうやら、こっちの世界にはレッド・デーモンズは複数枚存在するらしい。今度買おう。
「でも、スカーレッド・ノヴァは……」
　フランの表情がそこで曇る。
「……覚えてないってことか」
「うん……なんかね、いつの間にかデッキの中に入ってたような気がするの」
「いや……それは流石にないでしょう」
　大妖精が困ったような表情を見せる。
「いや……あるかもしれない」
「ええっ？」
「そのスカーレッド・ノヴァを手に入れた奴は、突然デッキからカードが生み出された」
「そ、そんなのありえないわ！カードが自然と現れるなんて！」
「そのレッド・デーモンズは、地縛神という世界を滅ぼしかねないモンスターと対抗するために生まれたんだ。そして、その使い手が、力に目覚めた時、自然とスカーレッド・ノ

ヴァが生まれた。だから、そうなってもおかしくはない」
「私にとってはもはやそれがおかしいんですけど……」
「うーん、それじゃあ、どこかで私が力に目覚めたってことなの？」
「いや、多分、強制的に覚醒させられたとかじゃないか？そして、無理やりだったからその力に飲み込まれた、とかな」
そうだとすれば、2枚目のスカノヴァが突然現れたことと、記憶が曖昧なことが繋がるだろう。
「じゃあ、どうやって、それにどうして強制的に覚醒させたっていうのよ？それがそもそも分からないわ」
「それなんだよなぁ……」
レミリアの言うこともっともだ。しかし、現在の状況でそれを判断することは難しいだろう。

そんなことを話していたら、夜になっていたわけだ。
フランはあれから、変な様子を見せたところはない。それに、スカーレッド・ノヴァを出しても、まったく問題なかった。
そうなると、制御できなくてああなった、もしくはそもそも関係ないことだった、と

いう二つになるだろう。
俺は割り当てられた部屋のベッドに転がり、考える。
……俺がここにいることも、関係あるんじゃないか？
考えても答えは出ず、そのまま眠りに落ちていった。

おそらくいつもの時間頃に目が覚める。
おそらくというのも、この館には窓がない。つまり、太陽が出ているかどうかすら分からない。
俺は体を起こして、大きく伸びをして、横に寝ていた金髪の少女をどかす。そして、布団を丁寧に戻し、顔を洗いに洗面台に……。
ん!?
違和感を感じて、勢いよく振り返る。
ここまでの内容に間違いはなかった。問題はあった。
俺の布団の中に、フランが入っていた。
「ん……おはよう、遊太」
金髪の少女が目をこすりながら、こっちを見て朝の挨拶をする。
「おはよう……じゃねーよ!!!なんで布団の中に当然のように入ってるんだよ！つーか鍵

はどうした！」
「んー、なんとなく？」
この少女はまったく気にしていないようだ。もう気にしてはいけない気がした。
「ああ、もういいよ。俺はすぐに出るからお前も早く出るんだぞ」
「……布団から遊太の匂いが」
「速攻出ろ！」
俺は荷物と一緒にフランの首根っこをつかんで、連れて行く。
「おいレミリア！お前の妹どういった育て方してやがる！」
「え、何が？」
レミリアがこっちの珍妙な姿を見て、驚きながら声を上げる
「お前は客人のベッドに侵入するように躾をしたのか！」
俺が激高したが、きょとんとして目を見開く。
「……別に客人というより友人だしいいんじゃないの？」
当然のことを言われたような感じである。
「てか男子の寝ている部屋に女子が入ってくるってどうなんだ！」
ちなみに、大妖精の家で寝ている時は、ソファーで寝ている。当然全員と別の部屋だった。

「うーん、男の知り合いはほとんどいないからよくわからないわ」
ああ、なるほど。男子の知り合いがそもそもいないからどういった扱いをするものか分からないと。
「せめてベッドに侵入はしないようにしてくれ……」
本当に心臓に悪かった。
「あ、おはようございます、遊太さん。……どうかしたんですか？」
起きてきた大妖精が、目をこすりながらこっちに歩いてくる。
「いや……なんでもない……」
朝からもうなんだか疲れてきたがまあいい。

朝食をとり、早いところ博麗神社に行くことにした。
玄関に、レミリアと咲夜、そしてフランが見送りに出てくる。
「それじゃあ、気をつけてね。博麗神社についたらそこの腋出した巫女によろしく言っといてね」
「ああ、わかった。泊めてくれたり、色々教えてくれてありがとうな」
腋出した巫女っていったいどういうことだよ、とは思ったのはさておいて、泊めてくれたお礼をする。夕飯も大変豪華だった。あんなに豪華な食事は久しぶりだった。そ

れなのに「素材に関しては対したことないけれど、咲夜の腕は確かだから許して頂戴」とか言ってた。流石お嬢様だった。

「いってらっしゃいませ、遊太さん」

「ああ、ありがとう。飯はホント美味しかったぜ」

「あ、はい、ありがとうございます……」

咲夜が何故か俯いてぼそぼそとしゃべる。なんだろうか、初対面のことを考えると嫌われているのだろうか。

「遊太ーー！また来てねーー！」

フランが元気よく手を振る。最初に会ったときとはまるで違った元気の良さである。ある意味元気いっぱい、むしろ無邪気すぎるくらいだったとも言えるが。

俺は笑顔で手を振り返す。そして、見えなくなるほど離れたら、手を下ろして前を向き、まっすぐ歩き始める。

地図を見直すと、そんなに難しい道でもなく、ちょっと安心したところで

「そこの誘拐犯、ちょっと待った！」

……邪魔が入った。

どうせまた大妖精を誘拐したなーとか言って、弾幕飛ばされるんだろうなーと思ったところで、あることに気がつく。

「えーっと……大妖精、ずっとついて来て大丈夫なのか？」
　突然質問をぶつけられた大妖精は、びっくりしてこっちを見る。
「あ、ええっと……」
「ここからは地図もあるし、ついて来てくれなくても大丈夫だぜ。あんまり負担は掛けたくないし」
　どうやらこの幻想郷、毎日行かなければならないところはないみたいが、家を空けたままにしておくのは不安だろう。
　案の定大妖精もそう考えていたらしく、困った表情が少し緩む。
「すみません、最後までついて行けなくて……それじゃあ、これでお別れですね」
「そうか、元の所に帰ったら戻れないんだな。まあもしもまた行けるような時があったら、その時はよろしくな」
「あの……遊太さん！」
　別れの挨拶を述べたところで、大妖精が顔を真っ赤にして大きな声を出す。
　その口が、ゆっくりと開く。
「わ、私、もっと強くなって、遊太さんの隣にいられるくらいになりますから！」
　それは彼女なりの決意だったのだろうか、緊張した表情でそんなことを言う。
「……次、デュエルする時には、俺に勝てるように頑張れよ！」

俺は大妖精に背を向けて道を歩きながら、手を振る。
何故か後ろから「大変だな……大妖精」といった声が聞こえてきた。

～～

スターダスト・ドラゴン。
私のデッキに入っている、切り札のドラゴン。
その力は、他のカードの破壊を身を挺して守る能力。
その体は、光を跳ね返して銀色に輝き、その姿はまさに星屑のよう。
しかし……。
「これをどうすればいいっていうんだよ……」
目の前にいるのは攻撃力が３０００の、のっぺりとした巨大な体を持った、黒いモンスター。
対する銀色の竜は攻撃力２５００。
「魔理沙、いい加減そのモンスターを寄越しなさいって言ってるのよ。何度も倒すのも飽きて来たわ」
そのモンスターを召喚した相手、博麗霊夢は手札を広げて自分を扇いでいるくらいの余裕である。

いつものようにデュエルしようとしたら、霊夢があの変なモンスターを使ったデッキを使い始めた。そして、私のスターダストを寄越せと言って来るようになった。ただし毎回無視して逃げている。

「う、うーん……ターンエンド？」

私がターンを終了すると、スターダストがこっちに顔を向ける。

おいお前そのままじゃ負けるぞどうすんだ、とかそんな感じのことを言っている（ように見える）。

私は、どうにもならんよこの手札じゃ、といったように肩をすくめる。

可能な限りカードは信じる主義だが、流石にどう展開してもあのモンスターを倒せない。

肩をすくめた私を見て、スターダストは呆れたように前を向き、翼をはためかす。

なんだか、まだまだだな、と言われたようで腹が立つ。

おそらく、このスターダストは、誰かの物だったんだと思う。しょっちゅう、前の主人はもっと出来る奴だった、みたいな感じの雰囲気を醸し出していて、私を落ち込ませる。

しかし、こっちから攻撃出来ないのに向こうは直接攻撃してくるような化け物をそう簡単に倒せるかと思う。私は最強のデュエリストじゃなくて、あくまで普通の魔法使い

だ。そんなことをモンスターに期待されても困るというものだ。
「まったく、進化が見られないわね。仕方ないからダイレクトアタックするわ。やってしまいなさい。自縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ！」
　霊夢の声を聞いた化け物が返事をするように、体を取り巻く青い筋がぼんやりと光る。
　自らの腕をおもむろに持ち上げて、私を地面に叩きつける。
　私に当たる前に、目の前にいるスターダストに当たりそうになるが、スターダストの体はその手をすり抜ける。その瞬間スターダストはこっちを見て、またかよ、といった呆れ顔をした（と思う）。
「ち、ちくしょおおおおおっ！」
　魔理沙　ＬＰ２１００→０
「ほら、負けたんだからスターダスト・ドラゴンを渡しなさいよ。アンティルールって言ったでしょ」
　アンティルール、つまり負けた方は勝った方にカードを一枚渡さなきゃいけないルール。そんなの受ける方が悪いというものだが、すっぽかしてもあんまり深追いされないので毎日そうしてる。
「い、いやぁ、霊夢。このスターダスト・ドラゴンは拾ったものだから早く返さないと

「……」

「私はそれを奪おうとしてるんだから関係ないでしょ。貴方の言葉を借りるなら死ぬまで借りるだけよ」

「私は奪おうとして言ってるんじゃないぜ！本当に返すつもりで借りてるんだ！」

たとえパチュリーから持ち運ぶのが大変なくらいの大量の本を借りていても、アリスの部屋から絶対持ってくなと言われた人形をちょっと借りていても、私はきちんと返すつもりでいる。死んだら。

「返してない以上説得力がないわ」

こういった会話を聞いてる分には完全にいつもどおりの霊夢に見える。

けれど、彼女の目は、いつもと違って、闇のように黒い中に黄色い目玉になっている。明らかに霊夢は操られていると思う。普段の霊夢ならいくらがめつくても、他人のカードを奪おうとはしないような中途半端に優しい奴なので、あんなにスターダストを欲しがったりしない。

「おっと、ちょっと用事を思い出したから帰るぜ！んじゃあな！」

まあ、こういった時は逃げるに限る。私は手に持ってた箒にまたがり、フルパワーで空を飛んで逃げる。霊夢との距離が一気に離れる。

「全く……。仕方ない、次こそはスターダストを貰うわ」

いい加減、あのモンスターをぶっ飛ばして、霊夢から奪い取らないとろくに神社で休めもしない。

それに、ああなる前の霊夢がしていた、異変解決のための活動もしていない。と、いうか、私はその異変自体なんなのかを知らない。ただ、異変が解決したら私に教えてくれることはいつものことのはずなので、まず解決してないことは間違いない。それに知らないから私が変わってやることも出来ない。困ったものだ。

まあ、異変なんて対して大事件になることもないし、問題ないだろう。

しかし、こんな悠長にこのことを考えていた私は、尻拭い的な意味合いで、後で大変な目に会うのだった……。

進化する翼はためかせ

聞いた話だと博麗神社は、魑魅魍魎の類がうろうろしていて危ない所だが、とても桜の綺麗な所だと言う。

顔を上げると、一面にピンク色の花が咲いている。風が吹くと、花びらが舞い散る。手を伸ばして開くと、その手のひらに桜の花びらが一つそこに収まる。全く聞いたとおりの桜の美しさである。

桜なんてこんなに綺麗なものだったかと思いながら、階段の次の段に足をかけて、さらに奥へ進もうとした時。

「ちょっ、どっけー！そこの！」

唐突に横から大きい叫び声が聞こえてくる。びっくりしてそっちを見ると、いかにも魔法使いといった風貌で、黒いフリルのついた帽子を被って、箒にまたがって空を飛んで真っ直ぐこっちに来ている。

……ん？真っ直ぐ飛んできている？

俺は勢いよく横に飛んで床に転がる。俺が飛んですぐに、さっきまでいた階段の途中ににミサイルのように魔法使いの少女が突き刺さり、土煙を上げる。

「危ないだろ！何するんだ！」

土煙が収まると、その中から少女が屈託のない笑顔をして出てくる。

「やー、こんなところに来る人がいるとは思わなくてさー。いても大体私のことを回避出来るような知り合いくらいだし」

反省の色は全く見られない。階段が少しかけているところを見ると、回避していなかったら多分等が土手っ腹に風穴が空いてしまっていた事だろう。当然命の保証はない。

「……ってことは、お前はここによく来るのか？」

「うん、まあそうだな、ほぼ毎日のように来てるぜ。あ、ところで名前は？」

少女は帽子のつばをいじって位置を整えながらちらりとこっちを眺めながら尋ねる。

「あ、俺は鹿野　遊太だ。お前は？」

「私は霧雨　魔理沙だ。お前はこんな所までいったい何の用で来たんだ？まさかただの人間が観光に来た、ってわけじゃないだろ？」

帽子のつばを上げてにやりと笑ってこっちを見る魔理沙。

「ああ、俺は外来人なんだけど、元の世界に帰るために八雲　紫って奴に会いに来たんだ」

八雲　紫という名前を出した途端、魔理沙の表情が変わる。

「いや、紫はなぜか今いないけど……どこで紫のことを聞いたんだ？」
「ん？それはレミリアっていう吸血鬼に……」
途中まで言ったところで魔理沙がものすごく驚いているのに気がつく。
「お前、何で生きてるんだ？ただの人間じゃデュエルでボコボコにされておしまいだろ？」
「いや、ただの人間じゃない、決闘者だ」
決闘者の言葉を聞いて、魔理沙が左手のデュエルディスクを見る。
「ほー、レミリアに勝つってことはそれなりに強いんだろうなー」
頭の後ろで手を組みながら、こっちをちらっと見る。
「そりゃ当然強いぜ？試してみるか？」
「もちろん、言われただけじゃ信じられないぜ」
決闘者が出会ったらやることは当然、一つである。
「「デュエル!!」」
遊太　ＬＰ４０００　ＶＳ　魔理沙　ＬＰ４０００
「先行は私からだぜ、ドロー！お、こりゃいい手札だ」
魔理沙がデュエルディスクから勢いよくカードをドローする。見た感じ、割と手馴れているようだ。

「私は、手札からドラグニティ―ファランクスを捨てて、調和の宝札を発動！カードを二枚ドローだ！そして、ドラグニティ―ドゥクスを召喚！効果で墓地のファランクスを装備！」

白い服を身に着けた鳥人がフィールドに降り立ち、青い重装兵のような竜にまたがる。

「ファランクスの効果！装備カードになってるこのモンスターをフィールドに特殊召喚するぜ！そして、レベル４のドラグニティ―ドゥクスに、レベル２のドラグニティ―ファランクスをチューニング！偉大なる竜の騎士よ、その雷の牙で敵を貫け！シンクロ召喚！ドラグニティナイト―ヴァジュランダ！」

鳥人が竜の背中から降りると、その竜が消えて２つの輪が現れる。その輪の中に鳥人が入り、光を放つ。現れたのは大きな翼を持ったオレンジ色の竜。

「こいつがシンクロ召喚に成功した時、墓地からレベル３以下のドラグニティと名のつくドラゴンを装備出来る！ドラグニティ―ファランクスを装備！そしてファランクスをまた特殊召喚だぜ！」

とりあえず、相手のデッキは【ドラグニティ】で間違いないだろうなー。

「レベル６のヴァジュランダに、レベル２のファランクスをチューニング！空から落ちた星屑よ、この地に降りて光り輝け！シンクロ召喚！」

……ん？レベル８で「星屑」？それにこのなんだか良く分からないが
「来るか……切り札が」
と言ってしまうようなこのオーラはもしかして。
「飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」
ですよねー。
魔理沙のフィールドに現れたのは、ガラス細工のような竜。竜の体に当たった光は、角度によって色が少しずつ変わって美しい。
と、いうか。
「遊星のスターダストじゃねーか!!」
フランのレッド・デーモンズ・ドラゴンとか、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンと違って、これは間違いなく不動　遊星のスターダスト・ドラゴンだ。
何故わかると言われても困るが、わかるものはわかるのだ。
「ん？お前こいつの持ち主を知ってるのか？私はこいつを拾ったんだけど……」
どうやら偶然魔理沙が拾ったらしい。スターダストは体を慣らすためか、その場でぐるぐる回ってる。
「俺の友人だよ。なんでここにあるのか知らないけどな」
「ふーん、そいつはどこにいるんだ？」

「どこって言っても俺の元々いた所だからな……」
「じゃあすぐには会えなさそうだからしばらく借りるとするぜ！」
　借りんのかよ！
「ま、とりあえずカードを2枚セットして、ターンエンド」
　魔理沙　ＬＰ４０００　手札３　フィールド　スターダスト・ドラゴン（Ａ２５００）
　魔法罠２
「じゃ、俺のターン、ドロー。……なるほど、カードを5枚セットして、ターンエンド」
　俺の行動に、魔理沙がびっくりする。それもそうだ。俺だって5枚セットされたらそうなる。だからと言って何もないのも怖いが。
「はぁっ!?何考えてるんだお前？」
「立派な作戦だよ魔理沙君。ほら、君のターンだ」
　……作戦は多量セットで相手をびびらせること。つまり、事故である。
　たまにはこんなこともある。
　遊太　ＬＰ４０００　手札１　魔法罠５
「じゃ、じゃあドロー。手札から竜の渓谷を発動するぜ！」
　魔理沙がカードを発動した瞬間、周囲の地面が盛り上がり、まさに竜でも出て来そうな深い谷と化す。相変わらずフィールドのリアルさは凄いもので、どこからか少しカ

ラッとした空気まで流れ込んでくる。
「手札のテラ・フォーミングを捨てて、竜の渓谷の効果発動！デッキからドラグニティアームズ―レヴァテインを墓地に送るぜ。」
危ない。ここでドゥクスなんてサーチされてたら危なかった。
「じゃあ、バトルだ！スターダスト・ドラゴン！やっちまえ！シューティング・ソニック！」
スターダストがこっちを見て、悪く思うなよ、とニヤリと笑いながら言って（いたように見えて）、大きな口から強烈な衝撃波を吐き出す。当然それは俺に命中して、地面に叩きつけられそうになる。
遊太　ＬＰ４０００→１５００
「ぐ、いってぇ……」
「あれ、ミラーフォースとかじゃないのか。いっか、これでターンエンドだ」
魔理沙　ＬＰ４０００　手札２　フィールド　スターダスト・ドラゴン（Ａ２５００）
魔法罠２　竜の渓谷
「俺のターンだ、ドロー！」
さて……一応手札は揃ったが、平気かね？
「俺はセットしていた緊急テレポートを発動！そいつにチェーンして非常食！緊急テレ

ポートを墓地に送る！そして、ライフを１０００回復！緊急テレポートの効果で、サイ・ガールをデッキから特殊召喚！」

遊太　ＬＰ１５００→２５００

どうやらライフが回復すると、実際の痛みも引くようだ。いったいどうなっているのか気になるが、このままでは吹っ飛んでしまう。

そして、フィールドに現れたのはサイキッカーというより魔法使いのようないたいけな少女。俺のドロー加速のために、ひたすら除外されまくっている。そして何より、可愛い。

そんなサイ・ガールがこっちを向いて

「マスター、今回もよろしくお願いします！」

ぺこり、と頭を下げる。

「しゃべんのかよ！」

いや、いくら実体化していても意味のない「ハァッ！」とか「グォォォ！」とかそんな感じのことしかしゃべんないと思っていたらこれだ。

「私もよくわからないんですよね、何故か実体化してますし、マスターと話せてますし」

……どうでもいいが、マスターと呼ばれるのがなんだかこそばゆい。

「ま、まあいい。とりあえずいつも通り頼むぞ」

「はいっ！」
　元気よく返事をするサイ・ガールには大変忍びないが、これしかやることがない。
「サイ・ガールをリリース！マックス・テレポーターを召喚！」
　いきなりリリースしたというのに嫌な顔ひとつせず墓地に消えた。良い子過ぎる。
「こいつの効果でライフを２０００払い、デッキからサイコ・コマンダーと寡黙なるサイコプリーストを特殊召喚！」
　遊太　ＬＰ２５００→５００
「手札の静寂なるサイコウィッチを捨てて、サイコプリーストの効果！墓地のサイ・ガールを除外！そして、レベル３、寡黙なるサイコプリーストに、レベル３、サイコ・コマンダーをチューニング！強大な力を我の元に、敵に恐ろしい夢を与えよ！シンクロ召喚！サイコ・デビル！」
　名前のとおり、悪魔のような形相をした化け物がフィールドに現れる。
「サイコプリーストが墓地に送られたことにより、さっきの効果で除外したサイ・ガールを特殊召喚！」
　空間に裂け目が現れ、その中からサイ・ガールが飛び出す。
「ただいまです、マスター！」
「おーおかえり、まあまたすぐシンクロするけどな」

「いえ、私でよければいくらでも使ってください。お役に立てるだけでうれしいです」
けなげっ！なんてけなげっ！
「よ、よし。まずはサイ・ガールの効果だ。デッキトップを除外だ。そして、レベル６のマックス・テレポーターと、レベル２のサイ・ガールをチューニング！我が魂を対価に、我が元へ降り立ち、敵を焼き尽くせ！シンクロ召喚！いでよ！メンタルスフィア・デーモン！」
こちらも、悪魔のような見た目をして、大きな翼をもったモンスター。
……そういやデビルとデーモンの違いって何なんだろうなー。
「で、墓地にいったサイ・ガールの効果だ！除外したカードを手札に加える。で、サイコ・デビルの効果だ、相手の手札をランダムに選び、それがモンスター、魔法、罠のどれか宣言する。お互いに確認して合っていれば、相手のエンドフェイズまで攻撃力が１０００上がるぜ」
「ま、手札は２枚だし、３分の１のいい運試しだな」
「いやいや、ダブった調和の宝札と竜の渓谷とかだろ、どうせ」
魔理沙の表情が強張る。どうやら図星だったようだ。
「……お前……手札見たんじゃないだろうな」
「見なくてもモンスターだったら召喚するだろうし、大嵐サイクロンナイト・ショットな

ら打つし、罠ならセットする、というか使う罠少ないし。まあ選択するのは魔法で」
　いや、別に難しいことじゃないと思うんだけどな。変なのいないドラグニティなら大体わかると思うんだが。
「……調和の宝札だよ」
「よし、じゃあ攻撃力が上がるぜ」
　サイコ・デビル　Ａ２４００↓３４００
「それじゃ、バトル！メンタルスフィア・デーモンでスターダストを攻撃！」
「おっと、罠発動だぜ！安全地帯！直接攻撃が出来なくなるけどスターダストは破壊されず、効果対象にもならないぜ！」
　う、めんどくさいカードが来た。
「だが、ダメージは受けるぜ！」
　メンタルスフィア・デーモン（Ａ２８００）ＶＳ　スターダスト・ドラゴン（Ａ２５００）
　魔理沙　ＬＰ４０００↓３１００
「くぅっ……」
「さらにサイコ・デビルで攻撃！」
　サイコ・デビル（Ａ３４００）ＶＳ　スターダスト・ドラゴン（Ａ２５００）

魔理沙　ＬＰ３１００→２８００
「いてて……まあ、まだライフ差では勝ってるから問題ないぜ」
「じゃ、カードを一枚セット。エンドフェイズ！罠発動、超能力治療！チェーンして超能力治療！さらにチェーンして超能力治療！このターン墓地に送られたサイキック族の数×１０００のライフを回復するぜ！このターン墓地に送られたのは……６枚！よって６０００のライフを回復する！それが３枚！つまり１８０００のライフを回復だ！」
「……はい？」
魔理沙が信じられないものを見るような目で見ている。そりゃないぜみたいな顔。なんせ初期ライフの４倍以上だ。
だが、現実は非情である。
遊太　ＬＰ５００→１８５００
「少女よ、これが絶望だ。ターンエンド」
ちょっと思い出したある人の台詞を使わせて貰った。本当はもう少しやりたかったんだが、いかんせん手札が悪かった。
遊太　ＬＰ１８５００　手札０　フィールド　サイコ・デビル（Ａ３４００）　メンタルスフィア・デーモン（Ａ２８００）　魔法罠１
～～

「わ、私のターン、ドロー……」

いや、フィールドのモンスターの攻撃力も強いし何よりひどいのはあのライフだ。なんでこうなったんだよ。これで非常食があればエンドの超能力治癒を墓地送りにしてさらに回復されていたのか。危ない。本当に危ない。

だけど、このデッキであの攻撃力を超えられるのか……？

ええい、考えるのは合わない。とにかくできることからだ。

「ええい、とにかく手札からドラグニティ―ブランディストックを捨てて調和の宝札！2枚ドロー！」

……ううむ、ここから竜の渓谷の効果でなんかサーチして……。

と、思っていたとき、スターダストがこっちを見た。

デッキを信じれば、必ずこの状況を打開できるはずだ。そして、君なら「クリア・マインド」の領域にたどり着けるはずだ。

頭に直接声が響く。透き通ったように繊細な声は、多分スターダストのものだ。

い、いやいや、なんで声が聞こえるんだよ。そしてそれはさておいてもデッキを信じるようなことが今から出来るのか？……いや、無理やりやろうと思えば出来るけど、それをしてどうするんだ？私はエクストラデッキのあるカードが気になって少し見てみる。

「……まさか、な」

私のエクストラデッキにずっと入っている、何も書いてないカード。ただ、枠が白いからシンクロモンスターのカードだということはわかる。まさか無銘のカードにモンスターが現れるなんてないだろう。無銘のカードをエクストラデッキに戻そうとした。すると、カードが静電気を帯びたかのように私の手をぴりっと刺激する。びっくりして見ると、さっきまで白かったはずのカードに絵が浮かび上がりつつあった。スタードラトがくるりと回ってこっちを見る。

さあ、限界を突破しよう、魔理沙。

なんかよくわからないことをスターダスト（らしき何者か）が言っている。なんだかよくわからないが、私は私の出来ることをするだけだ。

「……私は、ドラグニティ―トリブルを召喚！効果でデッキから、ドラグニティ―ブランディストックを墓地に送る！そして、セットしていたリビングデッドの呼び声を発動！墓地のブランディストックを特殊召喚！レベル1のトリブルに、レベル1のブランディストックをチューニング！シンクロ召喚！フォーミュラ・シンクロン！」

レーシングカーのようなシンクロモンスターがフィールドに現れる。今までただのドローソースだと思ってた。あとたまーに相手ターンにスターダスト出してみたりくらい。

「フォーミュラ・シンクロンの効果！デッキからカードを一枚、ドロー！」

さっきスターダストはクリア・マインド……つまり明鏡止水とかなんとかと言っていた。多分言いたいことは、無心になれってことだと思う。とりあえず目を瞑って冷静になってみる。目を閉じるだけで、風の音や木のざわめく音などがはっきりと聞こえてくる。……こんな中で無心になれるか。無理だ。

全く……ご主人はDホイールに乗りながらクリア・マインドの境地にたどり着いたっていうのに……情けない。

Dホイールってバイクみたいなアレだろ？あれに乗って目を瞑るなんて普通に死ぬわ。お前の主人はどうなってやがる。

まあ、流れ星のことでもイメージするといい。そうすれば多分大丈夫さ。

なんで流れ星なのか、というのはもう気にしないことにする。空から落ちてくる星の欠片、そういやスターダストもそんな奴だったな。今でも充分光り輝いてるが。

イメージしたのは、もっと高く、もっと速く飛ぶ、スターダストの姿。きっと綺麗だろうな。その瞬間、エクストラデッキから強烈な電気でも走ったかのような刺激が伝わる。

今だよ、魔理沙。

流石にわかってるわ。言わなくてもいい。

「……さあ、行くぜ！私は、レベル８のスターダスト・ドラゴンに、レベル２のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！絡みつく時間を振り切り、限界までぶっ飛ばせ！アクセルシンクロ！」

レーシングカーのようなカードが輪を生み出し、それをスターダストが通り抜ける。

その瞬間スターダストの大きい体が消える。だが、私にはわかる。すぐに姿は見れる。

「戦場に流れ輝け！シューティング・スター・ドラゴン！」

私が叫ぶと同時に後ろから突風が巻き起こる。風がやんだそこにいたのは、流線型となり、進化を遂げたスターダスト・ドラゴン。シンクロ前と比べ、輝きが増している。無銘のカードには、フィールドのモンスターと同じモンスターがはっきりと描かれている。

「全く、綺麗になっちゃってさ……」

うん、僕が見込んだ通りだ。流石だよ、魔理沙。

正直私が何かしたんだろうか、とは思ったが、気にしないことにする。

さあ、ここから逆転だ！

～～

まさかクリア・マインドまでしてのけるとはな……予想外だ。

しばらく心理フェイズに入っているとは思ったが、それはちょっと想定してなかった。

「どんどん行くぜ！手札から、永続魔法、竜装術を発動！こいつの効果で、手札のドラグニティ―コルセスカを装備！竜装術の効果によって、ドラグニティと名のつくモンスターを装備しているモンスターは攻撃力が５００上がるぜ！」

シューティング・スター・ドラゴン　Ａ３３００→３８００

「シューティング・スターの効果！デッキの上から5枚を見て、その中に入ってるチューナーの数だけ攻撃できる！行くぜ！一枚目、ドラグニティ―アキュリス、チューナーモンスター！二枚目、ドラグニティ―ブラックスピア、チューナーモンスター！三枚目、ドラグニティ―ファランクス、チューナーモンスター！四枚目、ドラグニティ―ピルム、チューナーモンスター！」

次々にチューナーモンスターをデッキからドローしていく魔理沙。ライフが沢山なければ既に死んでいる。そして……

「そして五枚目、ドロー！ドラグニティ……アームズ―ミスティル……チューナーじゃないか……。まあいい、これで四回攻撃だ！」

なんとなーくシューティング・スターががっかりみたいな顔をしているようだ。そんな遊星のようなことを期待されても大変困るものだろう。何度かいるものと想定して

チューナーばっかデッキでやってもなかなかうまくいかないものだ。４枚でも相当難易度だというのにデッキを圧縮されたドラグニティでだぞ……？いやーハイド・ライド強かったな……って今デュエル中だった。しかもとんでもない目に遭っているんだった。

「バトルフェイズ！シューティング・スター！攻撃だ！スターダスト・ミラージュ！」

シューティング・スターが４つに分身する。そして、赤色の分身がサイコ・デビル、黄色がメンタルスフィア・デーモン、残りが俺に向かって体当たりを仕掛けてくる。助走をつけてこっちに来るが、早すぎて音や衝撃が後からやってくる。

ん、てか待てよ。この世界ではデュエルのダメージが現実のものとなるんじゃなかったか？

３８００×２＝７６００、３８００－３４００＝４００、３８００－２８００＝１０００、７６００＋４００＋１０００＝９０００……。

……死んでしまう。

「ちょ、どわあああああ！」

遊太　ＬＰ１８５００→９５００

……それでもまだ９５００、デュエル開始の倍はある。物凄く体中が痛い。

「コルセスカの効果で、ドラグニティ－アキュリス、ドラグニティ－パルチザンを手札に

加えるぜ。ま、これでターンエンドだ」

　魔理沙　ＬＰ２８００　手札３　魔法罠０　竜装術　竜の渓谷　ドラグニティ―コルセスカ

　さて、まだライフはあるが、クリア・マインドに到達した魔理沙だと、下手すれば次あたりにグォレンダァ!されてもおかしくない。五回攻撃を注意するプレイングをする時点で恐ろしい。

「俺のターン、ドロー!」

　手札１のセットカード１……。ライフで勝っていてもフィールドで負けている。シューティング・スターにはモンスター一体の攻撃を止める効果がある。それを考えると……。

「俺は貪欲な壺を発動!墓地のサイコ・デビル、メンタルスフィア・デーモン、サイコ・コマンダー、サイコ・コマンダー、寡黙なるサイコプリーストをデッキに戻し、２枚ドロー!」

「お、ここでドローソースか。思ったより追い込まれてるか?」

　ニヤニヤと笑う魔理沙。そのとおりなのがムカつくところだ。

「……手札から緊急テレポート、サイコ・コマンダーを特殊召喚、サイキック族がいるから、リリースなしでアーマード・サイキッカーを召喚。レベル６のアーマード・サイキッ

カーに、レベル3のサイコ・コマンダーをチューニング！来い、ハイパーサイコガンナー！」

両手に銃を携えたモンスターがフィールドに現れる。

「シンクロ口上はなしか、そんだけ追い込まれてるのか？それに攻撃力で負けてるし」

「さて……このままバトルフェイズだ！やれっ、ハイパーサイコガンナー！」

両手の銃を構えながら突進するモンスター。

「えぇっ!?ならシューティング・スターの効果！こいつを除外して攻撃を止めるぜ！」

巨大な光り輝くモンスター姿が消え、銃を構えたモンスターは動きを止める。

「何を企んでたのかわからんが、これでとりあえず止めたぜ！」

魔理沙はとりあえず落ち着いた風で、勝ち誇った顔をしている。

が。

「……何勘違いしてんだ？」

「ひよ？」

魔理沙が素っ頓狂な声をあげる。完全に虚を突かれたような表情である。

「俺のバトルフェイズは、まだ終了していないぜ！」

まさかこんなことをすることになるとは思わなかった。

「……さっき、シンクロ口上が無いといったな。その理由を教えてやるぜ！ハイパーサ

イコガンナーをリリースして、バスター・モードを発動!力高まりしとき、両手の銃で全てを撃ち抜け!現れろ、ハイパーサイコガンナー／バスター!」

フィールドから去った銃を携えた機械のようなモンスターが進化してフィールドに現れる。

そう、もとよりハイパーサイコガンナーはこのためである。

「な、何だって!?まさか最初のハイパーサイコガンナーの攻撃は……」

「そのとおり、ただのブラフだ!さあ、行くぜ!ハイパーサイコガンナー／バスター、ダイレクトアタックだ!」

「ち、ちっくしょーっ!」

魔理沙　ＬＰ２８００→０

あ、危なかった……攻撃のブラフなんてする羽目になるとは思ってもいなかった。

一ターン待つかどうか物凄く迷ったが、竜の渓谷あるしやらざるを得なかった。

「……くっそう……ブラフ……」

割とブラフに引っかかったことにショックを受けているようだ。両手を地面について落ち込んでいる。

「まあまあ……だがホントに危なかったぜ、ギリギリでとても楽しいデュエルだったぜ」

俺は右手を魔理沙に伸ばす。目の前に伸ばされた手に反応して魔理沙が顔を上げ、右

手を服で払って、その手を掴む。
「ああ、お前強かったぜ。またデュエルしような！」
しかし……また大変なことになった。
フランがスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを記憶にないうちに手に入れていたり、魔理沙がシューティング・スター・ドラゴンのカードを創造したりするとは、いったいどうなっているんだ？
流石に何者かの思惑を感じる。魔理沙はどうやらシューティング・スター・ドラゴンというカードを知らなかったようだし。だが……それをして何になるって言うんだ？
「あ、そうだ！そういやお前紫と霊夢に用があって来たんだっけ？」
そういやそうだった。すっかり忘れて全力でデュエルしていた。
「ああ、神社にいるのか？」
「んー、まあ紫は今いないけど、霊夢ならいるぜ。ただ……最近なんかやたら私のスターダストを欲しがったりして変だけどな」
……ああ、なんか色々分かった気がする。
「うん、まあいい。とりあえず会えばわかるだろ」
全身が物凄く痛いけれど仕方がない。もう一戦くらいはなんとか……なるか？

降り下ろされる魂喰らいの魔刀

「はい？今なんて？」

私は、机を拭こうとしていた手を止めて、主人である西行寺　幽々子さまに聞きなおす。

自分の耳が捉えた内容は、あまりにもありえなかったからである。

「ん？あのね、私しばらく家事の修業をしようと思うの」

今まで私が行っていた家事を手伝うわけでもなかった幽々子さまが突然どうしたというのか。というよりそんな幽々子さまにはどこから家事を教えればいいのか。

「だから、妖夢にはしばらく暇を与えます」

「ええっ!?一人でやるんですか!?」

完全に想定外だった。ろくに包丁も持ったことのない幽々子さまに毎日のあの大量の食事が作れるというのか。

「ほら、荷物はそこにまとまってるわ、お友達の家にでもお泊りしてくるといいわ」

幽々子さまが指差したところに、私の荷物がきっちりとまとめてあった。

「いえ、ですが……」

私がついている状態で練習をするならまだしも、一人で置いていくわけにはいかない。

「いいから行きなさい。さもなくば霊魂たちに妖夢を見つけ次第スカートをめくるように命令するわよ」

「……えぇーっ」

なんだろうそのセクハラは。というかパワハラに近いような。そこまでして一人になりたいのか。……いや、もしかして、私の仕事ぶりにガッカリしていらっしゃるのか？た、確かにこの前夕飯が2分ほど遅れてしまったり、廊下の掃除が間に合わなかったりしていた。これってもしかしてリストラ勧告なのでは？

私の恐怖に満ちた表情を見てか、幽々子さまが私に笑いかける。

「ああ、しばらくだから2週間くらい経ったら戻ってきていいわ。まあ、何か用事が出来たなら遅れてもいいけれど」

ど、どうやらリストラではないらしい。たった2週間、2週間だけならたぶん大変なことにはならないだろう。

「そ、そうですか……もしも何かあったら連絡をくださいね。私がどこにいるかは連絡しておきますから」

「まったく、妖夢は心配性ねぇ。大丈夫よ大丈夫」

その危機感のなさが心配なんです。
「わかりました、では、頑張って下さいね」
私は荷物を持って、幽々子さまに向かって頭を下げたあと、地面を軽く蹴る。重力から解き放たれたように体が宙に浮く。行き先は、とりあえず博麗神社でいいか。私は、博麗神社の方に向かって、滑るように飛んだ。
「クカカ……動クナ！」
そしたら、見事に邪魔された。
一人の霊魂が私の足を引っ張り、地面に叩き付けようとする。とっさに私は体をねじって地面に着陸する。
すると着陸した周りから霊魂が次々と湧き出す。それは人の形をとり、私を取り囲む。
「……いったい何の用ですか？」
思い切り掴まれた足がわずかに痛む。この状態ではスピードに任せて逃げるのはまず難しいだろう。
「オレラト、でゅえるシナ！」
霊魂の中の一人がその言葉を口に出した途端、彼らの腕のあたりから鎖のようなものが私の腕にデュエルディスクごと巻きつく。

「順番にデュエルして、勝てば離してくれるんですね？」
「イヤ……全員ト一斉ニでゅえるダ！」
私は周りを見回す。相手の数は、５人。
「……いいでしょう」
私が答えると、霊魂たちが意外そうな顔をする。もっと嫌がったりするものかと思ったのだろう。
だが、その時点で甘い。その甘さは、デュエルで教えてやろう。
「さあ、デュエルです！」
霊魂１　ＬＰ４０００　霊魂２　ＬＰ４０００　霊魂３　ＬＰ４０００　霊魂４　ＬＰ４０００　霊魂５　ＬＰ４０００　ｖｓ　妖夢　ＬＰ４０００
「オレノたーん、どろー！手札カラ精気を吸う骨の塔ヲ召喚！たーんえんど！」
霊魂１　手札５　ＬＰ４０００　フィールド　精気を吸う骨の塔（Ａ４００）
「どろー！手札カラ精気を吸う骨の塔を召喚！たーんえんど！」
霊魂２　手札５　ＬＰ４０００　フィールド　精気を吸う骨の塔（Ａ４００）×２
「どろー！手札カラ精気を吸う骨の塔ヲ召喚！えんどダ！」
霊魂３　手札５　ＬＰ４０００　フィールド　精気を吸う骨の塔（Ａ４００）×３
「オレノたーん、どろー。手札カラ精気を吸う骨の塔！えんど！」

霊魂4　手札5　LP4000　フィールド　精気を吸う骨の塔（A400）×4
「どろー。ゾンビ・マスターヲ召喚シテ手札カラ団結の力ヲ3枚、魔導師の力ヲ2枚装備！たーんえんど！」
ゾンビ・マスター　A1800→18800
霊魂5　手札0　LP4000　フィールド　ゾンビ・マスター（A18800）精気を吸う骨の塔（A400）×4　魔法罠　団結の力×3　魔導師の力×2
はぁ、物凄い攻撃力のゾンビ・マスターにしか攻撃できない、といったことですか。だからといってロックをかければデッキ破壊も出来る構えですね。
まあ、関係無いんですが。
「私のターン、ドロー！手札から」重装武者―ベン・ケイを召喚。そして流星の弓シールと魔導士の力3枚とデーモンの斧を装備します。これで攻撃力は8000、シールの効果でダイレクトアタックが可能、そしてベン・ケイの効果で装備カードの数だけ追加攻撃できます」
「エッ？」
愕然としているが知らない。邪魔をされたことと足を思い切り引っ張られたことに若干怒っているというのもある。
「さあ、バトル！ベン・ケイでそれぞれにダイレクトアタック！」

あとは、そう。私がワンショットキルに拘っているということだけである。

「ウ、嘘ダァァァ！」

霊魂たち　ＬＰ合計２００００↓０

霊魂たちは武器を大量に身に付けた武者の攻撃を受け、爆散する。ちょっとだけスッキリする。

ワンキルばかりしていたらいつの間にか周囲の人に恐れられてしまって誰もデュエルしてくれなくなっていたのだ。

そりゃあ連続ワンキル数が３００を越えればそうもなるだろう。

最近は霊夢や魔理沙などとやってないので、記録が伸び続けている。この際だし幽々子様が一人生活を行っている間、幻想郷の中でも強いあの二人と嫌と言うほどやってこよう。

そう誓って、私は再び空を真っ直ぐ飛んでいった。

この時私は、まさか白黒魔法使いでも、紅白巫女でもない予想もしない相手にこの連ワンキル記録が破られることになるとは思ってもいなかったのであった。

闇を照らす星屑のきらめき

デュエルを終えたあと、長い階段を魔理沙とともに上り、博麗神社の前に来た。人気はなく、閑散とした神社ではあるが、長い歴史は感じられる。それと、少しばかり空気がピリピリしているような気もする。

「霊夢ー、いるかー?」

魔理沙が声を上げると、神社の中で何かがもそりと動く。それはゆっくりとこちらにやって来て、外の光を浴びる。正体は、紅白のおめでたい色をした服を着た巫女。ただ、何故か腋が出ている。それに、目が夜の闇のように真っ黒である。そんな目をした変わった奴らを、俺は知っている。特にあの目は、大変満足していらっしゃるような気がする。霊夢が最近変になったと魔理沙も言っていたが、明らかにこのせいだろう。ただ、なぜそうなっているのかは謎だ。

「あら、魔理沙スターダスト寄越しなさい、何の用?」

文章の中にスターダスト寄越せが入ってる!?いくらなんでもいきなりすぎる。

「や、用があるのはこっち。そしてスターダストはやらん」

魔理沙はもう慣れっこのようで、気にせず隣に立っていた俺を親指で指差した。

指差された俺の方に霊夢と呼ばれていた巫女が真っ黒な視線を向ける。
「ふーん……あなた、デュエルは出来るんでしょ？」
「おい、話が繋がっていないような気がするんだが」
霊夢が口角を上げてニヤッと笑う。
「何？まさかあなたの話をただで聞いてあげると思ったの？そんなんじゃ満足できないわ」
あー、やる気満々足ですね。これはちょっと重症の予感がする。
「なるほど、デュエルで勝てばということか？ならさっさと……」
やろうぜ、と言いかけたところで霊夢がすっと近づいて来て、開きかけた俺の口に人差し指を当てる。
「ただし、私対あなたと魔理沙のタッグでよ。貴方が勝ったら話くらいいくらでも聞いてあげる。ただし私が勝ったら魔理沙の持ってるスターダストを貰うわ」
そこまでしてスターダストが欲しいのか……。しかしなんとも分の悪いアンティルールだ。話くらいただで聞かせてほしいものだ。
俺はいいのかと尋ねるように魔理沙の方を見る。俺を見た魔理沙は小さく頷く。というかここまでテンプレのようだ。
「ああ、それでいいぞ」

俺が返答すると、俺らを囲むように紫色の炎が燃え広がる。
あ、あれ。これってもしかしてダークシグナーの。いやでも最初からデュエル中のダメージはリアルのものになるからもはや関係ないのか？
まあ、受けてしまったからには仕方がない。全力で勝つだけだ。
「「デュエル！」」
～～
ルール説明
・基本的にはタッグフォースルール（ライフフィールド墓地除外ゾーン共通）を採用します。
・ターンの回り方は霊夢→遊太→霊夢→魔理沙となります。
・霊夢の初期手札は倍となります。
～～
おい、手札倍とか聞いてない。それはやばいって。
「私のターン！ドロー。手札から、インフェルニティ・ジェネラルを捨てて、ダーク・グレファーを特殊召喚！」
ふむ、やはりインフェルニティか。だが手札倍で大丈夫なのか？モンスターばかりじゃ回らないどころじゃない。

「手札のゾンビキャリアを捨てて効果発動！デッキから、インフェルニティ・ビートルを墓地に送るわ。そしてインフェルニティガンを発動！効果で手札からインフェルニティ・デストロイヤーを墓地に送るわ。手札からおろかな埋葬を発動。デッキからインフェルニティ・ネクロマンサーを墓地に送る。そしてカードを４枚セット。そして手札から、インフェルニティ・ネクロマンサーを召喚！」

相手フィールドに黒い剣士と霊媒師が現れる。正直ヤバイ気がしてきた。手札１１枚でよく回るなおい。１ターンに１１枚消費するとか意味が分からん。

「ネクロマンサーの効果。守備表示になるわ。そしてもう一つの効果！墓地のインフェルニティ・デーモンを特殊召喚！インフェルニティ・デーモンが特殊召喚されたとき、デッキからインフェルニティと名のついたカードを手札に加えるわ。私はインフェルニティ・ガーディアンを手札に加える。そして手札のガーディアンを捨ててセットしていたワン・フォー・ワンを発動！デッキからインフェルニティ・リベンジャーを特殊召喚！レベル３のネクロマンサーと、レベル４のデーモンに、レベル１のリベンジャーをチューニング！その眼開かれしとき、世界は闇に包まれる！シンクロ召喚！現れなさい、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

暗い闇に周りが覆われたと思ったら、その中からいくつもの目を体中につけた竜が現れる。

「私はインフェルニティガンの効果を発動！このカードを墓地に送ってデーモンとネクロマンサーを特殊召喚！そしてデーモンの効果！デッキからインフェルニティ・バリアを手札に加える。そしてカードをセット。ネクロマンサーの効果で墓地のリベンジャーを特殊召喚！レベル３のネクロマンサーとレベル４のデーモンに、レベル１のリベンジャーをチューニング！ゼロと無限をあわせ持つ龍よ、地獄の炎で敵を焼き尽くせ！シンクロ召喚！出でよ、インフェルニティ・デス・ドラゴン！」

　再びのシンクロで現れたのは、不気味な姿をした黒き龍。

「こりゃ……やばいかもしれんね」

「私もこんなに展開してる霊夢ははじめて見たぜ……」

　唖然とするしかない。某チームサティスファクションリーダーだってこんなに回しているのを見たことがない。それほど手札の量は重要ということか。本当に素晴らしいことを学んだ。これからはしっかりルールを聞こう。

「じゃあ、これでターンエンドかしら」

　霊夢　ＬＰ８０００　手札　大変満足　フィールド　インフェルニティ・デス・ドラゴン（Ａ３０００）　ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン（Ａ３０００）　魔法罠５

　うへぇ……これをどうにかしろっていうのか……。

「俺のターン、ドロー！……さて」

セットした中で見えてるのはバリア。それを持ってくるということは他のところにインフェルニティ・ブレイクがある可能性が極めて高い。除去カードも足りないので、力技で突破するしかない。

「手札から、フィールド魔法、霞の谷の祭壇をはつ「バリアで」……。じゃあ女忍者ヤエをしょうか「ガンを除外でブレイクよ」……」

せめて最後まで言わせてくれ。

しかもまだだいぶバックは残っている。先は長い。

「いい加減発動させて貰うぜ、ブラック・ホールだ!」

「なんですって!?」

見事に2体のモンスターが散った。よし、これで大分楽になった。

「……じゃあワンハンドレッドアイ・ドラゴンが破壊されて墓地に送られたからデッキから地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕを手札に加えるわ」

……あっ。

「なあ、魔理沙」

「どうした遊太?ってか顔が真っ青だぜ!?大丈夫か?」

「プレミった……本当にごめん」

これはやばい。心底やばい。ワンハンドレッドアイの二つ目の隠された効果を完全

に失念していた。だ、だがフィールド魔法を引かれなければ問題はない。
「……俺はカードを1枚セットして、ターンエンド」
　遊太　ＬＰ８０００　手札２
「私のターン、ドロー。手札から、ダークゾーンを発動するわ。これにより、闇属性モンスターの攻撃力は５００上がり、守備力は４００下がるわ」
　あっ、嫌な予感がすごくする。
「墓地のゾンビキャリアの効果。手札を一枚デッキの一番上に置いて特殊召喚するわ。そして、墓地のジェネラルの効果！手札が０の時、墓地からネクロマンサーを2体特殊召喚するわ」
　あぁ、なんか酷いことになり始めた。
「そして私はセットしていた強欲な瓶を発動！1枚ドロー！」
　何故入っていたんだ。いやまあゾンビキャリアやチェインでデッキトップにデーモンということは意外と出来るがそれでも事故要因の気がする。ただし、今回ばかりはそうもいかない。
「ゾンビキャリアとインフェルニティ・ネクロマンサーを生け贄に、降臨しなさい、地縛神　Ｃｃａｐａｃ　ａｐｅ！」
　空中に、大きな心臓のようなものが浮かび上がり、脈打つ。そしてそれを貫くように

暗い光が巻き起こる。その中から巨人のような姿のモンスターが現れる。
「この地縛神は常にダイレクトアタックが出来るわ。さて、満足させて頂戴。私はＣｃａｐａｃ　ａｐｅでダイレクトアタック！」
巨人がその腕を振り上げ、俺に向かって打ち下ろしてくる。当然、止める術はない。
「ぐ、ぐおおお！」
遊太　ＬＰ８０００→４５００
「これで私はターンエンドよ」
霊夢　ＬＰ８０００　手札　満足　モンスター　地縛神　Ｃｃａｐａｃ　ａｐｅ（Ａ３５００）インフェルニティ・ネクロマンサー（Ｄ１６００）　魔法罠１　ダークゾーン
「私のターン、ドロー。手札からドラグニティ―ファランクスと嵐征竜―テンペストを捨てて、デッキからドラグニティアームズ―ミスティルを手札に加えるぜ。そしてドラグニティ―コルセスカを捨てて、ワン・フォー・ワン発動！デッキからドラグニティ―トリブルを特殊召喚！こいつの効果でデッキからドラグニティ―ブランディストックを墓地に送る。そしてトリブルを墓地に送ってミスティルを特殊召喚！」
黄色の竜がフィールドに躍り出る。
「ミスティルの効果で墓地のファランクスを装備！そしてファランクスの効果で特殊召

喚！レベル6のミスティルにレベル2のファランクスをチューニング！空から落ちた星屑よ、この地に降りて光り輝け！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

巻き起こった風と共に、ガラス細工のような竜が現れる。

「それじゃ、手札から金華猫を召喚！墓地からコルセスカを特殊召喚！」

猫のような姿をした魔物がフィールドに現れ、共に竜が一体現れる。というか地味に召喚を行わずにスターダスト出していたのか。

「レベル1の金華猫に、レベル1のコルセスカをチューニング！輝く星が、新たな速さの境地へ誘う！シンクロ召喚、フォーミュラ・シンクロン！フォーミュラの効果で一枚ドロー！」

……さっきこうならなくてよかった。

「ふぅん……それでどうするっていうの？」

「今にわかるぜ。スターダストに、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！絡みつく時間を振り切り、限界までぶっ飛ばせ！アクセルシンクロォォォ！」

一瞬耳に、レーシングカーが通り過ぎたような音が聞こえるが、相変わらず何も見えない。

「戦場に流れ輝け！シューティング・スター・ドラゴン！」

突然魔理沙の後ろから流線型の輝く竜が現れる。現れた瞬間に強烈な風が巻き起こり、魔理沙のフリルの付いた服がはためく。
「な、何よそのモンスターは……でも攻撃力では地縛神が勝っているわ」
「まあな、とりあえずネクロマンサーを攻撃！」
シューティング・スター・ドラゴンが相手のモンスターをあっという間に貫く。
「カードをセットして、ターンエンドだ」
魔理沙　ＬＰ４５００　手札０　モンスター　シューティング・スター・ドラゴン（Ａ３３００）　魔法罠１
「私のターンね、ドロー。このまま地縛神でシューティング・スターを攻撃よ！」
「それは通さないぜ！シューティング・スターの効果！このモンスターを除外することで、相手の攻撃を無効にする！」
輝く竜が突然立ち消え、振り下ろされた巨人の手が止まる。
「なんですって!?まあいいわ、私はカードをセットして、ターンエンドよ」
「エンドフェイズに、除外されたシューティング・スターは戻ってくるぜ」
霊夢　ＬＰ８０００　手札　満足　モンスター　地縛神Ｃｃａｐａｃ　ａｐｅ（Ａ３５００）　魔法罠２　ダークゾーン
「次は俺のターンだな、ドローだ。……なるほどな、俺はハーピィ・レディ１を召喚！効

果により、風属性モンスターの攻撃力は３００アップ！」
　シューティング・スター・ドラゴン　Ａ３３００↓３６００
　ハーピィ▪レディ１　Ａ１３００↓１６００
「あら、攻撃力を超えてくるなんてやるわね。でも地縛神のこ「罠カード発動！」……ちょっと、最後まで言わせなさいよ……」
　仕返しである。ざまあみやがれ。
「ブレイクスルー・スキル！フィールドのモンスター一体の効果を無効にする！俺は当然地縛神の効果を無効だ！」
「くっ……まずいわね」
「そして、シューティング・スター・ドラゴンの効果！デッキから五枚を確認して、その中のチューナーの数だけ攻撃できる！」
「な、なんですって!?」
　俺はデッキから5枚のカードを見る。そして、その中のチューナーは……。
　Ａ・ジェネクス・バードマン　ＴＨＥ・トリッキー　サイクロン　神の宣告　霞の谷の戦士
「２回攻撃か……」
　ちなみに、俺のデッキのチューナーはバードマンさんと霞の谷の戦士だけである。攻

撃回数が0になるのも恐れずそんなことをした理由は簡単だ。
ロマンだからだ！
「まあいい、そのままバトル！シューティング・スター・ドラゴンで2回攻撃！スターダスト・ミラージュ！」
シューティング・スター・ドラゴンの姿が2つに分かれ、地縛神に分身が向かう。
「罠カード、ドレインシールド！攻撃を止めてライフを回復！」
げ、まだライフを減らさせないのか。
「まあもう一回で破壊させてもらう！そしてハーピィ・レディ1でダイレクトアタックだ！」
地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｅ（Ａ３５００）ＶＳ　シューティング・スター・ドラゴン（Ａ３６００）
霊夢　ＬＰ８０００→１１６００→１１５００→９９００
「カードを2枚セット。これで俺はターンエンドだ」
遊太　ＬＰ４５００　手札0　モンスター　シューティング・スター・ドラゴン（Ａ３６００）ハーピィ・レディ1（Ａ１６００）魔法罠2
さて、ここまで追い込めば大体問題ないだろ。シューティング・スター・ドラゴンはそう簡単に突破出来ないだろうし。

「……私のターン、ドロー！私がドローしたのは、インフェルニティ・デーモン！」
「な、何ぃ!?」
「ここでインフェルニティ・デーモン!?」
　そうだよ、インフェルニティにはどんなに困った時でも頼れる奴がいたじゃないか。
「デーモンの効果！手札が0の時にこのカードをドローした場合、このカードを特殊召喚出来るわ！いらっしゃい、インフェルニティ・デーモン！そして特殊召喚されたとき、デッキからインフェルニティ・ミラージュを手札に加え、そのまま召喚！」
　フィールドにポンチョのようなものを着た、実体が無いようなモンスターが現れる。
「インフェルニティ・ミラージュの効果！このモンスターをリリースして、墓地からネクロマンサー、リベンジャーを特殊召喚！そしてネクロマンサーの効果で、墓地より甦りなさい！インフェルニティ・デス・ドラゴン！」
　さっき倒した、ぎょろりとした目の黒い竜が再びフィールドに舞い降りる。
「そして、デス・ドラゴンの効果！そのシューティング・スターを破壊よ！」
　ん？シューティング・スター・ドラゴンの効果で無効にして破壊で……ああ、なるほど。だからどうすればいいかというと、どうしようもないんだが。
「……シューティング・スターで無効にして破壊だ」
「へっへーん！効果はちゃんと見るんだな霊夢！」

魔理沙はさっぱりわかってないらしい。霊夢がその様子を見て鼻で笑う。
「あら魔理沙。さっき見せなかったかしら？」
「ひょ？」
「このカードは、インフェルニティが攻撃表示でいる時のみ発動できるカードよ。分からないかしら？」
霊夢がセットしていたカードをゆらゆらと見せつける。
「は？……あぁっ!?」
「罠カード、インフェルニティ・バリア！シューティング・スターの効果を無効にして、破壊するわ！」
黒い竜の前に、大きな障壁が現れ、ガラスのような竜が衝突して弾ける。
弾ける直前に、竜がこっちをわずかに向く。そして
後は、任せた
と、言った（ような気がした）。
「大分場を荒らしたけれど案外最後はあっけなかったわね。そしてレベル４のデーモン、レベル３のネクロマンサーにレベル１のリベンジャーをチューニング！地獄と天国の狭間、煉獄よりその姿を現しなさい！シンクロ召喚！煉獄龍　オーガ・ドラグーン！」
爪や羽など、体中が刺々しいもので覆われた紅い竜がフィールドに現れる。

「そしてバトル！オーガ・ドラグーンでハーピィ・レディ1を攻撃！煉獄の混沌却火（インフェルニティ・カオス・バースト）！」

口から吐き出された炎がハーピィを狙う。ハーピィなんかで受けきれるはずもなく、あっさりと消滅し、そのまま向かってくる。当然、ライフで受けざるを得ない。

強烈な炎が身を焼く。

「ぐ、ぐあああああっ！」

煉獄龍　オーガ・ドラグーン（Ａ３５００）ＶＳ　ハーピィ・レディ１（Ａ１６００）

遊太　ＬＰ４５００→２６００

「そして、セットされた早すぎた復活を発動！墓地より地縛神が甦る！ただしこのターン攻撃出来ず、戦闘ダメージも与えられないわ」

地面から紫色の液体を垂らしながら、さっきの巨人のモンスターが這い出てくる。

「次のターンには終わりよ。ターンエンド」

霊夢　ＬＰ９９００　モンスター　インフェルニティ・デス・ドラゴン（Ａ３５００）

煉獄龍　オーガ・ドラグーン（Ａ３５００）地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｅ（Ａ３５００）魔法罠０　ダークゾーン

「さて、魔理沙。あとは任せた」

俺は力強く魔理沙の肩を叩き、笑顔を向ける。

「この状況でかよ！……まあ、なんとかして見せるぜ。ドロー！」

こういう時に強気な奴は助かる。

しかも……

「このターンで決着をつけるぜ！」

こういって勝ち筋を生み出す奴は特に。

「まずは墓地のブレイクスルー・スキルの効果！このカードを除外して、お前のオーガ・ドラグーンの効果を無効にするぜ！」

「墓地から罠ですって!?」

……うむ、いい反応だ。しかし鬼柳の時は表情はほぼ常に笑ってる感じだったが、それに対して霊夢は表情豊かだな。

「そして、セットされた七星の宝刀を発動！手札の嵐征竜―テンペストを除外して2枚ドロー！」

何故こんなんが俺のデッキに入ってるかと言うと、このデッキが【ダーク・シムルグ】だからだ。しかし闇が1枚も出てない。どういうことだ。ここまでで俺のデッキが分かってたら素直に凄い。

「除外されたテンペストの効果で、デッキからアキュリスを手札に加えるぜ。さらに、手札から調和の宝札！アキュリスを捨てて2枚ドロー！……ん？」

突然魔理沙の動きが止まった。何か妙なカードでも引いたのか。いやそれにしてはまるで知らないものを見たような顔を……あぁ。なるほど。「知らないカードを引いた」のか。

「私はもう一枚調和の宝札を発動！私は手札から……救世竜　セイヴァー・ドラゴンを墓地に送って、2枚ドロー！」

「何よ、そのカードは。なんだか妙に気に入らない雰囲気のカードね」

「なぁに、こいつが勝利を導くカードだからな。私は手札から、星屑のきらめきを発動！墓地のミスティル、アキュリスを除外して、再び舞い上がれ、スターダスト・ドラゴン！」

再びスターダストがフィールドに現れ、その大きな翼を広げる。

「そして金華猫を召喚！墓地の救世竜　セイヴァー・ドラゴンを特殊召喚！」

ピンク色をした小さな竜が旋回しながら飛び出してくる。

「何？2体目のシューティング・スターでも出すの？」

「いいや、レベル8のスターダスト・ドラゴンとレベル1の金華猫に、レベル1の救世竜　セイヴァー・ドラゴンをチューニング！輝く星の流れが、新たな力を呼び覚ます！シンクロ召喚！光来せよ、セイヴァー・スター・ドラゴンッ！」

強烈な光と共に、透き通った水色をした竜が空高く飛び立つ。そのまま大きく旋回

し、空中に留まる。
「でも、攻撃力は３８００、そんなんじゃ止めはさせないわよ?」
「足りないなら増やせばいいんだぜ!セットされたフォースを発動!煉獄龍　オーガ・ドラグーンの攻撃力を半分にして、セイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃力をその分上昇する!」
　煉獄龍　オーガ・ドラグーン　Ａ３５００↓１７５０
　セイヴァー・スター・ドラゴン　Ａ３８００↓５５５０
「さらに、閃光の双剣―トライスを装備!攻撃力が５００下がる代わりに、２回攻撃を可能とする!」
　セイヴァー・スター・ドラゴン　Ａ５５５０↓５０５０
「それでもダメージは足りないわ!」
「それはどうかな!」
「……なんですって?」
「セイヴァー・スター・ドラゴンの効果!相手モンスターの効果を無効にして、その効果を得る!当然、私が選ぶのは地縛神だ!サブリメーション・ドレイン!」
　モンスターの輝きを受けて、地縛神の動きが止まる。
「地縛神　Ｃａｐａｃ　Ａｐｅの効果は戦闘破壊した相手モンスターの元々の攻撃力

分のダメージを与える効果！」

つまり、フォースで攻撃力の下がったモンスターを倒すと、下がった状態での戦闘ダメージと、相手の下がってない状態でのバーンが入るということだ。昔ファイアー流というダークブレイズドラゴンでやったのを見たことがある。まあ正確には効果が違うんだが。

「く……そんな……」

「いけ、セイヴァー・スター・ドラゴン！まずは煉獄龍　オーガ・ドラグーンに攻撃！」

魔理沙の声か響くと同時に、高所から勢いをつけて飛来する。そのまま紅蓮の竜を貫く。

セイヴァー・スター・ドラゴン（Ａ５０５０）ＶＳ　煉獄龍　オーガ・ドラグーン（Ａ１７５０）

霊夢　ＬＰ９９００→６６００→３６００

「あ……あぁ……」

霊夢は声も出ないようだ。まあこんなセイヴァー・スターを前にしたらそうもなる。

「さあ、これでとどめだ！セイヴァー・スター・ドラゴンで、地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｅを攻撃！シューティング・ブラスター・ソニック！」

セイヴァー・スター・ドラゴンはスピードに乗ったまま向きを変え、さながら流星の

ように光り輝きながら地縛神へと突撃する。

「い、いやぁぁぁぁっ！」

セイヴァー・スター・ドラゴン（Ａ５０５０）ＶＳ　地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｅ（Ａ３５００）

霊夢　ＬＰ３６００→２０５０→０

……奇しくも、仲間同士であった鬼柳京介と不動遊星のデュエルと、同じ決まり手だった。

ワンショット・ブースター

デュエルが終わったと同時に、魔理沙がセイヴァー・スターの強烈な攻撃によって、遠くに飛ばされた霊夢に駆け寄る。

「霊夢、大丈夫か？ちょっとやりすぎた気がしたけど……」

声をかけられると、紅白巫女は体を起こす。

「いった……まあ操られてたとはいえやりすぎじゃないの？」

霊夢の目はさっきまでと変わって茶色がかった黒目になっている。

「悪いな、押しかけて早々」

「ま、貴方のおかげかしらね。なんだかよくわからないけど魔理沙のデッキに新しいカードが増えてるのも魔理沙が私に勝てたのも」

カードが増えているのは俺のおかげではない。勝手に増えたとしか言いようがない。

デッキに入ってなかったカードが現れるなんてメ蟹ックや元ジャックと一緒にいると割といつも通りだがな。

しかし、目の色が文字通り変わるとアレだな、違和感が激しいな。まあさっきと比べ綺麗な目なのでこっちの方が落ち着くが。それにしても、綺麗な目をしているな。対比

の問題なのかもしれないが、真っ直ぐ物を見ているような目だ。
「で、なんでそんなに私の目を凝視しているわけ?」
あまりにじっと見ていたからか、遂に突っ込まれた。
「いや、さっきの白目まで真っ黒の目と比べて綺麗な目になって安心したというかなんというか」
「……それ、口説いてるつもり?デュエルが強い人は嫌いじゃないけど」
なんか鼻で笑われた。凄く馬鹿にされている気分だ。
「別に口説いてなんかないっての。ただ単に綺麗な目だと思っただけだ」
「……あっそう」
おまけに目をそらされた。大分扱いが雑だ。微妙に耳が赤い気がしたがきっと気のせい。
「ところで、操られてたっていうのは本当か?」
「まあ、そうなるわね。多分この地縛神とかいうモンスターね。今ならわかるけど溢れんばかりの邪気だわ」
「まったく、そういうのは先に気が付かないと駄目だぜ?」
「うっさい、パワー馬鹿のアンタに対抗するにはピッタリだったんだし使いたくもなるでしょ」

「パワーは大事だぜ。パワーで勝ってれば大体何とでもなるしな」
「はいはい奈落の落とし穴平和の使者死のデッキ破壊ウイルス」
「酷いんだぜ！しかも最後は禁止カードだ！」
魔理沙と霊夢がぎゃーぎゃー言い合っている。まあ彼女らは仲が良いんだろう。
「あーもうとりあえずいいか、その地縛神のカードをどこで手に入れたんだ？」
放っておいたら永久に放置されそうだったので、いったん区切って本題に入る。
「え、ああ、そういえば……あれ、どこだったかしら？」
なんだと……。
もしかしたらフランが手に入れたのと同じような理由かと思って、原因を調べようと思ったんだが。
「あ、そういえば誰かに渡された、ような……」
「貰ったのに覚えてないとか失礼なんじゃないのか？」
「アンタは勝手に貰っていく側だから覚えてるでしょうけど私は知らない人を覚えてるほど暇じゃないの」
「貰ってるんじゃなくて借りてるって言ってるだろ！」
ふむ……。そうしたらやはり誰かがばらまいてるということになるのだろうか。
しかし、どうしてあんな世界に1枚しかないであろうカードがここ、幻想郷にあるの

か。

……これは、まず元の世界に帰ってカードが消失していないか確認するべきか。

「あのさ、霊夢」

「何よ遊太」

ぶっきらぼうだがちゃんと名前を覚えてくれている。渡されたカードに関しては何者かに記憶を改竄された可能性もあるだろう。

「俺は別の世界から来た、外来人だっけ？なんだが、元の世界に帰るために、八雲紫って奴を探してるんだ」

「ああ、外来人だったのね。まあアンタみたいな格好をした奴なんて見ないしね。で、わざわざ来てもらったところ悪いけど紫は今いないのよね」

……えっ。

「それはまたどうしてだ？まさかまだ冬眠してるなんてことはないよな？もう桜が綺麗な頃だし」

俺の言葉を聞いて霊夢が眉をひそめる。

「どこで紫が冬眠するって聞いたの？そもそもよく考えたら紫のことをどこで聞いたのよ」

「ああ、それはレミリアから……」

「はぁ!?なんであいつに会ってるのよ」
　……そんなにやばいのか奴は。もはやだいたいの場所は名前パス出来る気がしてきた。
「あ、そうそう。あいつに腋出した巫女によろしくって言われてきた」
「……今度夢想封印ね。まあアンタが大分ぶっ飛んでることはわかったわ」
　何だ夢想封印って。とりあえずレミリアの今後の幸せを願っておこう。なんか不穏な響きだ。
「てか今の紅魔館はちょっとグロッキーじゃなかった?レミリアの妹が大暴走してるって聞いたけど」
「あー……フランか。全く大変だったぜ。ここに来る前ちょっとデュエルしてきたが遊びたい年頃なのか死ぬほどデュエルさせられたぞ。まあ全部勝ったけどな!」
　ちょっと自慢しておく。よくもまああんだけ連勝できたもんだ。
「……もうアンタという奴が分からなくなってきたわ。本当に人間かしら……。それは置いておいて、紫は今冬眠してないけど、どこかに出かけちゃったのよね。見つけたらアンタの所に寄るように言っておくわ。あいつにとって距離は意味がないから」
「そっか、空間移動的なことが出来るんだっけか」
　と、いうわけで。

俺はここから何をしようか。ぼーっとここで待つのも面倒だ。
「うーん、どうするか……」
うめき声をあげてふと空を見ると、こちらに向かってきているものが見えた。
まさかまた魔理沙みたいに止まれないなんてことはなかろう。わざわざ回避する気も……。
近づいてくるにつれ、様子がよくわかる。銀髪の少女が、日本刀を2本構えて、突進してくる。つまり、狙われてる。
振り下ろされた刀を、デュエルディスクで受ける。
「ちょ、待て！俺が何かしたのか！」
銀髪の少女は落ち着き払った声で話す。
「このあたりから邪悪な気を感じました。そして、ここにいつもはいない貴方がいる。つまり、その邪気は貴方が原因でしょう」
「違う！それ多分さっきまで霊夢に取り付いてた地縛神！」
「問答無用！」
「うわっと！」
ちなみにこの会話の間、ずっとデュエルディスクで二刀流のこの少女が振り下ろす日本刀を受け続けている。というか話を聞いてくれ。

「妖夢！そいつの言ってることは本当だから！で、取り付かれてた私をデュエルで倒して正気に戻してくれたのよ！」
　霊夢が慌てて擁護してくれる。妖夢と呼ばれた少女の刀が一瞬止まる。
　その瞬間を狙って手刀とデュエルディスクで2本の刀を叩き落として奪いとる。
「な……!?」
「これは没収だ！いいから話を聞け！」
「く……」
「やられたかみたいな表情をしてるんじゃない！霊夢も言ってた通りだ！だから俺は邪気の正体じゃない！」
「それなら、デュエルをしましょう。それで私が勝ったらその刀を返してください。貴方が勝ったらその話、信じましょう」
「あーいいよ乗ったよ！」
　もうやけくそである。話を聞かないならデュエルで黙らせるしかない。
「……つーかさ、遊太の奴さりげなく妖夢にリアルファイトで勝ってるよな。リアルファイトも強いのかあいつ」
「……よく考えたらそうね。というかデュエルディスクで刀って受け止められるの？」
　デュエルディスクで剣を受けられるのは遊星が実証済みだ。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「「デュエル！」」

遊太　ＬＰ４０００　ＶＳ　妖夢　ＬＰ４０００

「先行は俺だ！ドロー！俺は神秘の代行者　アースを召喚！こいつの効果で、デッキから創造の代行者　ヴィーナスを手札に加える。そしてカードを２枚伏せて、ターンエンド」

遊太　手札４　ＬＰ４０００　モンスター　神秘の代行者　アース（Ａ１０００）

魔法罠２

「私のターン、ドロー！……まずは大嵐です」

「……げっ。何もない。ミラフォと奈落だ」

やはりミラフォは仕事しないか……。そんな気はしてたけど。

「自分フィールドにモンスターがいないことより、手札から、フォトン・スラッシャーを特殊召喚！さらに、Ｈ・Ｃ　エクストラ・ソードを召喚！２体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚、現れなさい！我が刀、機甲忍者ブレード・ハート！」

２本の刀を構えた、忍者のモンスターが現れる。さっきの妖夢のようで思わず寒気がする。

「エクストラ・ソードを素材としたエクシーズモンスターは、エクシーズ召喚成功時、攻撃力が１０００アップする！」
　機甲忍者ブレード・ハート　Ａ２２００→３２００
「ブレード・ハートの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ取り除いて、このターン2回攻撃が出来る！」
「……出たわ、相変わらずの辻斬り脳」
「……またワンキルだな。というかあいつが勝ったのってワンキル以外だったことがあったか？」
　どんだけワンキルばっかしてるんだ。というかこのルールでのブレード・ハートってやばくね。
「バトルフェイズ！まずはブレード・ハートでアースを攻撃！」
「……しかたない。手札からオネストの効果！攻撃力を相手モンスターの分、つまり３２００上げる！」
「なっ!?」
　神秘の代行者　アース　Ａ１０００→４２００
　神秘の代行者　アース（Ａ４２００）ＶＳ　機甲忍者ブレード・ハート（Ａ３２００）
　妖夢　ＬＰ４０００→３０００

「……くっ、カードを2枚セットして、ターンエンド」
　妖夢　手札2　ＬＰ３０００　魔法罠2
「俺のターン、ドロー。特別に大嵐を返してやろう」
「あ……」
　妖夢の魔法罠のところから、強制脱出装置とトラップ・スタンが消えていく。
「俺はやさしいから成金ゴブリンを発動。ドローして、相手のライフを１０００回復」
　妖夢　ＬＰ３０００→４０００
「おい、なんかあいつものすごく悪い顔してるぞ」
　魔理沙がなんか言ってるが気にしない。
「手札からヴィーナス召喚。効果でライフを５００払って神聖なる球体をデッキから特殊召喚。もう一度発動」
　ちりちりと体が痛む。うむ、リアルダメージが発生するここではライフコストはあまりよろしくないな。大量のライフから神の宣告なんて使ったらどうなるかわからん。
　遊太　ＬＰ４０００→３５００→３０００
「神聖なる球体2体でオーバーレイ・ネットワークを構築。エクシーズ召喚！ダイガスタ・フェニクス！」
　緑色に燃え上がる不死鳥が、フィールドに舞い降りる。

「フェニクスの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ使って、選んだ風属性に2回攻撃を付与する。当然フェニクスを選ぶぜ」
「え？……あっ」
　どうやら気が付いたらしい。ワンキル大好きっ子なら間違いない。
「そういえば、今、お前のライフは結果的に減ってない状態だな。このままバトル！ダイガスタ・フェニクスで2回攻撃！そして最後にヴィーナスで攻撃！合計ダメージは、４６００！おっとこいつはワンキルだ！」
「い、いやあああああっ！」
　妖夢　ＬＰ４０００→２５００→１０００→０
　うむ、相手は予想通りワンキルデッキだった。
　そのために、わざわざヴェーラーさんやGさんを大量投入しておいたデッキを使ったが、オネスト1枚で事足りてしまった。
　全く残念だ。こんなことなら先行ワンキルでも狙っておけばよかった。
「……うわぁ」
「あえて心まで折るあたりが性格悪いわね」
　……ただし代わりとして女性陣からの評価はゴリゴリ下がったようだ。
　しかも

「うっ……ぐすっ……」

ワンキル大好きっ子はメンタル弱かった。なんか俺が悪いみたいになってしまった。

「ほ、ほら、泣くな！これは返すから！話を聞いてくれればいいから！」

俺は没収した刀を差しだす。妖夢は顔をうずめたまま手を伸ばして、刀を引き取る。

「……」

刀を受け取ったのちも、しばらく何も喋らないで膝に顔をうずめたままでいる。

やべぇ、やりすぎた。

気持ちよくワンキルしようとしてたところに手札誘発だけでも心折れそうなのに、おまけに返しワンキルはやりすぎた。

「……つか……」

「ん、なんだ？」

「いつか……この雪辱は晴らします……」

血走った恨みのこもった目で言われた。泣いていたからあんな感じになっただけだよね。決して目が血走るほど殺意が湧いているわけではないよね。

「……その時もデュエルで頼むぜ……」

日本刀は勘弁してほしいと、心の底から思ったのだった。

ブリザード・プリンセスズ

「……」
　俺は今、博麗神社を離れて、魔法の森へと向かっているのだが
「……」
　妖夢が後ろから無言でついてきている。とてもやりづらい。
　何故このようなことになったのか簡単に説明すると、地縛神もいたことだしもしかしたら他のシグナ―の竜もいるかもしれないと考えた。そして、ここまで地縛神やシグナ―の竜を持っていた人が実力者だということで、そういった人を回ってみることにした。
「なあ、お前らが知ってる中で、デュエルが強い奴っているか？」
「へ？そうだな……遊太が知らなさそうなのはアリスとかか？」
　と、言うのでアリスに会いに行くこととなった。そこまではいいのだが。
「じゃあそこまで案内してくれないか？」
「え、私は今から紅魔館に用事があるから無理なんだ」
「……どうせ魔導書借りパクしてくるんでしょ。まあ、私はこの神社から離れられない

し。そうだ、妖夢」
「え？」
「アンタ案内しなさい」
「いや、でも……」
「そういえば全く罪のない私の恩人に切りかかってくれやがった分の復讐が済んでないのよねーそうだなー夢想転生でフルボッコかしらねー」
「……すみませんわかりました案内しますから許してください」
　こんな感じの流れで妖夢がついてくることになったのである。そして霊夢はアレなのか。そんなに恐れられるほどにリアルファイトが強いのか。名だけで震え上がらせるとはいったいどんだけなんだ。
　しかし会話が無いのも息が詰まる。ここはあたりさわりのない話題を提供しよう。
「ところで、妖夢のデッキはワンキルを中心とした【戦士族】なのか？」
「はい、私の性格上、【戦士族】が性に合うので。遊太さんは【代行天使】なんですか？」
　思った以上に普通に食いついてきた。負けたことに落ち込んだのも含めて、心からデュエルを愛している奴なんだろう。
「いや、俺のデッキは沢山あるな。この前１００を超えた」
「いやいやいや！なんでそんなに沢山あるんですか！というかどこにそんなにデッキが

あるんですか！」
「いや、デッキ作成が趣味なもんで……ちなみに全部このバックに入ってるぜ」
　妖夢がもう何も言うまいといったように呆れ果てている。確かに俺もよく入ったものだと思う。あと作り過ぎたと思う。
「……ええ、まあなんか規格外なのはわかりました。それで、遊太さんのメインのデッキはなんなんですか？」
「む……それを聞くのか。二度と博麗神社に帰れなくなっても知らんぞ……？」
「何でデッキを聞いただけでそんな壮大な話になるんですか！」
「俺がそのデッキを使う時は、本当に本気を出さなきゃいけない時くらいだけだからな。まあ滅多に見られないと思っておくといい」
「はぁ……」
　なんとなく変な人だなぁみたいな視線を感じるが、気にしないこととする。というかいきなり切りかかってきたお前も大概だ。
　おおよそ戻ってくるような移動をしたため、何となく見覚えのある道に差し掛かる。
そして
「お、遊太じゃん！」
　何とも見覚えのある氷精が近寄ってきた。

「チルノさんともお知り合いなんですか？」
「ああ、他にも紅魔館の方々とも」
「……貴方人間ですよね？それとも幽霊の類ですか？」
やはり紅魔館顔パスは効果がありそうだ。確かにヤバかったがそこまでなのか。
「……この人が遊太って人なの？」
よく見ると、チルノの隣に人、いや精霊の類か何かがいた。
「えっと、初めましてか？俺は鹿野　遊太だ。よろしく」
「私は、レティ・ホワイトロック。よろしく」
「遊太、どうせだしタッグデュエルしよう！」
「脈絡が全くもってねぇ！」
いきなりすぎて対応できなかった。
「チルノや大妖精から聞いてますよ。とてもデュエルが強い変人だと」
「おい待て変人ってなんだ」
「どれほどの実力なのか実際に試してみたいと思っていたところです。それとチルノもデッキを色々弄っていたみたいなので」
変人については言及しない方針らしい。
「そうかい、じゃあどうする、妖夢？」

妖夢の方を見ると、なんか物凄く嫌そうな顔。そこまで組みたくないか。
「まあ……いいですけど……」
しかしデュエルはしたかったらしい。
「そんじゃあ、まあ」
「「「デュエル！」」」
遊太＆妖夢　ＬＰ４０００　ＶＳ　チルノ＆レティ　ＬＰ４０００
「先行は私です、ドロー。手札から、コールド・エンチャンターを召喚！」
フィールドに冬の魔法使いが現れる。つまりはレティのデッキは【アイスカウンター】だろうか。こいつはまた変わったデッキが出てきたものだ。
「手札の氷弾使いレイスを捨てて、エンチャンターにアイスカウンターを一つ乗せるわ。コールド・エンチャンターはフィールドのアイスカウンターの数×３００ポイント攻撃力を上昇させるわ」
コールド・エンチャンター　Ａ１６００→１９００
「そしてカードをセットしてターンエンド」
レティ　ＬＰ４０００　手札３　モンスター　コールド・エンチャンター（Ａ１９００　アイスカウンター１）
「次は妖夢のターンだな。任せたぞ」

「言われなくてもわかってます。私のターンですね。ドローします」

うむ、心強い。このままチルノのターンが回ってくるだろうか。

「私は増援を発動します。デッキから終末の騎士を手札に加えます。そして手札から切り込み隊長を召喚！」

二本の長さの違う剣を持った鎧を纏った戦士が飛び出して来る。そして手を振って誰かを呼び込むような仕草をする。

「切り込み隊長は仲間を呼び込みます。手札から私は終末の騎士を特殊召喚します！終末の騎士の効果で不死武士を墓地に送ります。さらに墓地の増援を除外して、マジック・ストライカーを特殊召喚！レベル3のマジック・ストライカーと切り込み隊長でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！M・X―セイバー　インヴォーカー！」

赤のマントを羽織った未来風の戦士がフィールドに現れる。その手に持った剣も独特の形状をしていて、体の所々が鈍く光っている。

「インヴォーカーの効果！私はデッキから、H・C　エクストラ・ソードを特殊召喚！レベル4のエクストラ・ソードと終末の騎士でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！機甲忍者ブレード・ハート！そしてエクストラ・ソードの効果で……」

「流石にワンキルは……デモンズ・チェーン！ブレード・ハートを縛る鎖となる！」
　地面から現れた鎖が、二刀流の忍者を縛り付ける。忘れがちだがエクストラ・ソードの１０００ポイントアップする効果はエクシーズモンスターが持つため、チェーンしてデモンズ・チェーン等を打てば無効になるのだ。
「くぅ……ターンエンドです」
　可哀想に。ワンキルを見事に阻止された。若干涙目だ。
　妖夢　手札３　ＬＰ４０００　モンスター　機甲忍者ブレード・ハート（Ａ２２００）
　Ｍ・Ｘ―セイバー　インヴォーカー（Ａ１６００）
「よっしゃー！あたいのターン、ドロー！あたいは氷結界の水影を召喚！レベル４のコールド・エンチャンターに、レベル２の氷結界の水影をチューニング！大地を踏みしめ、咆哮を上げ、邪魔するものを凍り付かせろ！シンクロ召喚！氷結界の虎王ドゥローレン！」
　おお、ちゃんとこの前あげたカードを使っている。
「あたいはデッキロックを発動！そして、ドゥローレンの効果でデモンズ・チェーンも含めて全部戻して、攻撃力を１０００アップするよ！」
　氷結界の虎王ドゥローレン　Ａ２０００→３０００
「バトルフェーイズ！ドゥローレンでブレード・ハートを攻撃！」

「攻撃力を超えてくるとは……」

氷結界の虎王ドゥローレン（Ａ３０００）ＶＳ　機甲忍者ブレード・ハート（Ａ２２００）

妖夢　ＬＰ４０００↓３２００

「そんであたいはデッキロックを発動して、カードを一枚セットしてターンエンドだよ！」

チルノ　手札３　ＬＰ４０００　モンスター　氷結界の虎王ドゥローレン（Ａ２０００）魔法罠１　デッキロック

「さて、俺のターンか。とりあえずドロー」

しかしデッキロックとは何とも優しくない状況だ。

「……俺はＤ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイを召喚。そして効果発動！デッキトップを墓地に送って、それが通常魔法だったら墓地に送って次のターンその効果を発動出来る。さて……どうする？」

「別に何もしないわ。展開されたら嫌だし。攻撃力だって低いしね」

「それじゃ、デッキトップオープン！デッキトップは……ファイナル・インゼクション！」

「な……何ですって!?ファイナル・インゼクションなんて手札に来たらただの事故要因

じゃないですか！」
　妖夢が驚愕している。いやまあ味方なんだけど。
「そこは、『絶対に来ない』と信じる。もしくはゾンビキャリアのコスト」
「何故二番目が先に来ないんですか……」
「ま、そこは気にしない。と、言うことで次のターン、ファイナル・インゼクションの効果が発動出来るぜ。そして……あ、いやカードを4枚セットしてエンド」
「え、今いったい何を考えたの……」
「あたいにはわかんないよ！」
「いや、そこは考えてよチルノ……」
　うむ、こういうのは考えさせるだけ考えさせておくに限る。
　遊太　ＬＰ３２００　手札２　モンスター　Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ（Ａ１４００）Ｍ．Ｘ―セイバー　インヴォーカー（Ａ１６００）魔法罠４
「私のターン、ドローです。スノードラゴンを召喚！そして連鎖破壊を発動！デッキのスノードラゴン2枚を破壊！スノードラゴン2体の効果で、フィールドのモンスター全部にアイスカウンターを2個ずつ乗せる。そして、私のモンスターに乗ったアイスカウンターを取り除き、スノーダスト・ドラゴンを特殊召喚！」
　氷像のような姿の竜が飛び出してくる。うん、名前が魔理沙が遊星のを借りて使って

いたモンスターに似ているな。似ているが効果も見た目も似ていない。似ているのは色くらいか。

「とりあえずデモンズ・チェーンをダイヤモンドガイに着けてから、ドゥローレンの効果！デッキロックとデモンズ・チェーンを手札に戻す！」

氷結界の虎王ドゥローレン　Ａ２０００↓３０００

「バトルフェイズ！スノーダストで、ダイヤモンドガイを攻撃！ブリザード・ソニック！」

技名も似てるのかよ。

Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ（Ａ１４００）ＶＳ　スノーダスト・ドラゴン（Ａ２８００）

遊太　ＬＰ３２００↓１８００

吹雪のようなエネルギー波が体中を襲う。

「うぐ……」

「そしてドゥローレンでインヴォーカーを攻撃！」

氷結界の虎王ドゥローレン（Ａ３０００）ＶＳ　Ｍ．Ｘ－セイバー　インヴォーカー（Ａ１６００）

遊太　ＬＰ２０００↓４００

虎王がその前足を振り下ろして、インヴォーカーもろとも叩きつけてくる。
「……ぐ、ぐぅ……さっすがに痛いぜ……げほっ」
若干口の中に血の味が広がる。いや本当は若干なんてもんじゃないです。意識が飛びそう。
「これでとどめですよ。スノードラゴンでダイレクトアタック！」
「まあ流石に……」
「通りませんよね……」
「その通り。罠カード、エクシーズ・リボーン！墓地のインヴォーカーを特殊召喚！そしてこのカードをオーバーレイ・ユニットとする」
「ふむ、そうですか。ならば私は攻撃を止めます。そしてメインフェイズ2に、デッキロックと光の護封剣を発動！そしてカードをセットしてエンド」
「……そこでサンダー・ブレイク！手札からオネストを捨てて、デッキロックを破壊！」
「なんですって!?」
「一応、カオス寄りの【ダイヤモンドガイ】にしておいたからな。偶然オネストがあっただけだ」
「いや、オネストを捨てる神経が分からないってところなんですが……」
「さらにリビングデッドの呼び声！オネストを蘇生！」

レティ　ＬＰ４０００　手札１　モンスター　スノー・ドラゴン（Ａ１４００）スノーダスト・ドラゴン（Ａ２８００）氷結界の虎王ドゥローレン（Ａ２０００）　魔法罠２

「……よし。これで準備は出来ただろう？妖夢」

妖夢の方をちらりと見ると、妖夢がじっとりとした目で見ていた。

「……何故サンダー・ブレイクでモンスターを破壊しなかったんですか？」

「そりゃ当然、こんだけ御膳立てしてあげりゃお前が止めを刺せるだろ？」

……余計不満そうな顔をなされている。

「……貴方は私の手札が見えているんですか？」

「いや、それはどうだかね？ただ、女の子にダメージ受けさせるのもアレだし、お前ならやれると信じてるからさ」

「……そうですか、もういいです。私のターン、ドロー」

凄く不機嫌そうに顔をそっぽに向けられた。あまりおちょくりすぎるのもよくないかもしれない。面白いからといってやり過ぎてどんどん嫌われてる気がする。

「あれ？妖夢なんか顔が赤……」

「くないです叩き斬りますよ」

「なんで斬られるの!?」

「一応まずはオネスト自身の効果で手札に戻します」
「なるほど、そのためにオネストを捨てたんですね……」
　まあ、たまに必要になるんだなオネストのこの効果が。というか何事も無かったかのようにスルーされた。
「さて、墓地のファイナル・インゼクションの効果を発動！貴方のフィールドのカードを全部破壊！そしてこのバトルフェイズには手札、墓地の効果モンスターの効果は発動できなくなります！」
「流石に通しません。カウンター罠カード、大革命返し！私のフィールドのカードを2枚以上破壊するカードの効果を無効にして除外します！」
　そりゃ当然その通り。あの余裕を見るに確実にある。
「私は、インヴォーカーの効果を発動します！効果は先ほども話しましたね」
「じゃあ私はデモンズ・チェーンを発動します。さっき見せましたよね？」
「当然知っています。インヴォーカーの効果は無効化されますね。ですが、そのデモンズ・チェーンを墓地に送って、手札からトラップ・イーターを特殊召喚します！」
「う……」
　地面から現れた鎖を食い破って、不気味なモンスターが飛び出してくる。
「では、手札から、異次元の女戦士を召喚します。そして、レベル4の異次元の戦士とト

ラップ・イーターでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れろ、Ｎｏ．３９　希望皇ホープ！」

白地に金色が眩しい勇者がフィールドに降り立ち、二本の剣を振る。

「そして、手札から鬼神の連撃を発動！ホープのオーバーレイ・ユニットをすべて取り除き、このターン2回攻撃出来るようにします！」

ホープの周りの光る球体が弾け飛ぶ。

「バトルフェイズ！Ｎｏ．３９　希望皇ホープで、スノーダスト・ドラゴンを攻撃！」

「え、攻撃力でスノーダストが勝って……あ」

「え、どうしたのレティ？」

どうやら気が付いたらしい。さっきいったい何をしていたか。

「そしてダメージ計算時、手札のオネストの効果を発動！このターンホープの攻撃力はスノーダストの攻撃力、つまり２８００上がります！」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ　Ａ２５００→５３００

「行きます、ホープ剣・ダブルスラッシュ！」

「い、いやあああああ！」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ（Ａ５３００）ＶＳ　スノーダスト・ドラゴン（Ａ２８００）

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ（Ａ５３００）ＶＳ　氷結界の虎王ドゥローレン（Ａ２０００）

レティ　ＬＰ４０００→１５００→０

「く……参りました」

「くぅ……また負けたー！」

氷の妖精たちが悔しそうにしている。

「しかし、チルノは大分セルフ・バウンスが出来てきたみたいだな」

「ふふん、あたいをなめるんじゃないわ！なんせあたいはさいきょーだからね！」

いや、お前は何故負けているのに胸を張ってそう言えるんだ。

まあ、自信を持つことは大事だからな。うん。

「……あの」

チルノの成長に喜んでいると、後ろから服を引っ張られた。

振り返って見てみると、服を引っ張っているのは妖夢だった。

「ん、なんだよ」

「……お疲れ様でした」

妖夢は目をこちらに向けない。しかしまあ、こちらもこちらでいきなり斬りかかるところから大分改善されたようだ。

「ああ、お前こそよくやってくれた。ご苦労ご苦労」
「何となく上から目線のような気がするんですけど……」
妖夢にじっとりとした視線を向けられる。ちょっと良くなったと思ったがやっぱり嫌われ気味の気がする。
「あの、その……ありがとうございました」
突然妖夢が目線を下げて感謝してくる。
「いやいや、こちらこそどうも」
「……さっきのデュエルでカードを沢山伏せた時、本当は攻められたんじゃないですか？」
「……さあ？なんのことやら」
「最後のセットカードが死者蘇生なのにですか？」
「……あーあー聞こえなーい」
「まあ、別にいいですけど」
妖夢はため息をついて、呆れたように笑う。
何か初めて笑っている気もする。いやそれを認めるとここまで笑いなしの状態だったことになるんだが。こうやって見ると普通の女の子らしい。
「そーいや遊太はなんでこの人斬りと一緒に？」

「……やっぱり斬っていいですか？」
前言撤回。やっぱこいつただの危険人物だ。
ここからの旅路がさらに心配になってきたのだった。
……そういえば、さっきの止めを刺したモンスター、少し妙な感じがしたような……。
いや、気のせいだろう。

森に隠れるキャッツ・フェアリー

私は、何をやっているのか。

「……で、……を攻撃！」

私のモンスターは、圧倒的な力量差があるにも関わらず、その手に持っている剣を構えて立ち向かっているのに、私は何故地面に両手両足をついているのか。

……い！おい！主人よ！

モンスターが頭に直接語りかけてくる。しかし私はそれに対して何も答えることが出来ない。

もう、これに対して取れる手段は残されていない。

この攻撃を止めたとしても、この状況を何とかする手段はない。

可能性はある！諦めてはいけない！

私を鼓舞するために全力で声をかけ続けていたモンスターが攻撃を受けて弾ける。

私のエースがやられてしまった。こうなったのは、私の責任だ。私が「彼」を使うことはまだ早かったのだ。私には過ぎた力だったのだ。

そのまま攻撃が迫ってきて……

薄暗いテントの中で目が覚めた。嫌な夢を見せられたものだ。
変に汗をかいていて、そのせいで服が纏わりついてちょっと気持ち悪い。
しかし、ずいぶんと思い出したくないことを思い出させられてしまった。
横を見ると、赤い帽子を被ったまま、大変気持ちよさそうな寝息を立てて男が寝ている。
……よく考えたらこの狭い中で二人きりだったのか。なんだか顔が熱くなった気がしたのでちょっと外に出て、風にでも当たることにした。
ちょうど近くに湖があり、軽く水浴びをしてから岸に座る。まだ服も体も湿っているため、下着のみだが、誰もいないのであまり気にしないことにする。太陽がわずかに出てきて、湖面が光を跳ね返して輝いている。
ふと思い出して懐に入っているとあるカードを取り出して眺める。
貴方にちょうどいいとこのカードをくださったのは幽々子様だが、こればかりは私には不相応だと思う。私には扱い切れていない。それなのに、デッキから抜くことが出来ないあたり、私も甘いのかもしれない。
いつかは、このカードに見合う者になれればいいな。
そしてそろそろ戻ろうと立ち上がったら草むらから音がして

「……あ」

あの目立つ赤帽子がいた。

「えーっと……お取込み中すいませんでした」

赤帽子は振り返って何事もなかったかのように去ろうとする。

私は視線を下げて自分を見る。私の目には常人より白い肌と下着が映る。

「う、うわあああああああ!!」

「すいませんでしたごめんなさい偶然ですだから剣を振り回さないで!」

羞恥心が限界を突破して、あまり何をしたか覚えていないが、気が付いたら赤帽子がボコボコになっていた。

そして何より、私は服を着るのも忘れて剣を振り回していたことに気が付いたのだった。

～～

「……」

「いやホントすまなかったって……」

ずっと妖夢は黙って俯いている。けれどついてきてくれているからまあ、いいんだろうか。

しかし……比較的白い肌の妖夢の顔が真っ赤に染まる様は凄かったなぁ……。

それとまさかあんな下着だったとは……。
とかぼんやり思っていたら脇腹に鈍痛が。
「うごっ……！」
「……口から出てますよ」
横の妖夢が柄で殴りつけたようだ。物凄く痛い。
「すいませんでした……」
「思い返すだけで恥ずかしいので口に出さないでください……」
口に出さなければいいのか。
しかしこのままというのも間が悪いので話を変える。
「で、あとどのくらいでアリスとやらの元に着くんだ？」
「もうすぐのはずなんですが……さっきから何やら変な感じがするんですよね」
妖夢が納得いかなさそうな顔をする。そういえばさっきから全然進んでないような気もする。
「……」
俺はデッキから《A・ジェネクス・バードマン》を取り出す。そしてそれを鋭く自分の後ろに投げる。
「ひゃっ！何するんですか!?」

知らない声が聞こえた。振り返るとそこに赤いワンピースを来た猫耳の少女がいた。
「貴方は八雲藍さんの……」
声に反応して振り返った妖夢が鍔に親指をかけながら言葉をかける。
「くぅ……ばれちゃいましたか……というか妖夢さんに気づかれるならまだしもなんで貴方に……しかもカードを手裏剣みたいに投げた上に刺さるってなんですか！」
俺の投げたカードは、近くの木に突き刺さっていた。
「制限改訂で余ったんだ。疾風の投ゲイルでも良かったんだが」
「使ったカードの話はしてませんよ!?それにゲイルは前からですよね？」
「まあ妙な仕掛けをされてるとしたら後ろにやってる奴がいるかなと思って投げてみたら当たっただけだ」
「やたら慣れすぎじゃないですか……？というか貴方本当に武道とかやってないんですか？」
妖夢がまた呆れ果てている。まあデュエリストとしてはカードで鎖を斬るくらいは当然のたしなみだがな。
「で、お前の名前は何なんだ？」
「私の名前は橙です！八雲紫様の式神である八雲藍様の式神です！」
何だかやけにややこしいな。八雲家にも色々あるんだろう。何も言わないことにし

よう。

「よろしくな、そして本題だが何故かさっきから進んでないのはお前の仕業か？」

尋ねると胸を張って猫娘が答える。

「まあ一応これでも式神ですからね！ですがやったことと言ってもちょっとだけ左側に曲がってしまうようにしただけですけどね」

なるほど、つまりは同じ場所をぐるぐる回っていたのか。

「それで……そんなことをして私たちを妨害した理由はなんですか？」

妖夢が尋ねる。そこまでは良いが左手を刀に若干かけるのはやめろ。怖いから。

「私が妨害したのは、藍さまに言われたからですね。それ以下もそれ以上もありませんよ」

猫娘はさも当然のように答える。式神だから理由を説明されずとも命令通りに動くのは当然ということだろう。と、言うことはその理由に関しては何も聞かされていないと思われる。

「それで？どうしたら通してくれるんだ？」

「それはもちろん……」

猫娘は左手のデュエルディスクを構える。デュエルディスクは派手な駆動音とともに変形し、展開する。

「じゃあ俺でいいか？」
　隣の妖夢に尋ねる。
「構いませんよ」
　彼女は邪魔にならないように横に退く。
「それじゃ……」
　俺はデュエルディスクを展開しながらバッグの中からデッキを取り出して設置する。
設置されたカードは小気味よい音とともにシャッフルされる。
「「デュエル！」」
　遊太　ＬＰ４０００　ＶＳ　ＬＰ４０００
「先行は俺だ、ドロー！」
　ふむ、一昔前なら間違いなく《レスキューキャット》を使っていたに違いない。猫的な意味で。そして物凄く強かった可能性すらある。
　……今でよかった。
「俺は手札から、荒魂を召喚！そして効果発動！デッキから阿修羅を手札に加えるぜ。そしてエレメントの泉を発動。そしてターンエンド。その時に荒魂は手札に戻る。そしてエレメントの泉の効果でライフを５００回復だ」
　遊太　ＬＰ４０００→４５００

遊太　ＬＰ４５００　手札６　魔法罠　エレメントの泉
「なるほど、あまり放っておくとライフをどんどん回復されてしまうわけですね。それにスピリットにはフィールド一掃なんかもありますし、時間をかけると負けてしまうでしょうね」
小さい子供のようだからそこまで難しく考えなくてもいいかなと思ったが随分利口そうで、割と手間がかかりそうだ。
「とにかくドローです。それじゃ、私は手札から、ミスティック・バイパーを召喚します！そしてミスティック・バイパーをリリースして、カードをドローします！引いたカードがレベル１なら相手に見せて、もう１枚ドローします！私が引いたカードはビッグ・ワン・ウォリアーです！なのでもう一枚ドローです！そしてターンエンド。手札が多いので黄泉ガエルを捨てます」
うげ、レベル１デッキなのは間違いないし黄泉ガエルが墓地に落ちたのは痛い。
橙　ＬＰ４０００　手札６
「俺のターン、ドロー。うーむ、とりあえず荒魂召喚だ。効果で羅刹を手札に加える。そしてバトルフェイズ！荒魂でダイレクトアタック！」
燃え上がっているような魂のモンスターが、なんだか良く分からない波動的なものを放つ。

「くっ……けれどまだまだです！」

　橙　ＬＰ４０００→３２００

「それでカードを2枚セットしてターンエンドかな。でさっきと同じ処理」

　遊太　ＬＰ４５００→５０００

　遊太　ＬＰ５０００　手札６　魔法罠２　エレメントの泉

　うむ、お互いにモンスターのいない変わった対決になったな。

「よしっ、ドローします！まずは黄泉ガエルを蘇生します。そして手札から、音響戦士ベーシスを捨てて、ビッグ・ワン・ウォリアーを特殊召喚します！」

「音響戦士ベーシスですか……ですが墓地に送らなくても良かったのでは？って遊太さん、なんでそんなに頭を抱えているんですか！」

　妖夢はよく分からない顔をしている。きっと妖夢は第2の効果でも使うのかと思っていることだろうが、そうじゃない。

「……いいかい妖夢」

「何ですかその子供を諭すような口ぶりは」

「相手は猫娘だね。そしてミスティック・バイパーがいるということはレベル1に偏っているんだろうね……」

「は？どういう……」

「まあ見てなさい。あーどうぞ続けて」
　妖夢はさっぱりらしい。
「あ、はい。では私は金華猫を召喚！金華猫は墓地からレベル1のモンスターを蘇生出来ます！音響戦士ベーシスを蘇生です！そしてベーシスの効果で自身のレベルを4上げます！そしてレベル1の黄泉ガエル、レベル1のビッグ・ワン・ウォリアーに、レベル5となった音響戦士ベーシスをチューニング！ガラクタ山の強靭な悪魔よ、その腕で敵を薙ぎ払え！シンクロ召喚！スクラップ・デスデーモン！」
　ガラクタを組み合わせて出来た悪魔がフィールドに立つ。
「そしてバトルフェイズ！デスデーモンと金華猫でダイレクトアタック！」
　太い腕が振りぬかれる。そして猫が飛びかかってくる。
「ぐうっ……！」
　遊太　ＬＰ５０００→１９００
「これでエンドフェイズへ移行します」
「……そんなに頭を抱えることですか？確かに展開はされましたが」
　妖夢が首をひねっている。
「あの金華猫は俺の使ってるカードと同じく、スピリットだ。そしてあれが手札、ベーシス、黄泉ガエルが墓地にいるだけで様々なレベルのシンクロが出来て、ミスティック・バ

イパーがいればカードカー・Dみたいなことまで出来る。つまりほぼパーツが揃った状況ってことだ」
「なるほど……何度も同じことをされるということですか」
「それで私はターン終了です！金華猫が手札に戻ってきます」
「あ、回復な」
　遊太　ＬＰ１９００→２４００
「ちぇっ、忘れてくれればよかったのに……」
「おいこら。なんてこと言ってるんだ」
　橙　ＬＰ３２００　手札５　モンスター　スクラップ・デスデーモン（Ａ２７００）
「俺のターン！さてどうするか」
「……まさか勝てないとか言わないですよね？」
「いやぁまさか。まずは羅刹を召喚。効果で手札の荒魂を見せてスクラップ・デスデーモンをバウンスだ。そしてエレメントの泉で回復」
　遊太　ＬＰ２４００→２９００
「そしてダイレクトアタック！」
　鬼神がその手に持つ剣を猫の娘に振り下ろす。
「あいたた……」

橙　ＬＰ３２００→１７００
「ですがただでは転びません！ダメージを受けた時、手札から冥府の使者ゴーズを特殊召喚です！そして同じ攻撃力のトークンを特殊召喚します！」
「うげげ、引いてたのか。そんじゃカードをセットして、ターンエンドかな。そして戻ってきて回復っと」
遊太　ＬＰ２９００→３４００
遊太　ＬＰ３４００　手札６　魔法罠３　エレメントの泉
「じゃあ私のターンです、ドロー。まずは黄泉ガエルが特殊召喚ですよ。そして金華猫を召喚！そしてベーシスを特殊召喚！レベルを上げる効果を発動して、レベル５になります。そしてレベル１の黄泉ガエルにレベル５のベーシスをチューニング！お願い！天狼王　ブルー・セイリオス！そしてバトルフェイズ！まずは金華猫でダイレクトアタック！」
「っと、これを全部通すわけにもいかないな。手札のバトルフェーダーの効果だ！攻撃を止めてバトルフェイズを終了だ」
飛び出した悪魔の体に付いている鐘が鳴ると、敵の動きが止まる。
「むむむ……ではカイエントークンを守備にして、エンドフェイズ。金華猫が戻ってきて、エンドです」

「んじゃ回復回復っと」

遊太　ＬＰ３４００→３９００

橙　ＬＰ１７００　手札５　モンスター　冥府の使者ゴーズ（Ａ２７００）天狼王ブルー・セイリオス（Ａ２４００）冥府の使者カイエントークン（Ｄ１５００）魔法罠０

～～

さて、藍様から直々に命じられて来ましたけど、非常にやりづらいですね。命じられたことは、この外来人を止めて時間稼ぎをしろとのことなので負けても別に構わないんですけど、やっぱり勝ちたいですね。

相手のデッキは【スピリット】で、おそらく時間を稼いでおいて上級を召喚して決めるタイプじゃないでしょうか。

この状況から返されるとすればおそらくフィールドのモンスターを全て破壊する砂塵の悪霊でしょう。ですが私の手札にはエフェクト・ヴェーラーがあります。なのでその方法でやられることは無いですが……。

気になるのは彼のあの余裕の表情。もうすでに勝ちを確信したようです。

一体どんなことをしてくるんでしょうか……。

「よーし、おれのターンだ。ドロー。まずは和魂を召喚」

あの和魂の追加召喚の効果は、エフェクトヴェーラーで止まらない効果ですからここは止められませんね。

「そしてバトルフェーダーをリリースして、砂塵の悪霊を召喚！そして砂塵の悪霊の効果！」

ここは使わざるを得ませんね。

「ではエフェクト・ヴェーラーを手札から捨てて効果発動！砂塵の悪霊の効果を無効にします！」

これでとりあえずは止まりますね。エフェクト・ヴェーラーを受けたスピリットモンスターがエンドフェイズにそのまま移行した場合、ターンプレイヤーがまず効果を適用するか選び、適用したら手札に戻らず、適用しなかった場合逆のプレイヤーがヴェーラーの効果終了かどうかを選び、適用すれば手札に戻り、しなければターンプレイヤーから適用したこととなり、手札に戻らなくなります。再び金華猫を使えば処理できるので、おそらくなんとかなるでしょう。

「……」

相手は下を向いたままですね。これは何も……。

「くくく……あっはっは！」

突然笑い出しました。

「これであなたは召喚は出来ません。これ以上何も出来ないでしょう?」
男は人差し指を出して、ちっちっちと揺らす。
「そりゃまあ通常召喚は出来ないな。……それだけならな」
へ……?
私はフィールドを見直す。相手フィールドには魔法罠がある。
魔法罠?
そこで私は思い出す。一斉を風靡したあの罠のことを。
「罠カード発動!血の代償!そのままライフを払って羅刹を召喚!効果で荒魂を見せてセイリオスをバウンス!さらにライフを払い、阿修羅を召喚!さらに払って荒魂を召喚!効果で不死之炎鳥をサーチ!そしてライフ払って召喚!」
「あわわ……」
物凄い展開力である。流石血の代償ですね。ですがそれは身を切るようなものですから本人へのダメージは大きいでしょう。
遊太　ＬＰ３９００→３４００→２９００→２４００→１９００
「ぐ……これでバトルフェイズ!カイエントークンを阿修羅で攻撃!そしてゴーズを砂塵の悪霊で攻撃!そして荒魂と不死之炎鳥でダイレクトアタックで止めだ!」
迫りくるモンスターたち。私には残念ながら対策はありません。

「く……きゃあ！」
橙　ＬＰ１７００→１６００→８００→０
～～
ふぅ、なんとか勝つことが出来た。
「妖夢、終わった……っと」
最後にライフを削ったからか、足元が崩れる。
「ちょっと、大丈夫ですか？無茶しないでくださいよ」
妖夢が手を出してくれて、倒れそうな俺を支えてくれる。
「すまん、なんか気持ち悪くなってきた。ライフを自分で削っていくとああなるなんて知らなかった」
何というかＤホイールで左右に揺らし続けたみたいな気分だ。
「……吐かないでくださいね？」
心配してくれたのは一瞬か……。妖夢の視線が痛い。
「さて、それじゃ邪魔するのはやめてもらおうか」
俺は橙の方を向いて落ち着いて立ち直る。
「負けたからには仕方ありませんね。それでは、良いデュエルでした」
橙はぺこりとお辞儀をして、立ち去ろうとする。

「や、ちょっと待った。何で俺達の妨害をしたんだ？」
そういえば謎のままだ。
橙は振り返って笑いながら一言残す。
「それは私には知らされてません。なんせ式神ですからね」
……やっぱ複雑な家庭なんですかね。
「……さて、妨害も無くなったのでそろそろ行きましょう。もうすぐ到着しますし、アリスさんの家で休めますよ」
「そうだな……でもあんまり動くと……」
俺の顔が青くなると同時に妖夢の顔も青くなっていく。
「ぎゃーっ！やめてください吐かないでくださいーっ！」
森の中に、いたいけな少女の悲鳴が響き渡った。

舞い踊るレインボー・ヴェール

アリスの家に向かっていた俺と妖夢だったが、何故か一向に進まない。その原因は橙という猫の少女の幻術のせいであった。デュエルに勝てば先に進ませてくれるということで、俺は橙とデュエルし、見事勝利した。そして橙は幻術を解いてくれたが、その意図は分からないままであった。

……しかし、俺らにはもう一つ大きな問題が起きていた。

「……マジで持たないヤバい」

「もう少し我慢してくださいあと少しですから！」

ライフを一気に払ったせいか、強烈な酔いのような感覚に襲われていた。

つまり、吐きそう。

細い少女に背負われて運ばれる情けない男がここにいた。というか妖夢、力あるな。

そこから古めかしい洋館が見える。ゆっくり見てるわけにもいかず、妖夢は俺をおろし、ドアノッカーを連打する。しばらくしてドアが開かれる。

「妖夢？そんなに急いでどうしたの？」

「すみませんアリスさん！ちょっとこの人にトイレ貸してあげてもらえませんか！」

アリスさん、と呼ばれた金髪の少女は俺の顔色を察して
「そこの突き当たりよ」
と教えてくれた。
俺は妖夢を置いて急いでトイレへと向かう。その辺で吐くわけにはいかなかったのはどうも周辺のキノコに栄養となるものを与えてしまうと大変なことになるのと、処理したくないという二つの理由からである。全く迷惑な森だ。
しかしきっと吐けばずいぶん楽に……うっ、話していたらヤバくなってきた。
〜〜
遊太さんは間に合った……と信じたい。
「けれどいきなりどうしたの?こんな森に何かご用事?」
アリスさんは私の前に紅茶のカップを置き、ソファに座る。
「いえ、用事があるのは私ではなくて、先ほどの彼の方です。私は付き添いで」
私は紅茶をすする。ふむ、やはりアリスさんの紅茶は美味しい。
さりげなく甘めのミルクティーが好きなことを察してくれるところがアリスさんらしい。
「あ、その彼だけど……」
アリスさんが何かを思い出したような顔をする。

「血の代償でライフを一気に払ってああなったんですよね……」
外来人にしては丈夫のような気もしますが。本当に普通の人間なんでしょうか。
「ああ、それで。引き金となったのはそれね」
アリスさんが妙なことを言う。「引き金」？
私がよく分からなさそうな顔をしていたのか、アリスさんが答えてくれる。
「元々あの森は魔法のキノコの胞子がばら撒かれていて普通の人には危険よ。彼はライフを大量に消費したことで、肉体的に弱ってしまった。そこにあの森のキノコの胞子を吸ったから、胞子にやられちゃったみたいね」
「あ……」
全く考えてもみなかった。私は別に胞子の被害を受けないので気にしてもいなかった。
彼がああなったのは私のせいでもある。至らなかった自分に腹が立つ。
私はやっぱり、未熟者なのか。
「簡単な治療くらいはしてあげるわ。わざわざ私のところを訪ねてくれたんだし、そこまで激しくやられてるわけでもなさそうだし」
「……ありがとうございます」
私は頭を下げる。

「けど……お代はいただくわ」
「えっ？」
下げた頭を急に上げる。アリスさんってお代を取るような人でしたっけ？
「もちろん、コレよ」
そこにあったのは、遊戯王のデッキだった。
「なるほど……もちろんお受けします」
「「デュエル！」」
アリス　ＬＰ４０００　ＶＳ　妖夢　ＬＰ４０００
「それじゃ、お願いするわ。私のターン、ドロー！私は、モンスターをセット、カードを２枚セットしてターンエンドよ」
アリス　ＬＰ４０００　手札３　モンスター１　魔法罠２
私の記憶が正しければアリスさんはガジェットなどのデッキを使用していたような気がする。なのでモンスターセットというのは事故、もしくは新しいデッキか。
「では、私のターンですね。ドロー。手札から、ライトロード・アサシン・ライデンを召喚！ライデンは一ターンに一度、デッキから2枚を墓地に送り、その中にライトロードがあれば攻撃力を２００上げることが出来る！デッキから落ちたのは……終末の騎士と大嵐ですか」

「それじゃ攻撃力は１７００のままね」
「はい。ではバトルフェイズに入ります！ライデンでセットモンスターを攻撃！」
「残念、セットモンスターはゴーストリック・キョンシー！守備力は１８００よ」
　黒い肌の男の攻撃は、中国の妖怪に弾かれてしまう。
「くっ……」
　妖夢　ＬＰ４０００→３９００
「さらにリバース効果！デッキから私はゴーストリック・ランタンを手札に加えるわ」
　ゴーストリックは裏側守備表示にしたり、直接攻撃を止めたりするカードが多い。
　つまり、非常に相性が悪い。
「エンドフェイズにライデンの効果発動！デッキから2枚墓地に送る！落ちたのは……
2枚目のライデン、増援……」
　妖夢　手札５　ＬＰ３９００　モンスター　ライトロード・アサシン・ライデン（Ａ
１７００）魔法罠０
「ちょっとついてないようね……でも容赦はしないわ。ドロー。手札から、ゴースト
リックの魔女を召喚！そして効果を発動！ライデンには裏側守備になってもらうわ」
「ライデンの守備力は１０００……」
「そうよ、バトルフェイズ！魔女でセットモンスターを攻撃！」

魔女に箒を叩きつけて、暗殺者はのびてしまう。そんなんでいいのか。
「メインフェイズ2、ゴーストリック・ハウスを発動！これにより裏側守備表示のモンスターを攻撃できなくなり、ゴーストリック以外のモンスターの戦闘によるダメージを半分にするわ。そしてゴーストリックの効果で魔女とキョンシーを裏側守備表示に変更！私はターンエンドよ」
アリス　手札3　ＬＰ４０００　モンスター2　魔法罠2　ゴーストリック・ハウス
「私のターン、ドロー！」
私は引いたカードを見る。そしてすぐに発動する。
「私が引いたカードはサイクロンです！ゴーストリック・ハウスを破壊します！」
「そうはさせないわ。罠カード、ゴーストリック・アウト！私は手札のゴーストリック・ランタンを見せ、効果発動！このターン、ゴーストリックと名のついたカードと裏側守備モンスターは効果の対象にならず、破壊もされない！もちろん、フィールド魔法もそのうちよ！」
巻き起こった風は勢いを失い、結局何も飛ぶことはなかった。
「く……では終末の騎士を召喚！効果でデッキから不死武士を墓地へ。そしてバトルフェイズ！アリスさんに直接攻撃！」
「手札のランタンの効果発動！直接攻撃を無効にして、裏側守備で特殊召喚！」

「……カードをセットしてターンエンドです」
　妖夢　手札４　ＬＰ３９００　モンスター　終末の騎士（Ａ１４００）　魔法罠１
「私のターン、ドロー。ランタン、魔女、キョンシーの順で反転召喚！キョンシーの効果でマミーを手札に。そしてマミーを召喚！効果でさらにスケルトンを召喚！レベル３のマミーとキョンシーでオーバーレイ！２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！現れろ、ゴーストリック・アルカード！そして効果発動！あなたのセットカードを破壊するわ！」
「破壊されたのは白銀のスナイパーです！」
「ううん……まあいいわ、バトルフェイズ！マミーで終末の騎士を攻撃！さらに他のモンスターでダイレクトアタック！」
「直接攻撃は通しません！手札からガガガガードナーを守備表示で特殊召喚！」
　それぞれの攻撃は対して痛くはないのだが、流石にこれだけ受けると痛い。
　というかライフがなくなってしまう。
　妖夢　ＬＰ３９００→３８００
「ガードナーを倒せるモンスターはいないわね……メインフェイズ２、アルカード以外のモンスターを全て裏側に変更し、ターンを終了するわ」
「エンドフェイズに白銀のスナイパーを特殊召喚し、カードを１枚破壊します！私が破

壊するのはセットカードです！」
「破壊されるのはゴーストリック・ロールシフトね」
　アリス　ＬＰ４０００　手札２　モンスター４　ゴーストリック・アルカード（Ａ１８００）
「私の、ターン！……ガードナーとスナイパーでオーバレイ！現れろ！Ｎｏ．３９　希望皇ホープ！」
「来たわねホープ、でもホープで一体どうするつもり？」
「……さらに、手札から魔法発動！ＲＵＭ―ヌメロン・フォース！私はヌメロン・フォースの効果でホープをランクアップします！」
　手札から発動した見覚えのない魔法カードが、不思議な輝きを見せる。その輝きに包まれた戦士が輝く。そして光の中から、紅の腕が飛び出す。
「現れろ！ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイ・ヴィクトリー！」
　勝利の名を関した戦士がフィールドに現れる。
「そしてバトルフェイズ！ホープレイ・ヴィクトリーで、アルカードを攻撃！ホープ剣・ダブルヴィクトリー・スラッシュ！」
　４本の剣を構え、戦士が吸血鬼に向かってその剣を振り下ろす。
「その攻撃は止めるわ。手札からランタンの効果発動！」

しかしその剣はカボチャのお化けに止められる。
「残念だったわね、せっかくの攻撃を止められて……？」
アリスさんの余裕の表情が、私を見て疑惑の目に変わる。
私は、笑っていた。
「……私はそれを待っていました！速攻魔法発動！ダブル・アップ・チャンス！攻撃を止められたモンスターはもう一度攻撃できます！そしてダメージステップに攻撃力は倍になります！そして再びホープレイ・ヴィクトリーで攻撃！」
「でも、それで倒せるのはアルカードだけ！私のライフは残る！そして私のターンに一斉攻撃して終わりよ！」
「いいえ、このターンで終わりです！ホープレイ・ヴィクトリーの効果！戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にし、その分の攻撃力を得ます！ヴィクトリー・チャージ！」
ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイ・ヴィクトリー　Ａ２８００→４６００
「くっ……でもゴーストリック・ハウスの効果でゴーストリック以外のモンスターによる戦闘ダメージは半分に……えっ!?」
アリスさんはどうやら気が付いたようだ。
「ヌメロン・フォースは、モンスターを特殊召喚したあと、特殊召喚されたモンスター以外のフィールドのカードの効果を無効にします」

「つまり……戦闘ダメージはそのまま……」
「これで止めです！ホープ剣・ダブルヴィクトリースラッシュ！」
ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイ・ヴィクトリー　Ａ４６００→９２００
「い、いやあああ！」
アリス　ＬＰ４０００→０
振り下ろされた剣の衝撃で、アリスさんは吹き飛ばされる。
「ありがとうございました。楽しいデュエルでした」
「攻撃力９０００だなんて、そんな攻撃力出るのね……」
アリスさんがスカートを払いながら立ち上がる。
「確かに機械族でもないのに９０００を超えるのはなかなかないな」
「遊太さん、平気なんですか？」
横から声をかけられて振り向くと、赤い帽子の男が立っていた。
「ああ、デュエルを見ていたら落ち着いた」
そんなことで治るわけないでしょう、と言おうと口を開きかけると
「……本当に影響を受けてないみたいね……貴方人間なの？」
アリスさんが化物でも見るような目で彼を見ていた。
「人間であるのは確かだ」

やっぱりこの人は変な人だ。確信した。
それにしても……。
私はデッキのカードを1つ取り出す。
それは「RUM―ヌメロン・フォース」。
私のデッキに入っていたのは、「RUM―リミテッド・バリアンズ・フォース」だったと思うのだが……。
「さて、調子もよくなったし本題に入ろうぜ」
「ああ、そうでしたね」
遊太さんが話を始めるようだったので、カードをしまい、私はその疑惑について考えるのをやめたのだった。